



野生 の ライオン

捨てられた人工知能

黒川 文

目次

1. ライオン	
1. ライオン	3
2. 大学	
2. 大学	19
3. 大使館	
3. 大使館	33
4. ともだち	
4. ともだち	45
5. 九死に一生	
5. 九死に一生	63
6. 逡巡	
6. 逡巡	83
7. 野生のライオン	
7. 野生のライオン	93
8. 国防総省	
8. 国防総省	107
9. ライオンの咆哮《ほうこう》	
9. ライオンの咆哮《ほうこう》	115
10. 窮鼠《きゅうそ》猫を囓む	
10. 窮鼠《きゅうそ》猫を囓む	125
11. 畏	
11. 畏	133
12. イッツ・オーバー	
12. イッツ・オーバー	145

1. ライオン

1. ライオン

「おお」

パソコンの画面が何度か明滅を繰り返した。

ただ、それだけの出来事だったが、ネットの動きを監視していた芽衣《めい》は直感的にファイア・ウォールにロックを掛けた。掛かったのは小さな本体に大きなデータがくっついたウイルスだ。データをパソコンに持ち込もうとしたのか、これから持ち出そうとしたのかは、調べてみないとわからない。だが、自分の仕掛けた罠にまんまと掛かった獲物を見て、十五才の少女はにんまりと微笑んだ。

黒澤芽衣にとりパソコンは宝物だった。今のところ生き甲斐と言ってもいい。

一ヶ月前に都立緑が丘高校に入ったにも関わらず、誰もお祝いしてくれない中で、唯一、兄から、いらなくなったパソコンをもらったときには素直に喜んだ。

芽衣は、重たい段ボール箱を自分で担いで部屋に持って行き、兄貴に手伝ってもらって据え付け、ネットワークへの接続だけお願いした。インターネットは、兄貴が東都大に合格したときに親父が喜んで、彼の要望通り光回線を通してしている。芽衣の回線はそこから屋内ルーターで分岐して使わせてもらうだけだった。

このあと、何にもわからず、一から手取り足取り教えて欲しかったが、パソコンをただでもらっている引け目もあり、自分でマニュアルを見ながら操作を覚えた。しばらくは、マニュアルに従っていたが、そのうち、不法侵入により欲しいソフトが手に入ることを知り、暗証番号の解読からはじめて、あまり日数の経たないうちにこんなことばかり詳しくなってしまった。技術力もない「なんちゃって」ハッカーなのだ。

当初、兄貴は芽衣を適当に手足にするつもりのように思えたが、目論見は外れた様で、つまらないネット遊びに興じている芽衣を見放して何も言わなくなった。

「お兄ちゃん！」

芽衣がパジャマ姿のまま、健一が調べ物に向かっている横にやって来た。ちょっと、舌打ちしながら振り向いた。

「今忙しい、それに、女の子なんだから兄貴の前でもちゃんとしろよ、乳首が見えてるぞ」

「え、嘘、やだ、見ないでよ」

「馬鹿、見えてねえよ。まあ、見えても何にもなさそうだが」

確かに胸はなかった。

「もう、変なこと言わないでよ。あのさ、話は変わるんだけど、新種のウイルス君に興味はないかな、安くしておくよ」

「新種のウイルスだあ？ ウイルスソフトに掛かったんじゃないのか？」

「違うよ、今のところ、どんなソフトも素通りだよ。でもね、罠を掛けたのだ」

健一の目つきが少しだけ鋭くなった。芽衣は続けた。

「あのね、他人のパソコンにネットを介して侵入して、CPUの空き時間に計算をさせてデータだけ引き上げるの。データの送り先はね、東京都文京区まで突き止めたんだけど」

文京区本郷は、健一の勤め先の東都大理学部所在地だった。

「待て、その問題から手を引くんだ。お前の身が危ない」

芽衣は健一の顔を見てふふん、とせせら笑った。

「ほら、引っ掛かった。文京区なんて嘘よ。プログラムを作った人に特徴があったから、お兄ちゃんのところの学生と推理したの。でも、何なのこんな計算、大学のコンピュータを使えば一発じゃないの？」

健一は今度は芽衣をにらんでいた。

「大人をからかうと今にいたい目に合うぞ。それだけは忠告してやる。この計算プログラムに関しては今のところ極秘だ。芽衣には感づかれたが、それは俺のパソコンと連動できたからで、他の条件では絶対に検出できないようにしてある」

「そうなの、じゃあ、口止め料」

芽衣は手を出したが、健一は却下した。

芽衣はふくれた。

まあいいか、と、健一は折れた。兄から見ても結構可愛いのがあった。

「え、五千円もくれるの」

芽衣の喜びように健一は意外な顔をした、もっと吹っかけられるかと思っていたようだった。

「その代わり絶対誰にも言うなよ」

「うん、うん」

「あの理香とか言う友達にもだぞ」

「わかったわよ、じゃあね」

健一は、つまらないことに時間を浪費したと言わんばかりに、再び自分の机に向かい始めた。

ゴールデンウィークが明けて、芽衣が高校に行こうとすると、七時頃出掛けたはずの健一が戻ってきた。忘れ物かなと芽衣が隠れて観察していると、物置から梯子を出して壁に掛けた。

ぼろい家だが都内墨田区業平《なりひら》町一丁目の一戸建てでおじいさんが建てたものをそのまま住んでいた。ぼろくても、都内への通勤通学には便利な場所でここ以外に考えられない。健一は文京区本郷にある東都大学理学部に歩いて通勤していたし、芽衣も、ここから南へ八百メートルの十間川近くにある緑が丘高校に歩いて通っている。

芽衣が隠れて見ていると、健一は、光ケーブルの端子箱を開けて、端子を外してし

まった。

「あっ」

と、芽衣が叫んで、健一が気付いた。

「見ていたのか」

「見ていたのかって、別に監視してたわけじゃないけど、学校に行こうとしたらお兄ちゃんが梯子出して……えーん」

「哀れな泣き方をするんじゃない。ちょっと、まあ、都合があつてしばらくネットとは隔離する。それだけだ」

「ちょっとやめてよ、あたしの唯一の楽しみなのに」

「そんなこと言うな、若い娘が、あんな不健全な生活をするんじゃない。じゃあ」

「あ」

健一は行ってしまった。後ろ姿を見送って、左手のGショックを見ると八時十分を過ぎていた。芽衣はあわてて駆けだした。

高校に着いても、教室目指して一目散に走った。

この高校には制服がないので、おしゃれな子はどこもおしゃれだし、芽衣のようにジーンズだけの子は年中同じ格好をしている。本当のところは芽衣も可愛いスカートが欲しいのだが、毎日同じ格好ではいけないので、ある程度洋服の数がないと、こういうことは出来ない。

友人の渡辺理香は、中学からの友人で、この高校でも偶然同じクラスになった。彼女の父親は大手商社の部長で、芽衣より格段に裕福そうだった。

「おっはよ、あたし遅刻？」

「いや、まだ三分セーフみたい」

と、理香は入学祝いに親からもらった時計を見て言った。

「あ、そうだ、もうすぐあたしの誕生日なのよ」と、芽衣は思いだしたように言った。

「ああ、ゴールデンウィーク明けだったね、八日だったっけ」と、理香が尋ねた。

「ありがとう、よく覚えててくれるわね、理香だけよ。五月八日よろしく」

「何がよろしくよ。家族は？」

「だーれも覚えてないよ」芽衣は投げやりに答えた。

「かわいそ、あ、先生来たよ」

そう言って二人同時に席に着いた。渡辺家では理香は一人娘なのでかなり大事にされていることを芽衣は知っている。何度も遊びに行っているが、理香の友人と言うだけで歓迎されてしまうのだ。反対に芽衣の家では健一の友人は歓迎されるが、芽衣の友人はそれほどでもない、と芽衣は僻んでいる。

教壇に立った担任から、連絡事項があった。

「えー、皆さん静かに、大変残念なことです、この連休中に本校の生徒が補導されるとい、大変に情けない事態となりました」

「えー」

芽衣も一緒に叫んだ。

「静かに！ 詳細は新聞にも少し載ったので、知っている人もいますが、本人の処分と共に、制服制度の復活を検討中です。創立時から、平成十五年まで採用されていた

ブレザーのタイプです、生徒会と保護者の要請で現在廃止になっていたのですが……」

芽衣は理香に聞いた。

「ね、その話知ってる？」

「制服のこと？」

「うん」

「昔の話だけど、創立時はブレザーの制服があったんだけど可愛くないからって、生徒会がPTAを巻き込んで廃止運動したらしいのよ。それで平成十五年以降の生徒から私服通学でいいようになって現在に至ってるらしいよ」

「あたしとしては、制服の方がいいよ」

「あんたにしては、ずいぶん体制派なのね」

「だって、洋服なんて買ってもらえないもの」

「あちゃー、かわいそ。それで、その補導事件で風紀の乱れを追求する人もいて、校長が昔の制度を復活させるような発言をしたらしいのよ」

「補導事件で、一体何したの」

「あんたんち、新聞取ってないの？ 新宿で援助交際しようとして検挙されたらしいよ。売春防止法違反の現行犯」

「うげ、現行犯でことは刑事に声を掛けたとか？」

「潜入捜査員らしいよ」

「ぎゃはは、馬鹿だね」

芽衣が大きな声を出し、教師から怒られた。

理香が学校の生徒まんべんなく付き合っていて、色んな情報を知っているのに対して芽衣の親しい友人は理香しかいない、それで、情報源が限られているのだ。ネットに対しての執着心もこういうところから生まれてきている。

教師が出て行った後、授業までの五分ほどの間に、生徒会の役員らしい三年生徒が入ってきた。

「皆さん、注目してください。すでに噂が流れていると思いますが、学校側は制服制度の復活を画策しています。問題は服装のみではなく……」

芽衣はその演説を冷やかに見ていた。

いつの世の中にも、民衆を扇動して体制に反抗させようという輩がいる。自分では先頭に立たないくせに、民衆を最前線へと送り込もうとするのだ。例え自由の代償であっても芽衣は大嫌いであった。基本的にデジタルな人間なのだ。しかし、この日は署名活動だけであった。理香から、制服反対の署名が回ってきて、内心は制服賛成なのに、義理で署名してしまった。

——こういうことをしていつも後悔してしまう。

我ながら情けないと思いつつも、今回も流されてしまった。

「ね、昔の制服ってどんなの？」

「知らない、制服世代の人ってもう成人してるんでしょ」

「そう」

そう言うと、前の席の山中志乃《しの》が振り向いて、当時はこんな感じよと、イラストを見せてくれた。志乃は眼鏡を掛けて、制服っぽいブレザーが多い子だ。本当にど

こかの制服を買ってきているようだった。

「へえ」

イラストによると、紺色のブレザーに同色のスカート、黒の靴と季節の変わり目のみベスト、ブラウスは白。夏服は半袖。尚、夏冬とも左胸に校章バッジまたはワッペンをつけること。これなら、文句はないと芽衣は思った。今の汚いジーパンスタイルより格段に可愛い気がした。

「ねえ、山中さんって漫画家志望なの？」

理香が芽衣の袖を引っ張った。

「ううん、イラストレータよ」

芽衣は謝っておいたが、こういうところで知らず知らず敵を作っていくんだなと思った。

「ねえ、それどこかの制服なの？」

理香はこういうことを気軽に聞ける子なのだ。

「うん、今日は京都女学館中等部のブレザー」

——中学校かよ、と芽衣は馬鹿にした。

「今日はって、何種類もあるの？」

「だって色々ある方が楽しいじゃない、それに高校生のうちしか着られないし」

——色んな奴がいるんだな。でも、強制されると絶対着ないタイプだな。

その日の午後、六限目にコンピュータ実習があった。クラス全員三十五名が三階の実習室に移動した。最近始まったばかりの授業らしく、校舎の割に設備は新しかった。一人一人、ログイン用IDとパスワードを書いたカードをもらい、好きな端末に座った。芽衣はもちろん、理香の隣だ。

理香はアナログ人間のようで、スポーツも勉強も出来るくせに機械に弱かった。

「芽衣って、こういうときだけいいわね」

「失礼ね」

確かにこれがなければ、完全に何も出来ない。理香は手先が器用で、料理や裁縫、蛙の解剖から化学実験に至るまでこなせるのに、芽衣は蛙に近寄ることも出来ないし、裁縫をすれば手が血まみれになってしまう。辛うじて出来る料理はゆで卵しかない。

もっとも、理香がスポーツが得意なのは体格がいいせいだと芽衣は思っていた。身長は百六十五センチと芽衣より七センチ高いし、体重でも十キロくらい理香が上まわっていた。もちろん芽衣が細いだけであるのだが。

そんな理香を尻目に、芽衣は素早くIDとパスワードを打ち込み、ログインして課題であるネットワーク接続を簡単に済ませた。ふふんと、周りを見ると全員の作業が止まっていた。男子も一部がざわついていた。

「ちょっと芽衣、見てくれない？ 動かないの」

「半角と全角文字を間違えているんじゃないの」

芽衣がのぞき込むと、少し表示がおかしかった。点滅しているはずのカーソルがときどき止まっている。

同じ機種で同じケーブルを使っているのに、速度が遅いのはおかしい。

「どうして芽衣の端末だけ動くのよ」

——正規の動作をさせていないからだ。

手間を省くために毎回の実習で共通の操作をプログラム化してフロッピーに入れていた。今回もそれを使っていたのだ。

「ちょっといいかしら、一旦電源を落とすわよ」

芽衣は、理香の端末の電源を切り、フロッピーを差し込んだまま再起動した。ブブン、ブンとうなり声を上げて、端末ではなくパソコン単体として動作を始めた。今度は動作は速かった。

「芽衣、直ったの？」

「今は、パソコン単体で動いているの。他のを調べるわ」

段々と、二人の周りに他の生徒と教師が集まってきた。

「おい、黒澤、職員室の他の端末も動作がおかしいらしい。お前得意なのか」

担当の小林先生がそう聞いた。得意も何も、生き甲斐です、と言いたい芽衣だったが、こういうときにものが言えない性格だった。はあ、まあ、と口を濁す。芽衣は単体パソコンから逆にこのネットワークへの侵入を試みた。開いているポートから通信プログラムを侵入させてインストールさせてしまう。その後は、こちらの通信ソフトから自在に情報を引き出すことが出来るのだ。

芽衣が侵入し、相手のファイア・ウォールが反応したが、開けたポートに塞がっていると言う偽装信号を発信してこちらを探知できなくした。グラフィック画面を開いたら、現在高の校のメインサーバパソコンと、職員室の二十台の端末、実習室の五十台、学年主任の三台、校長室の一台が画面に浮かんだ。実際には校長室の端末には他の職員はアクセスできないことになっている。芽衣の画面にもアクセス制限ありと警告表示が出た。

「黒澤、本体は正常なのか？」

「いいえ、本来のオペレーティングシステムとは別のプログラムによって占拠されています。要するに乗っ取られています」

「どうすればいいんだ」

「インターネットとつながらなくていいなら、このまま再起動を掛けてしまえば元通りです。ですが、メールも使えなくなりますので、今侵入しているこのプログラムですね、これを排除するプログラムを設置してから再起動した方がいいですね」

「出来るのか」

「さあ」

「おいおい、しっかりしてくれよ」

——そんなこと言われても、責任者じゃないし。

「ねえ、芽衣、やったげなさいよ」

と、理香もけしかけた。芽衣も普段はいいところがないから、たまにはかっこいいところを見せておくかと、色気を出した。

侵入している相手に何となく見覚えがあった。

以前、芽衣のところにも侵入しようとして罠に掛けたあのウイルスだった。しかし、芽衣が中身を解析しようとして、メインサーバーの内部を探索しても本体が見付からなかった。

——どうなっているの？

芽衣は、本体らしき実行ファイルの一部に消去を掛けた。これで動作が止まるはず、だった。しかし、ウイルスは芽衣の意志とは裏腹に動作し続けた。プログラムの一部が欠如しても動作し続けることが出来る。これまでに見たことのないタイプだった。要するに現在システムを乗っ取っているのはこのプログラム本体ではないことになる。

——プログラム本体なしに、コンピュータを占拠できるのかな、誰がトリガー（引き金）を引くんだろう？

ふと、朝方の兄貴の怪しげな行動を思い起こした。わざわざ出勤しかけて、また戻って通信ケーブルを外したのだ。自分のパソコンだけなら切っておけば済む話だが、芽衣が一晩中使っているものだから、あんなことをしたんだと思った。

——それだったら、一言聞けばすむ。

芽衣は隣で見ている理香に、小声で尋ねた。

「ね、携帯電話持ってる」

「うん、あるよ」

「貸して」

「国際通話じゃないでしょうね」

「そんなわけないじゃない、都内よ」

そう言って借りて、トイレと言ってその場を抜け出した。黒澤家では芽衣以外は全員携帯電話を持っていた。生徒手帳の後ろのページをめくり、兄貴の携帯電話に掛けた。

——プルルル、プルルルル。

長い時間呼び出し音が続いた。

「はい、もしもし？」

不審そうな声で出た。

「あのお、黒澤様のお電話でしょうか」

「そうですが」

「芽衣です」

「工作中に掛けるなよ。それにこの携帯番号はお前のか？」

「理香に借りたのよ、あ、でも理香に手を出したら駄目だよ」

「誰がお前の友達なんか、それで何の用だ」

「今朝、ケーブル外していたじゃない、あれ、何かの魔除けなの？」

「何のことだか、ちっともわからない」

「腹立つわね、あのね、いま高校のサーバーが乗っ取られているのよ。解析したけど本体はこっちにないの、これ以上抵抗するなら、こっちから攻撃するわよ」

「くそ、そっちに逃げたのか、あ」

「ちょっと、逃げたって何よ、ネコ？ ライオン？」

「ちょっとだけヒントをやる。自律型人工知能システムだ。拡散したシステムで本体を形成している。そっちにいるのは多分、尻尾の先だ。攻撃しても無駄だ」

電話が切れてしまった。兄貴にも逃げられた。

芽衣は、兄貴がヒントを出したことから本気で向こうでも処分に困っていることに気付いた。内容はよく解らないが、高校のサーバーにいるのは尻尾の先だということは理解できた。多数の高校やその他の機関に潜り込んで、全体で一つの人工知能システムを組んでいるのだ。それが、制御不能になり勝手に走り出した。野生化した「ライオン」というわけだった。

芽衣は教室に帰り、理香に携帯電話を返した。他の人はいなかった。

「ありがと」

「誰に掛けたの？」

「兄貴」

「へー、これお兄様の携帯番号、ふーん、手を出しちゃおうかな」

芽衣はぎくっとして理香をにらんだ。

「冗談よしてよ。理香があたしのお姉さんになるの？」

あんな兄貴のどこがいいのかとも思ったが、腐っても東都大の先生だ。芽衣はこの理香の冗談に不吉なものを感じた。

「ところで、みんなはどこに行ったの？」

「さっきチャイムが鳴ったから帰ったんじゃない、小林先生はまた来るって」

「そう」

かなり危機的状況にあるのだが、その現場に緊迫感は感じられなかった。少し拍子抜けした芽衣は、ここのコンピュータの処理を手抜きすることにした。カタカタとキーボードを打つ芽衣の仕事内容を誰も知らないのをいいことに適当に済ませるのだ。

外部からの信号を全て遮断してしまうように、ファイア・ウォールの設定を変更して、再起動を掛けた。しばらくしてシステムが復旧した。

「あら、直ったの？」

理香が能天気聞いた。芽衣は明るくうなずいた。インターネットで外部のページを閲覧できないから後でばれるに決まっているが、どうせ、高校のコンピュータで閲覧していいページなど教育委員会に限定されていると気楽に判断した。

小林先生が戻ってきた。

「お、直ったのか」

「一応」

「頼りないな、大丈夫か」

「ノーギャラではここまでです」

思わず、理香が芽衣の口を押さえた。

「あはは、何でもありません」

理香に引っ張られて芽衣も脱出した。

「もう、あんた、いくらただでも先生にあんなこと言っちゃ駄目よ、子供じゃないんだし」

「やっぱりまずかった？」

「当たり前よ」

二人はそのまま、一階の教室に戻ってカバンを取って外に出た。天気もよく、五月の陽気が気持ちよかった。芽衣は思いっきり背伸びをした。理香も同じように伸びをして

くるりと回ると、スカートがふわりと浮かびすらりと形のいい脚がのぞいた。

「いいね、スタイルよくて」

芽衣が僻《ひが》んでいった。

「芽衣も細いからこれから成長するよ、きっと」

「しないよ、中三の時から一緒なもの」

芽衣も、理香と一緒にいなければ綺麗な黒髪の美少女なのだ、なまじっか一緒につるんでいるから比較してしまう。

「ね、今日遊びに行ってもいいかな？」

理香は時計を見た。

「五時から秀英館に行くけど、それまでならいいよ」

理香は一年生のなのに予備校のようなところに通っていた。芽衣はやっと高校に入ったばかりと気を抜いている。

理香とは小学校も同じだったのだが、当時の芽衣はあまり目立たずに隅っこにひっそりしているタイプだった。その時は合唱コンクールの度に先生に指名されてピアノが弾ける女の子たちのグループを雲の上の存在として見ていた。理香もその中の一人で、芽衣が声を掛けるなど最初は考えもしなかったのだ。そうして中学に進み成長期にはいると芽衣も徐々に美少女っぽくなり、自分では気付いていなかったが、クラスでも目立つ存在になってきた。理香と口をきいたのは中学三年生で同じクラスになったときだった。理香も芽衣に一目置いていたようだったが、芽衣は憧れだった女の子と友達になれたことで舞い上がっていた。他の女子には態度の大きい芽衣も理香だけは別格だったのだ。

理香の家まで歩いていき、一緒に玄関を通った。

「おっじゃましまあす」

と声を掛けると、理香のお母さんが出て来た。

「あら、芽衣ちゃんいらっしゃい。高校に入ってまた綺麗になったね」

「いやあ、それほどでも」

馬鹿な返事をしながら、リビングで紅茶をいただいた。ここに理香のピアノが置いてあった。彼女が四歳の頃から、レッスンを続けている。芽衣は全然知らなかったが、スタインウェイのグランドピアノで、相当高価なものらしかった。

紅茶を飲み終わると、芽衣は立ち上がりこのピアノを触った。

「あれ、芽衣ピアノに興味何かあるの？」

「そりゃ、女の子ですもの、少しは憧れるわよ。何か弾いてよ」

理香は面倒くさいと言いつつも、軽い手つきで鍵盤のフタを開けて覚えている曲を弾き始めた。軽やかで、美しい音色だった。それよりも真剣に鍵盤をみつめる理香の瞳も美しかったし、鍵盤の上で踊る指先も可憐だった。小学校の時から憧れていたものが、目の前にあった。音符を確認しなくても滑るように鍵盤を操る少女は芽衣に取り雲の上の存在だったのだ。芽衣がぼうっとして、理香が一小節弾ききるのを見ていた。

「すごい、これなんていう曲？」

「ええ？ あんた何にも知らないのね、モーツァルトのトルコ行進曲！」

余りにポピュラーすぎると却って分からなくなるときがある。このときの芽衣もこの華麗な演奏が、そんな有名な曲とは思わなかった。もっと名前も分からない難しい曲でなければならなかったのだ。

お母さんもいた。

「せっかくピアノも買ったんだからもっと練習しなさいよ」

「もう、うるさいなあ。芽衣、あたしの部屋に行きましょ」

そう言って、案内してくれた。芽衣は喜んで付いていった。階段を上がり、扉を開けると大きな窓がありシンプルなデザインの机があった。本棚も綺麗に整頓されていて、ベッドの上も薄手の布団がきちんとたたんでおいてあった。シーツは子猫のキャラクターのピンク地のものだった。

「いつ来ても綺麗だねえ」

「あんたも女の子なら掃除くらいしなさいよ」

「こんないい部屋なら毎日でも掃除するんだけどな」

芽衣はそう言いながら、さりげなくベッドの上に座った。手の甲でシーツを撫でるとさらっとして彼女の肌に触れたような気がした。芽衣の胸はどきどきしてきた。布団の上の枕を抱きしめそのままベッドにころんと寝ころんだ。枕から理香の髪と同じ香りがして、胸が何となく苦しくなるのを感じた。

「ちょっと、どいてよ。しわくちゃになるじゃない」

理香がそう言うのと芽衣はたたんである布団を頭からかぶってしまった。理香に包まれているみたいになった。理香は、ふざけるなど言う調子で布団の上ののしかかった。

「きゃっ、襲われるう」

「こっちのせりふよ。いい加減にしな」

理香の胸が芽衣のほっぺにあたった。柔らかくて暖かだった。芽衣はそのまま理香に顔をうずめた。

「わ、子供みたいなことする」

「えへへ」

芽衣がおどけてみせると、理香は芽衣の髪を撫でてくれた。

——あまりふざけて嫌われたら……。

そんな不安が頭の隅にあった。変な気がなければ決して起こりえない気持ちだったが、芽衣自身どこからそんな気持ちがあるのか気付いていなかったし、理香に対する気持ちが尊敬に近いものなのか、恋愛に近いもののかも判別できないでいた。

理香があまり気にしていないのを見て、芽衣はベッドから跳ね起き、布団を綺麗に元に戻した。いそいそと作業する芽衣を理香は満足げに監視した。

「ふう、どれどれ、あれ、これ参考書？」

「もう、人の机をさわらんじゃないの。高校生なんだから参考書くらいあるわよ」

「あたしも買った方がいいかな？」

「それは、……強制はしないけど。進路はどうするのよ」

「理香は？」

「あんた、何にも考えてないんでしょ。あたしは教育学部志望だけど」

「へえ、そうなんだ。一緒に行きたいな」

「お馬鹿、将来のことを先に考えなさい。一緒に行ったらって教師になるんじゃないと行ったってしょうがないでしょう」

「そうなんだ、あたしに何か出来るかな？」

「コンピュータ得意じゃない。今でも十分やっていけるんじゃないの」

「わかんない、適当にやってるだけだから、専門でって言われたらどうなるか」

「態度が大きい割に自信がないのね」

「そ、そう？」

「ときどき思うんだけど。前から態度が大きいときと、卑屈に感じるときの落差が大きいんだけど、何かコンプレックス？」

「そ、そう？」

芽衣はすっとぼけたが、実際、コンプレックスのかたまりだった。容姿、成績、特技全てにおいて自信が持てないでいた。態度がでかいのはその裏返しなのだ。

「あんた、成績もそこそこいいし、コンピュータも得意だし、中学校ではクラスで一番綺麗だったし、もっと自信持っていていいと思うよ」

「おお、さすが親友、そこまで言ってくれるのは理香だけよ。自分の親でも言ってくれないね」

「すぐ調子に乗るのもいいところではあるね」

「ぐすん」

開けた窓から爽やかな風が流れ込み、芽衣の前髪がそよいだ。

「あんた、知らないかも知れないけど、中学の時、すごい人気だったのよ」

「何の話？」

「鼻が高くて瞳が大きくて色が白くて、黒い髪がきれいで女の子が見てもどきっとするくらい可愛かったの。足も細いから制服のときは綺麗だったね。男子から話し掛けられたことないでしょ」

「うん、態度も悪いし敬遠されてると思った」

「まるっきり逆で、声を掛けづらいくらいの美少女だった」

「.....だった？」

「例えばね、うちのクラスの山中さんなんか本当は美人なんだけど、変な眼鏡して変な格好しているから、変わった人と思われているでしょ。かなりオタクっぽっていうか」

「そうね、え、あたしも？」

「四月からずっと、汚いジーパンじゃないの、スカートにしたら？」

「どんなのがいいかな」

「やっぱり.....制服はないから、フォーマルな方が似合うかな。何かこうカチッとしたり言うのか。スーツで高校行く人もいないしねえ」

「山中さん見たく制服？」

「だから、一人だけ着たって制服とは言わないじゃない」

「確かに一人だけセーラー服も、ブレザーも嫌だし.....でもいいや、理香が認めてくれるんなら、他の人はどう思ってもいいや。へへ」

「もう、せっかく言ってるのに、.....あ、そろそろ時間だ」

壁の時計が五時十分前を指していた。

「本当だ。長い時間ゴメンね。少しだけ立ち直れた気がする」

「あら、深刻に悩んでたの？」

「いや、別に」

芽衣は理香のお母さんにお邪魔したお礼を言って、玄関を出て家路についた。とぼとぼと歩きながら、理香の言葉を思い出した。彼女が芽衣を知ったのは、やはり中学三年からのようだった。芽衣は小学校でピアノの演奏をする理香を遠くから眺めていたのだが、そんなことには気付いているはずもなかった。大勢で合唱している中のたった一人にすぎなかったのだ。結局、自分はその他大勢の一人に過ぎないと、悲しくなった。せっかく、中三の時に芽衣がクラス一の美人だったとしても、理香が認めてくれる小六の少女の方が価値があった。

引きずるような足取りで、芽衣の家に帰りガラガラと引き戸を開けて家に入ったら、もう母親が夕食の準備をしていたみたいだに思えた。

「ただいまあ」

「おかえり、遅かったのね」

「うん、理香の所に遊びに行ったのよ」

「ああ、渡辺さんのお嬢さん？ 真似するんじゃないよ」

最初から手厳しかった。芽衣にとっては憧れの少女だが、両親にとっては身分相応の家庭の子供と付き合い合えることらしかった。それに、この母は理香のようないいところのお嬢様とは気が合わないらしかった。

「ねえ、あたしも塾に行こうかなと思うの」

「行ってどうするの」

「いや、教育学部に行こうかなと今の内から思って」

「その先は？」

「さあ」

「思いつきで言うんじゃないの」

それだけ聞いて、芽衣は自分の部屋に上がってしまった。こちらは、理香と違い西日の当たる部屋で、畳の色も日に焼けて変色している和風の六畳間である。机の上にパソコンがあるのは同じだったが、こっちは朝方、兄貴がケーブルを切ってしまったのでネットにはつながらない。ベッドは理香同様、同じレイアウトだが、あまり売れ線でないものを両親が買ってくるので可愛くないし、そんなわけで芽衣も掃除しないし、散らかり放題になっていた。

でも、肝心のネットへの接続が出来ないと、芽衣も開店休業だった。ネットカフェなど使えない手段もないわけがないが、小遣いも少ないし、あまり金を使うことも出来ない。考えついた手段が、兄貴の研究室の端末を使って研究することだった。それで、明日、大学に行ってみようと思ひ、今日のところはあきらめた。

芽衣は階段を下りて、鍋に火を掛けている母親の背後から声を掛けた。

「ねえ、お母さん。スカート買って欲しくない」

「何よ急に色気づいて、男でも出来たの？」

「いや、これから」

「駄目駄目、結婚してからでいいの。悪い虫が付かない以上、今のジーンズでいいじゃない

い。ジーパンが擦り切れたら買ってあげるよ」

だが、そんな約束が守られたこともなかった。擦り切れたら、継ぎ当てをしてまた使うようである。

その日は、夕食のご飯とフライを食べると、今日からパソコンもさわれなくなったし、文庫本を読んで寝てしまった。

2. 大学

2. 大学

次の日、芽衣は学校が終わった後、兄貴の大学に忍び込むつもりだった。丁度六限目が自習だったので、速攻で抜け出した。

「あれ、芽衣、帰るの？」

理香が呼び止めたが、今日だけは別だ。

「のっぴきならない用事があって、てへ」

そう言って、教師に見付からないように裏門から抜け出した。少し歩いて錦糸町駅から総武本線に乗り、秋葉原で山手線に乗り換えて御徒町駅で降りた。多分一番近いだろうと思ったのだ。そこから歩いて東都大学本郷キャンパスに入った。高校は出入りがうるさいが、大学では関係者以外が入っても咎められることなどないし、第一、学生でない人間も大勢出入りしている。芽衣は鼻歌を歌いながら理学部三号館を目指して歩き、通用口から忍び込んだ。

廊下に出ている看板を目印に、計算機物理学教室を探した。兄貴に直接聞けばいいのだが、今日ここに来ることは、大胆にも内緒にしている。そして、見つけてそっと扉を開けると、二十代から三十代までの男ばかりがいる部屋だった。いわゆる大部屋だ。

——むさ苦しい。

芽衣は思ったが、女子学生も一人だけいた。他の教室にはもっといるのだが、この物理学科は男性人口が多いようだった。しかも、みんな人の目を見ようとはせず常にコンピュータディスプレイを見るか人と喋るときでも下を向いている。兄貴の教育が悪いのか不気味な連中だと思ったが、芽衣にはちょうど良かった。芽衣はこの中で端末に向かっている学生の後ろか画面を覗きながら歩いた。

——見慣れないプログラム。フォートラン？

C言語系のプログラミングが多い中、未だにフォートランが現役で使われていた。C言語自体も実際には歴史は古かったが、システムを記述する言語として名前を少しずつ変えながら進歩してきている。これに対しフォートランはコンピュータが電子計算機と呼ばれた時代のプログラミング言語で科学計算に特化したものであった。大きなメモリを使い、大昔から現在までの計算プログラムがライブラリとして、つまり、一つの関数として用いることが可能なことから未だに現役で使われている。

しかし、芽衣の興味は別の所にあった。

あの、ライオンの正体だ。芽衣は彼の研究ノートをちらっと見ると、表紙に東海林

《しょうじ》昌夫と書いてあった。芽衣は開いている端末に座り、兄貴のログインIDでシステムに侵入した。ここからはハッキングだ。強引に内部の記憶領域を調べ、東海林昌夫のファイル調べた。

——おお、ファイルシェアのソースコード（プログラム原文）がある。ここで開発されたのか。

芽衣も使っていたファイル交換ソフトだった。誰でもデータをネット上にアップロードし、また、自由にダウンロードすることが出来るものだ。映像ソフトや音楽ソフトなどの不正流通、著作権侵害でも少し問題になっていたが、誰が作っていつ流通させたかも不明と言われていた。世界各国に八百万からの利用者がいると言われていた。

芽衣はそのファイルシェアの中身を調べた。匿名性の高いデータ通信機能と共に、不思議なプログラムが二個付いていた。一個は、このファイルシェアをインストールしたパソコンの休止時間を利用して任意の計算をさせるプログラム。もう一個は、データを受け取り足し算して割り、一定値以上かどうか判別するだけのものを百万回繰り返すと言うものだった。

——なんだこりゃ？

芽衣はそこでアクセスを切った。プログラムの解析だけではその開発の趣旨が分からないからだ。

さりげなく立ち上がり、芽衣は研究室の後ろにあるキャビネットボックスに行った。昨年度の卒業論文や、修士論文の収めてある棚を探し、何冊か手にとってページをめくった。高校生の芽衣には物理学科の卒業論文など理解は出来ない。だが、三冊目をめくったときに、見覚えのある名前があった。「分散型計算処理システムの開発に関する研究」と題して先ほどのプログラム開発の経緯が書いてあった。

論文の最後に載っている参考文献の項目から、更に前年度、その前と探していった。

芽衣が頭の中でまとめた結果はこうだった。

まず、ファイルシェアと言う全国に普及しそうなソフトウェアを開発し、そこに、この研究室で行おうとした分散型計算処理システムを載せた。知らずにファイルシェアを使用する人のパソコンに寄生してしまおうと言うアイデアだった。そして、その上で数学的問題を何種類か解かせて最初の論文を発表した。次に、脳神経をシミュレートしたニューラルネットワークを、この一千万台（論文上）のコンピュータ上に構築し信号処理した。そしてこの東海林昌夫が人工知能システムを構築し論文にまとめてこの研究は終了していた。彼が四年生の時の研究で、現在は修士二年生であることが判明した。

——終了したはずの研究が続いている？

芽衣は別のファイルを取りだした。何となく気になった、経済産業省研究費補助という名前のもがあったからだ。普通のファイルには文部科学省助成金という名前が付いていた。

ここに、極秘の計画が記載されていた。

——人間の感情を判断させることが出来るか、怒っている人と喜んでいる人の相手を何度もさせて、自然に対応できることをこのシステムで検証する……。人間の赤ん坊が大人になる知能課程の実験的シミュレーション。人体実験じみた印象を与えるので、関係者以外閲覧禁止にする。

「あやし見ちゃったよ」

芽衣がぶつぶついいながら、読んでいると、ついに、咎められた。

「君、どこの学生？」

「あ、いえ、一年生なんです」

嘘ではなかったが、正確には高校の一年生だ。

「一年生？ こんな所に何しに来たの？」

「何しにって、別に……あの、東海林さんの彼女なんです、えへ」

出任せを言ったら、意外と許してもらえた。大学院生の権威は大きいようだった。芽衣はその隙に素早く研究室から脱出した。

こそっと廊下を小走りに進むと、行き止まりにジュースの自販機が置いてあり、その前に兄貴がたたずんでいた。芽衣が気付いて立ち止まると目が合ってしまった。

「や、やあ」

芽衣は右手で敬礼のような挨拶をした。

「やあじゃねえよ。何をしている？」

いつもの兄貴とは違い、険しい目つきをしていた。悪いことをしている人の目だった。

「い、いや、さ来年東都大を受験しようかなあ、なんて。見学とも言うかな」

「白々しい言い訳をするな。誰かに頼まれたのか？」

「誰があたしなんか頼むのよ。頭おかしいんじゃないの」

「おかしいのはお前だ。ちょっと来い」

健一は芽衣の手首を掴んで引っ張った。芽衣が痛いとかんでも聞く耳持たずにどんどん進み、連れ込まれた先は助手研究室、健一の個室だった。個室と言っても助手の定員は二人だから本当は半分なのだが、三月末に一人が転勤していなくなり、事実上の個室になっていた。

健一の目つきはいつになく怖かった。

「お前、本当は何しに来たんだ？」

徹底的に問い詰める気だと思った芽衣は白状した。

「あのさ、高校のコンピュータが攻撃されたじゃない。あのウイルスって、ここの開発品だよ。それで調べに来たの。いつまでも家のパソコンが使えないんじゃ、あたしの取り柄が何にもなくなっちゃうから」

「それで、どこまで調べたんだ？」

「ここで例のライオンを産み出して育て上げて、野に放った。研究は経済産業省が支援していた」

「そこまで知られては生かして帰すわけにはいかないが、妹だから一応許してやる。何も見なかったことにしろ」

健一は冷たく言い放った。

「見なかった……」

「何だ？」

「見なかった、で、本当にいいの？ 逃げたライオンを探さないと大変だよ。ウイルスじゃないから何にも引っ掛からないし、その割りにやることはえぐいし、そのうち日本企業にも攻撃してくるんじゃないかしら」

「どうして知っている？」

「知らないわよ。多分次のターゲットになりそうな気がしたの」

「どうして？」

「分散型自律人工知能って、人間社会に住むには単独では生きられないでしょ。そうすると先立つもの（お金と電力）が必要になる。当然の結果よね。机の上の企業リストってターゲットになったところ？」

「いや、これからだ。経産省から、絶対に被害を出すなと警告された」

芽衣が手に取ってみると日本の代表的企業の名前が五百社ほどリストアップされていた。その中に、理香の父親が部長を務める西浜貿易も入っていた。

「このライオンの攻撃だと、預金データを盗んだりとか考えられるけど、企業はどうなるの？」

「正直それで頭が痛い。まず、決済を妨害されたら、その企業の社会的評価は地に落ちる。商品を受け取って金を払わない状態になるんだ。しかも手形の決済なら、一度不渡りを出したら銀行は取引を停止する。つまり、倒産だ」

芽衣はそれを聞いて身震いした。

理香の父親が倒産の憂き目にあったら、路頭に迷うのは子供の理香だ。昨日までグランドピアノを華麗に弾いていたのが、明日から高校をやめて工場で働かされている光景が頭に浮かんだ。少しオーバーだが世の中そんなものだ。

「あたしは認めないからね、絶対にこの命を懸けてでも守り抜きます」

芽衣は天地神明に誓ってそう宣言した。憧れの友人のためと思えば、自分の命すら懸けてもいいとさえ思ったのだ。

「それで、お前がそれを知った時点でどうするつもりだ？」

「え、と」

「ふん、考えも浮かばないだろう。あのシステムに弱点はない」

健一は自信を込めてそう言いきった。自分の研究で産み出されたシステムだからそう信じるのも当然だった。それに芽衣もまだ、細かい事情は知らされていない。

「お兄ちゃん、あの研究で経済産業省がどうして入ってるのよ。他のと違ってよ」

「違わんさ。別に経産省だろうが文科省だろうが、研究資金を出すなら協力する」

「へえ、じゃあ、どうして研究資金を出してくれたの？」

「言う必要はない」

「やっぱりやましいんだ」

「馬鹿、……お前本気で、このライオンを捕まえる気があるのか？」

芽衣は小首をかしげた。いつもの兄貴の態度もこういう仰々しいものの言い方を好む

が、今日はそれ以上にもったいを付けた。芽衣に協力して欲しいならそう言えばすむ。

「ギャラ次第かも」

芽衣はカマを掛けた。

「じゃあ、帰れ、しっしっ」

健一は芽衣に背を向けた。その背中にも全然哀愁が漂っていなかった。芽衣は失敗したと思った。あきらめて帰ろうと出口に向かったとき、デスクの上の内線電話が鳴り響いた。健一はベル一回で素早く受話器を取った。

——お気に入りの部下は違うね。

芽衣はそう、心の中で皮肉を言って部屋を出ようとする、健一が袖をつかんだ。しかも、つかんだまま電話で話をしていた。

「はい……はい……はい、では後ほど伺います、失礼します」

そう言って受話器を置いた。まだ、芽衣の手首をつかんでいた。

「お兄ちゃん、さっきは帰れっていったじゃない」

「その通り、だが、その前に説明だけしておこう」

「はあ？」

「少子高齢化の問題は知っているな」

「ああ、お年寄りが増える話ね？」

「馬鹿、そんな問題じゃない。労働人口が減る方の話だ。労働者が減れば、それに連れて日本のGDP（国内総生産）も下がってくる。わかるよな」

「わかるけど、そのどこが問題なのよ」

「我が国の国際的影響力は、経済力だけだ。それがなくなると誰も相手にしてくれなくなる。貿易交渉にも応じてもらえないし、外交問題も話し合えない。今の日本が大きな顔をしていられるのは、世界有数の金持ち国だからだ」

「そうだったんだ」

芽衣は他人事のように答えた。

「他人事のように言うな、お前たちの世代がその負担を背負い込むことになるんだ。外交、防衛、エネルギー確保、通商問題を経済力の後ろ盾なしにやれる状況じゃない」

「じゃあ、昔の人はどうやって生きていたのよ」

「屁理屈を言うな。まあいい、その対策として、労働支援システムなるものを考案したのだ。まず、工場での自動化を今より推進し、一人で十人分の仕事をこなす。次に、営業や、企画、設計などの仕事をコンピュータで支援する」

「え？ コンピュータがそんなことするの？」

「最後まで聞け、コンピュータに人間の相手は出来ないが、一人の事務職が十人分の仕事をこなせるようにコンピュータで支援するんだ。簡単な電話の対応や書類の処理などだ。簡単かどうかはコンピュータが判断する。つまり、機械化された部下というわけだ。そのために相手が怒っているか笑っているかの判断、急いでいるかそうでないかの判断をあのシステムにやらせようと感情を判断させるプログラムを組み込んだ」

「感情なんか持てるの？」

「感情を持つんじゃない、判断させるだけだ。だが、実際に感情を持ったような感じになったのは確かだ」

「それが逃げ出したの？」

「それもわからない。こっちを無視しているだけかも知れない。だが、世界各国の一千万人の中に紛れ込んでいる。パソコンから大型コンピュータまで様々だ。どこにいるのかすらわからない」

「ふーん、完全に野生化したライオンだね、こっちを狙っているかも知れないんだ」

芽衣は投げやりな口調で言った。

「そう言うことだ。わかったらちょっと来てくれ」

「何するのよ」

「付いてくるだけだ」

そう言って健一は芽衣を部屋から連れ出して廊下に出た。

「でもお兄ちゃん、あのシステムってどうして自律型なの。普通の人工知能を専用コンピュータに入れるんじゃないの？」

「コンピュータにはメンテナンスが必要だ。その費用の九十九パーセントは人件費なんだ。それに、専用コンピュータにすると高くして導入できない会社がほとんどなんだ」

「そうなんだ」

芽衣が連れて行かれたのは教授の研究室だった。扉の火元責任者の札をみると、山本八郎と書いてあった。健一の上司である。芽衣は兄貴にくっついて一礼して部屋に入った。「遅くなりました。これは事務のアルバイトの学生です」

芽衣はいつの間にかアルバイトの学生になっていた。

「そう、まあ掛けて」

山本教授は二人にソファを勧めた。教授もデスクの上の書類を持って向かいの席に掛けた。

「黒澤君、経産省の件だが.....窓口が変わった。内閣官房の後藤次官だ。本学法学部の卒業生でわたしと同級なので多少は融通が利くと思う。早急に報告を上げておきたい」

「はい、支援システムの暴走ですが、本体プログラムの存在場所は不明で、全体としては一千万台にのぼると見込まれます。事態収拾の見込みですが、この支援システムを破壊するウイルスを使うしかないと思います」

「やっぱり壊すのかい」

「はい」

「できるの？」

「多分」

兄貴も芽衣と同じ様なことを言った。芽衣は兄貴の脇腹をつついた。

「あの、黒澤先生、あれは壊れませんよ」

「黙ってろ.....あ、失礼しました」

「いや、いいよ。君、どういうこと？」

「あのシステムは本体がなく、たくさんの尻尾の先だけでライオン本体を形成しています。尻尾の先を攻撃しても、別の部分がそれを補完してしまうので、全体としてはダメージを受けない構造です」

「君、詳しいね」

「実際に攻撃しても通じませんでした」

「ふむ」

「おい、何か策はあるのか？」

「一つだけあります」

芽衣がそう言うと山本教授も身を乗り出した。そんなに頭の固い人ではなさそうだった。

「聞かせて」

「はい、このシステムの強みは、ファイルシェアと言う、人気ソフトに寄生していることです。このソフトの魅力はユーザーが互いに好きなソフトを交換、流通できることにあります」

「そうだね」

「これを取り締まるのも一つの方法ですが、現実的ではありません。それで、今、主流となっているOSのウィンズドウに、ファイルのアップロード、ダウンロード機能を搭載したらいいかと思うんです。OSの機能で出来るなら、誰もこのファイルシェアを使わなくなります。すると、ライオンも自動的に世界中から駆除されます」

「なるほど、と、言いたいが、ファイルシェア自体が著作権違反で問題視されている。そんなときに、アメリカ製OSにその機能を組み込むなど狂気の沙汰だ。応じる訳がない」

「そうですねえ」

芽衣も言ったものの、政治的な問題があることを考慮していなかった。

「あの、教授、問題はありますが一度、アメリカ国務省に話を持ちかけてはいかががでしょうか。いずれ、被害は向こうにも広がります。文句は言われるでしょうが、百パーセント悪い話でもないと思います」

珍しく健一が芽衣の肩を持った。

「アイディアとしてはいい。但し、経産省の頭越しにそう言うことをすると失敗したときに誰もかばってくれないぞ」

山本教授は芽衣の方を向いた。

「でも……表面上の問題はファイルシェアのことだけですよね。でしたら、その対策にこちらが協力する形でどうでしょう」

「おいおい、開発にはこの研究室も関与している。変なところで問題には出来ない」

「あの、教授」

健一が割り込んだ。

「何だい」

「このファイルシェアの開発元は知られていません。それに、彼女のアイディアだと、支援システムを破壊するのに、ファイルシェアユーザーを除くだけで、このソフトの中身には誰も手を出しません。要するに細かい経緯を知られずに処理することが出来ます」

芽衣を利用した、姑息な保身手段だった。芽衣が知らない間に兄貴はすっかり悪人に変っていた。

「そうだな、いいだろう。後藤次官にはわたしから後で連絡しておく。アメリカ国務省だが、大使館の担当者を紹介してもらおうか。それで行こう」

健一は頭を下げた。

「ああ、それから黒澤君、彼女にも行って貰おう。着替えは持ってるかい？」

健一は芽衣を見た。見られたって洋服なんてこれしか持ってなかった。芽衣は首を横に振った。

「そう、じゃあ、黒澤君、カードを使っていいからひとつ走り買ってきなさい」

「はい」

芽衣は健一に連れられて、部屋を出た。出たところで健一に囁みついた。

「ちょっと、お兄ちゃんどうということよ。大使館なんてあたし知らないからね」

「今更、手を引くんじゃない。それに、お前の友達のお父さんも失業するんだろう」

「ひっどーい」

芽衣は頭に来たが、痛いところを突かれてしまった。兄貴のせいで理香が退学してどこかの工場で働かされるなど、本人に知られたら、一生恨まれてしまう。そんなことになったら、理香の目の届く場所で生きていく自信がなかった。

「わかったわよ、協力するけど、これが最後だからね」

「OK、じゃあ、衣装だ。急ぐぞ」

健一はポケットから颯爽と携帯電話を取り出してタクシーを呼んだ。芽衣は健一に連れられて正門前からタクシーに乗り込んだ。

芽衣は車の中でびくびくしていた。タクシーなど、滅多に乗った経験がなく最後に乗ったのは祖母が亡くなったときに母親と一緒に駆けつけたときだった。つまり、それだけの緊急事態でないと乗れない乗り物なのだ。それを兄貴は重要性があるのかどうかかわからない芽衣の衣装の買い出しだけに使っている。芽衣としてはもったいないと思うだけであった。

タクシーは健一の指示で銀座四丁目の銀座通りと晴海通りが交わる交差点で停車した。健一がカードで支払い、下りた後はすたすたと歩いた。五月十三日の晴れた日とは言え平日にもかかわらず人通りは多く、芽衣は置いて行かれそうになりながら小走りに追いかけた。行き先は松島屋デパートだった。

「ねえ、お兄ちゃん、こんなところで洋服なんか買うの？」

「洋服じゃない、スーツと言え」

芽衣にとってはこれも初めての経験だった。洋服などスーパーの洋品売り場か、量販店でしか買ってもらったことがない。一番高い服が中学校の制服だったのだ。入る前からびびっていた。

健一はそんな芽衣を物ともせず、慣れたようにエスカレーターで六階に上がった。芽衣に取り意外だったのは、途中で見たブランド物のショップに若い女の子がたむろしていたことだった。

気が付くと健一はフォーマルウェアのブースの店員を捕まえていた。

「今日使うので、フォーマルウェアで、色は濃紺、サイズはこいつに合うやつをお願いします」

店員が出してきたのは濃紺の格好いい、ブレザー・スカートだった。

「おい、試着しろ」

健一は乱暴に芽衣に渡したが、芽衣はその生地にはイタリア製とあるのを見て不安になった。

「あの、本当にあたしがこんなを着るの？」

「大使館にジーパンで行くほど神経が太いのか」

そう言われて泣きそうになりながら試着室に行った。芽衣がシャツの上からブレザーを羽織りスカートをはくと本当に似合わない気がした。情けなさそうに兄貴に前に出た。

「サイズは合ってるな。靴は革がいいな。そのGショックも外せ。ソックスもいらぬ」

徹底的にだめ出しした。ここで新しいブラウスとイタリア製の高そうな靴も買ってもらい。着ていた服は手提げバッグに入れてもらった。

「時計は？」

「いるのか？」

「Gショック取られたもの」

「時間がない、そこで買おう」

時計コーナーに行き、健一は何も迷わず、それを下さいと選んでしまった。小さな時計にステンレスの細いブレスレットが付いていた。だが、この値段を見てギョッとさせられた。カルティエの四十万円する物だった。兄貴はこれらを研究室のカードでドンドン買っている。そこにみじんも良心の呵責という物が感じられなかった。経産省や文科省を騙して得た汚い金だと言う意識があったのだ。少しでも早く脱ぎたかった。

浮かない顔でデパートを出たときにはすっかりビジネススーツに身を包み、イタリア製の革靴とカルティエの腕時計をはめて、これもイタリア製のバッグを持っていた。

まだ時間があるらしく、健一は芽衣をフルーツパーラーに誘った。甘い物でごまかされないぞという気持ちであったが、いざ目の前に滅多に食べられないフルーツパフェが来ると、温かくなってクリームが崩れてはいけぬという意識が先に立ち。バクバクと食べてしまった。兄貴はコーヒーを悠々と飲んでいる。

「アメリカ大使館だが、どう出るかなあ？」

もう意識はそっちに飛んでいた。

「甘い物でごまかされるんじゃないの」

と、芽衣は皮肉を言った。

「先方は、ファイルシェアのことは知らないかも知れないが、ここのところ続いている映画ソフトの不正流通に気を揉んでいる。放っておくと人海戦術であるユーザー一人一人を摘発するかも知れない。しかし、それは、こっちの望むところではない」

芽衣は少し塞ぎ込んでいた。この計画の被害者に理香のお父さんも巻き込まれるかも知れないからだ。

「だから、新しいOSに搭載したら……」

「それも、さっきは言わなかったが、現行のウィンドウ・ファンタが発売されたのはこの月の一月だ。半年も経たぬ内に新製品など前代未聞だし怪しげなことこの上ない」

「じゃあさ、本当にサービス品にして広めたら？ サービスパック・ベータ版で知っている人しか知らない」

「おいおい、全員に普及しないと、あ、そうか」

「そういうこと、ファイルシェアを使っている人自体、ある程度のネット・マニアだよね。試験製品であるベータ版に飛びつくのもそう言った人達。買みたいだけど、隠しコマンドで使えるという情報も、ネットで流した方がいいよ」

「芽衣も中々、人が悪くなったな」

健一はそう言ってにやりと笑った。

「そんなんじゃないわ。お兄ちゃんに恐喝されて動いているだけだもん」

正直なところ芽衣もとまどっていた。こうした悪知恵が働くのは兄貴とそっくりなのだ。普段は全く意識したこともなかったが、物事の裏を読んだり、作戦を立てるとき、芽衣の頭脳は冷徹に働く。小さい頃から父親と兄貴、兄貴と芽衣は似ていると言われていた。芽衣は覚えていないが父がハゲる前は大層な男前だったらしい。

芽衣は時計を見た。新しい時計はGショックと違い針が小さく見にくかった。

「おい、もうそろそろ行こうか」

「あ、うん」

兄貴が伝票を持って先に出た。

タクシーで赤坂にあるアメリカ大使館の前まで行き、教授が来るのを待った。歩道の隅で仲良く並んで立っていた。芽衣は久々の膝丈のスカートで少し恥ずかしかった。別に恥ずかしくなることなどないのだが、普段はジーパンばかりで、外で足を出すことがなかったのだ。それに、すこし風通しがよかった。素足のままだった。

「あら、パンストがないと変じゃない？」

芽衣は健一に足を見せながら聞いてみた。

「こら、若い娘がそんなことするんじゃない。それに、子供だから別にいいじゃないか」

健一にしては矛盾した答えだった。芽衣は健一がここまで来て面倒だからそんなことを言うんだと思った。

「子供という割に、人使いが荒いじゃん」

「それとこれとは別だ。……ああ、あのタクシー、教授じゃないか？」と指を指した。

タクシーは大使館前を素通りして芽衣たちの前で止まった。ドアが開き山本教授が下りてきた。

「待たせたね」

「いえ、今来たところです。先方はどなたですか」

「一等書記官のアレックス・アンダーソン氏と聞いている。受付にも連絡が行っているそうだ」

健一は正門の守衛室に行き、用件と行き先を告げると中に案内された。入り口ロビーでしばらく待っていると、紺のスーツを着た大柄な四十代半ばの白人男性が現れた。芽衣よりはるかに大きく、身長は百八十センチを超えていそうだったし、筋肉質で横幅もあった。しかし、その見てくれとは相反し、穏和で優しそうな瞳の紳士だった。

「わたしは日本語担当スタッフです、アンダーソンは会議中ですので申し訳ありませんが、お待ち頂けますか？」

芽衣より流暢な日本語でそう言った。教授が代わりに答えた。

「ええ、こちらから申し込んだのですから」

彼に案内され、会議室らしき部屋に通されて椅子に腰掛けた。芽衣は末席にちょこんと座った。彼はコーヒーと紅茶のどちらがいいかと、聞き、内線電話で事務員に注文して部屋を出て行った。紅茶を持ってきたのは、事務員らしき日本人女性だった。

「あ、砂糖を下さい」

教授が女性に注文した。芽衣は大学教授って遠慮のない人なんだなと素朴に思った。芽衣が紅茶のカップに口をつけると、部屋をノックする音がしてさっきの男性と一緒に、アレックス・アンダーソン氏が入ってきた。

3. 大使館

3. 大使館

「ウェルカム、トゥ、ザ、USA」（合衆国へようこそ）

「ようこそ、大使館へ」

アンダーソン氏のふざけた挨拶を彼が翻訳した。芽衣も聞き取れたので、アンダーソン氏が余り友好的でないのと、この男性が機転の利く優秀なスタッフであることを感じ取った。それに、アンダーソン氏は紺のスーツを着てはいたが、ネクタイはアメリカの動物のキャラクターの模様で冗談が過ぎるように思えた。アメリカ人外交官やビジネスマンがこんなことをするのは、ざっくばらんに話し合いましょうと言う意思表示か、完全に馬鹿にしているかどちらかなのだが、後者であることは、人に嫌われることに敏感な芽衣はすぐに感じ取った。

挨拶がすんで、双方が席に着くと、すぐにアンダーソン氏が早口の英語でまくしたて、それに応じて、健一も同じように英語で反論しはじめた。

もはや、芽衣の英語力……中学生なみ……では何も聞き取れず、呆然として、彼らの応酬を眺めていた。日本語スタッフの男性もにっこりして黙っていた。いちいち、翻訳など出来ない、そんな雰囲気の中、芽衣は段々と居心地が悪くなってきた。

わざわざ、高いスーツを買ってもらってこんな所まで来て何の役にも立っていないのが苦痛だった。健一の横に座っている教授を見ても、問題があったら介入するという雰囲気でも黙って成り行きを見守っていた。

しばらくの間、テーブルの隅で口からつばを飛ばしながら話しているアンダーソン氏の間を見てみると、内容がわかるような気がした。ソフトの不正流通の問題に強烈に抗議し、それに兄貴がこちらの問題ではないと反論している、そんな気がした。しかし、芽衣は話しに割り込めない。

「あ、あの……イクスキューズミー、ユア、エクセレンシィ」（すみません、閣下）

一瞬、アンダーソン氏が沈黙した。

「ノー、エクセレンシィ、ジャスト、ア、セクレタリィ」（閣下ではなく書記官です）

芽衣の目を見てゆっくりと発音した。

「あの、問題の責任は置いておいて、解決のための話に移りませんか？」

アンダーソン氏は何を言っているのか解らないと、横のスタッフの顔を見た。彼が早口の英語で説明した。また、彼を経由して返事した。

「責任の所在を不明確にすることは出来ません。しかし、解決策については賛成です。責任の話とは別にして進める用意はあります」

「先にその話をしましょう」

山本教授が答えた。少し協議してファイルシェアの摘発問題は後日、話し合いを持つ

ことにして対策案について話し合うことにした。後は健一が芽衣の提案……新しいOSを流通させることを説明した。アンダーソン氏はその場で拒否した。しかし、スタッフの男性はそれを翻訳しなかった。不審な顔をしている健一をよそに、彼は芽衣に話し掛けた。

「詳しく説明してもらえますか」

ブルーの優しい瞳に勇気づけられて芽衣は緊張しながら口を開いた。

「えっと、いま映画や音楽などのソフトが不正流通している問題ですが、主にファイルシェアと言うファイル交換ソフトが使用されています」

「合衆国でも広がりつつあります」

「これからも広がり、そして取り締まりをしても、すぐに新手のソフトが開発される、と予測できます」

「そうですね」

「何故、不正にコピーするのか、それが問題の本質です」

芽衣は論点をすり替えた。相手も気付いた。

「あなたはハリウッドの映画会社がどれだけ労力を払って製作しているかご存じですか」

「知っているつもりです。大勢の俳優やスタッフが何ヶ月も掛けて、何度も何度もフィルムを回して撮影し、フィルムが出来た後も何日も掛けて編集して、その後、広告や宣伝も必要です。でも、買う側の立場に立つとそうも言えないんです」

「難しい立場ですね」

彼も皮肉気に言った。

「映画の試写会とか、サンプル版があるじゃないですか、いい作品なら何でも映画館に通います、好きな俳優の作品なら映画を見た後でDVDまで買います。でも、サンプル版だけ見て別に見なくてもいいやと言う権利も保障されていいんじゃないでしょうか」

「あなたも口がうまいですね、しかし、著作権の侵害です」

相手がしぶといのを見て芽衣は攻め方を変えた。

「このファイルシェアで流れている情報は映画や音楽だけではありません。特定のプログラムやファイルを、大きなサーバーを持たないユーザーが使っています」

「何のことですか」

「アメリカ国内やアジアのテロリストがウイルスやファイルの転送に利用しているんです」

「ほお」

相手の目が険しくなった。ただの通訳ではないと思った。

「例えば、政府職員のパソコンにデータを流出させるウイルスを仕込んでファイルシェアで転送させたり、自分たちの連絡にこれを使うと高度な暗号を使わずに発信元不明のデータを送ることが出来ます」

「なるほど、それで、どう対策しようと言うのですか？」

「新たなOSにファイルシェアの持つファイル交換機能をバグとして持たせて、裏では本社サーバーで一括管理します。彼らの情報も管理できるし、ファイルシェアも一掃できます。ですが映画に関しては試写会チケットをただで配っていると思って、本当に必要な情報をそちらで管理する。それでいかがでしょう」

彼は横にいるアンダーソン氏に早口の英語で話したが、彼は首を横に振った。
「この提案は、ファイルシェアを一掃するには効果的でしょう。しかし、著作権の問題で
国務省とハリウッドが衝突するわけにはいきません。約束は出来ませんが、一度、本国
と話し合いを持ちます」

芽衣はこんな案が蹴られなかったことに驚きだった。それに、目の前の紳士がただの
通訳ではなく、アンダーソン氏より上の人間の様に思えた。

この後で山本教授とこの紳士の間で、ファイルシェアの開発者摘発の問題について話
が行われた。まだ、ファイルシェアの中身と開発者については知られていない。山本教授
は開発者のことには触れないで、このファイルシェアの裏の姿について説明した。この
正体が分散型自律人工知能システムで、開発者の意図に反して暴走していることであっ
た。この点についてはこの紳士も少し顔色を変えた。

「教授、おっしゃる意味がよく解らないのですが」

「実はこちらも事情を知っているわけではありません。このファイルシェアに含まれてい
るいくつかのプログラムに他のパソコン内部のプログラムと連動して全体で一つの人工
知能になる箇所があるのです」

肝心の開発コードのことを教授は故意に言わなかった。

「それが現在走っていると言うわけですか？ 信じられません」

「特に大きなプログラムではないし、パソコンと外部との通信に影響を与えるほどのデー
タのやりとりはしていないのです。いままでわからなかったのはそのせいです」

「何故教授がそれを知ったのかを知りたいところですが、何か具体的な動きがあるの
ですか？」

「今年度、日本の電力会社で、炭酸ガス削減のために節電を呼びかけ、いくつかの火力発
電所を現実に停止させようとしたことがあります。しかし、この人工知能システム、ラ
イオンと呼んでいます、原子力発電所の一基をサイバー攻撃で停止させました。原因
は表向き不明になっています。その結果、原子力がいつ止められるかわからない状態に
なり、電力会社が火力発電を停止できなくなったのです。ライオンは節電を嫌っていま
す。パソコンの中に常駐しているウイルスなので、スイッチを切られることをいやがっ
ているのです」

「その報告は聞いていませんね」

芽衣は彼の発言で、日本政府と対等に話が出来るレベルの高官である気がした。

「経済産業省とエネルギー問題諮問会議委員の一部で止めています。対策もないのに報告
はできません」

「その対策が、我が国のマイケルソフトに新しいOSを開発させ、それにファイルシェア
の代替品を搭載すると言う案ですか？」

「それを蹴られると、ファイルシェアよりいいソフトを開発しなければならなくなり
ます」

「そうですね、それは認められません」

彼は横のアンダーソン氏に早口の英語で概要を話した。もっとも、アンダーソン氏は
国務省としてそんな案は飲めないらしく真っ赤な顔をして猛反発していた。芽衣は彼が、
アンダーソン氏のことをアレックと呼び、また、アンダーソン氏が彼のことをジョンと

呼んでいることからかなり近い関係と感じていた。彼も、その場でアンダーソン氏を説得できなかったようで、山本教授に対し、本国に持ち帰って検討すると述べた。山本教授も話を蹴られなかったことで少しほっとした顔になった。

「あの、連絡のためにお名前を伺っていいですか？」

「はい、ジョン・マッケイといいます。ですが、九月からこちらに赴任予定でまだ正式のメンバーではないのです。連絡はアンダーソンを通してください。今の所属はこれです」

彼は日本語で印刷された名刺をくれた。アメリカ合衆国海軍横須賀基地、大佐、ジョン・F・マッケイと書いてあった。芽衣は海軍大佐だったんだ、かっこいいと素直に感動した。

「あの、Fって？」

芽衣はミドルネームを知らなかったが、マッケイ氏はそれを聞かれたと勘違いした。

「フィッツジェラルドです、祖父からもらいました。大学の成績ではありませんよ」

教授と健一がぷっと吹き出した。アメリカの大学ではFは落第を意味するが、芽衣はそんなこと知らなかった。しかし、ユーモアを忘れない余裕があり、優しそうで上品なマッケイ氏に芽衣は好感を抱いていた。これまで汚いだけと思っていたオヤジでも付き合いたいくらいかっこいい人がいたんだと新たな発見だった。

大使館からの帰り道、正門の所から三人で少し歩いた。

「君は、なかなかのネゴシエイターだが、どこの学生だい？」

教授が芽衣に聞いた。芽衣が答えられないでいると、健一が、理科一類ですと答えてしまった。

「ふうん、じゃあ、将来はこの研究室に来てくれるのかい？」

——将来といわれても、芽衣はまだ、進路について考えていない。

「わたしが引き止めておきます」

健一が勝手に教授に約束した。芽衣はその横で大通りを走る自動車の列を眺めながら、細長い脚をぷらぷらさせながら歩いた。芽衣とて本当に東都大理学部なんて入れるとは思っていないし、実際の所、三年後にどこの大学、短大に通うことになるか想像も付かない。

交差点の所で教授はタクシーを拾い、健一たちと別れた。芽衣は急に肩の力が抜けた。

「お兄ちゃん、お腹がすいた」

早速甘えてみた。何か奢ってくれるかも知れない。

「欠食児童みたいなことを言うな。家に帰ったら夕食だ」

「つまんない」

しかし、帰って夕食をいらないとすると大抵母親に怒られる。芽衣は健一と、着ていた服の入ったバッグを持って地下鉄に乗って帰宅した。

帰宅早々、芽衣のスーツを見て母親が何か言いそうになり、健一が、仕事を手伝ってもらったと、取りなした。それくらいしてくれても罰は当たらないと芽衣は全然うれし

くなかったし、革のシューズ以外はスーツやバッグなど当面使い道もなく、自分の部屋に吊して部屋着に着替えて階段を下りた。

「お母さん、今日のおかずは……お、これは何？」

台所の入り口の床に、包み紙が置いてあった。

「ああ、夕方、渡辺さんが来ておいていったのよ」

理香のことだが、母親の言い方は冷たかった。床に置いてあることからして明らかだ。

「どうして床の上に置くかな」

芽衣が包みを開けると、ラッピングされた包みと手紙が出て来た。——お誕生日おめでとう。と書いてあった。芽衣はそのまま二階に持って上がった。

芽衣が机の上でラッピングを開けると、日記帳が出て来た。表紙をめくると以前二人で撮った写真が貼り付けてあり、——いつまでも仲良くしようね。と書いてあった。理香のかっちりした字だった。それを見つめていると芽衣の目に涙があふれてきた。家族にすら忘れ去られている誕生日を祝ってくれるただ一人の友人だった。

感慨にふけていると、兄貴が入ってきた。口元にフライのかすが付いていた。

「勝手に入らないでよ。今日はトンカツ？」

「何故わかる？ 監視カメラでもあるのか」

「ばっかじゃないの、それで、何の用なの」

「今日の、通訳の正体だが、何者だと思う？」

健一は真剣な目で芽衣を見つめた。

「さあ、ネットを元に戻してくれたら考えてあげる」

「いつからそんな計算高い女になったんだ」

「そういう言い方やめてくれる、別にお兄ちゃんの彼女じゃないんだし」

「まあ、いいか、被害があってもお前のパソコンだ。だが、くれぐれも加害者側に回るなよ」

「やった」

喜ぶ芽衣を後にして健一は外に出て梯子に登って、再びケーブルを元に戻し、天井裏にもぐって屋内配線ボックスを復旧した。しばらくすると、芽衣のパソコンのブラウザソフトに表示が出た。

芽衣はそれだけ確認すると、食事を取りに台所に下りた。冷めてしまったトンカツをご飯の上に乗せてソースを振り掛けた。もぐもぐと食べていると、健一が埃だらけになって戻ってきた。芽衣の向かい側に座って缶ビールを一本開けた。

「おい、戻したぞ」

「ご苦労様」

「それで、今日のジョン・F・マッケイの正体の件だ」

「どうして気になるの？」

「今回のこちら側からの提案だが、あの大使館の書記官は露骨に拒否した。要するにアメリカ側の対応はあの通りだ。しかし、マッケイの態度は正反対だった。もし、受け容れ

られたならそれに越したことはないが、従来の対応から言うとそれも考えにくい」

「何が言いたいよ」

「彼が政権にまで顔が利く実力者であった場合のみ、今回の提案が通ると言うことだ。単なる通訳で、アンダーソンの友人だったらこの話はそれまでだ。これ以後、彼らの協力はないものとしてファイルシェア以上のソフトを開発しなければならない」

「したらいいじゃん」

「ファイルシェア自体が犯罪行為なのだ。それに芽衣にも手伝ってもらいたい部分もある。だから、なるべくこの方向での対応は避けたいんだ」

「犯罪行為だからあたしが手伝うわけ？ 信じられない」

「そういうわけじゃないさ、だから、彼の身元を確かめたい」

芽衣はお茶をごくりと飲み込んだ。

「あのさ、軍人から大使館なんて人事のルートってあるの？」

「するどいな、確かに職業軍人ならない。元海軍と言うだけならあり得るが、現役の海軍大佐から大使館など、あ、大使館付き武官ならあるな」

大使館付き武官とは、軍の連絡官として各国に配置される将校のことで、アタッシェとも呼ばれる。一般にエリート軍人が多い。

「でも、それで国務省の高官を押し込めるの？」

「さあな、国務省に知り合いもないし」

「でも、マッケイさんの日本語ってあたしより流暢じゃない？ 日本に長いのかな」

「それも、わからない。横須賀基地と書いてあったが、まさか広報係ではあるまいな」

ぷっと、芽衣はお茶を吹き出した。そんな単純なわけがないと思った。広報係で日本語が必要なら、そんなに覚える必要がない。それに、外見から穏和な紳士と決めつけていた。

健一は芽衣が食事を終えるのを待って、芽衣の代わりに食器を洗って二階に引っ張っていった。いつもは、洗い物をしないと芽衣が母親に怒られるのだ。芽衣の部屋のパソコンがすでにネットにつながっているので、調べるよう強要された。

「具体的に何をすればいいのよ？」

芽衣は露骨に嫌な顔をした。

「横須賀基地にマッケイが本当に所属しているのか知りたい」

「冗談でしょ、アメリカ軍の基地にハッキング？」

「頼むよ」

「お、お兄ちゃんがやればいいじゃない」

文句を言いつつも芽衣はパソコンに向かった。本当にアメリカ軍基地のコンピューターになど侵入できるわけがないと芽衣は思っていた。アメリカ海軍のホームページを開いた。このデータは海軍のコンピュータ上にあるデータである。ふと、この基地の中にもファイルシェアの利用者がいるのではないかと気が付いた。

芽衣は自分のファイルシェアを起動した。ファイルの検索画面と通信パケットを表示させてこの基地のネットワークに接続している端末を探した。二百台くらいが見付かった。芽衣はにやりと笑いをこぼし、カタカタカタとキーボードを叩いた。昼間探し当て

た、大学院研究室の東海林昌夫のファイルにあった、ファイルシェアの秘密のパスワードだった。

「おい、何だそれは？」

「内緒です」

健一は芽衣の顔の横にほっぺたをくっつける様に画面をのぞき込んだ。うっとうしいと思いつつ作業を続けた。ファイルシェアには、それをインストールしたパソコンの中で任意のプログラムを処理させる機能がある、健一たちの研究室はそれにより、世界中のコンピュータを使った実験を行っていたのだ。芽衣はそれを逆手に取った。

「ほら、出たよ。名簿でも何でもありそう」

「よし、マッケイで検索しろ、ファーストネームはジョンだ」

「一杯いるね」

「大佐と書いてあったな、カーネル、いや、海軍はキャプテンだったかな？」

「一人だけ一致、L C C 1 9 艦長、ジョン・C・マッケイ」

「CじゃないFだ」

「このリストにはいないよん」

「ふむ、因みにその船はなんだ」

「分かんない、ブルーリッジと書いてあるファイルもあるわね」

「第七艦隊の旗艦だ。揚陸指揮艦で参謀たちが乗る船だ、彼がそんな所に乗り組んでいるはずがない」

「どうして？」

「どう見ても艦隊勤務という雰囲気じゃない」

健一も見掛けだけで判断していた。芽衣は通信ノードを調べた。

「ここワシントン、それから、他の町と通信の多い人がいるよ」

「何人くらい？」

「多いといえば多いんだけど、一人だけ通信相手が違うのよ。ワシントンDCの政府庁舎との暗号通信。そして、VAと書いてあるけどそこの極秘通信」

「VAはバージニア州の略称だ。国防総省とノーフォーク海軍基地、それにCIAの本店があるところだ。どこか特定出来るか？」

「通信先のファイルは読めるけど、誰かはわからないよ」

「それでいい」

芽衣はカタカタとキーボードを叩いた。だららっと数字が雪崩のように上から流れた。ファイルを開いたのだ、が、高度に暗号化されていた。キーワードが必要だと、瞬間、頭の中にひらめいた。

「マッケイさんの誕生日っていつかな？」

「知らない」

「聞いてみてよ、ついでにおじいさんのフィッツジェラルドさんも」

健一は仕方なしに、名刺の電話番号に掛けた。秘書が出て来て、電話を切られてしまった。

「お前が掛けろ」

健一はそう言って、携帯電話を押しつけた。中々他人の誕生日を聞き出すのは難しい

ものだ、芽衣は、誕生日にこっそりとプレゼントがしたいと、女性秘書から聞き出した。

フィッツジェラルドの誕生日がパスワードになっていた。

「ファイルが一杯！」

「どけ」

健一は芽衣を突き飛ばした。きゃっと言って芽衣は椅子から転がり落ちた。

「何するのよ」

「怪しげなファイルが一杯だ、何者なんだこのおっさんは……むむ、オペレーション・ライジングサンというのが怪しげだな、中身は見られるか？」

「知らない」

「そういうなよ」

健一は芽衣の肩を揉んだ。別に凝ってはいなかったが、揉まれると気持ちがよかった。芽衣は床に寝そべり背中を押してもらった。適当にマッサージしてもらって機嫌のよくなった芽衣は作業を再開した。

「さて、開くかな？」

このファイルにもパスワードが掛かっていたが、本人の誕生日で開いた。意外と単純なものだった。しかし、開いたファイルの日付を見て健一が嫌な顔をした。数年前からのファイルが綴じ込まれていた。

「ふむ、作戦内容は、サイバーテロリストによる、コンピュータネットワークに対する静かな侵攻に対し、このウイルスの配布元を探して抹殺する。おいおい、物騒なファイルだぜ」

「他にもあるじゃない」

「配布元が判明、日本国・東京ユニバーシティ・計算機物理学教室・ショウジ。ファイル名、ファイルシェア。本件は合衆国基地のある日本国内であるので物理的手段は用いずに穏便に対処すること。DCI、サインはM・Hとある」

「誰なのその人？」

「このファイル本物か、うちの大学でやっていたことが数年前からばれている」

「どういうことよ」

「DCIはCIA長官のことだ、これは、東海林昌夫の抹殺命令書だったんだ」

「ははん」

芽衣は面白そうに笑った。

「何がおかしい」

「だって……くくく、あたしたちが向こうのファイルをこうして見られると言うことは？」

「あ、向こうも同じことをしていたと言うのか？」

芽衣は健一のぼかんとした顔を見てきゃははと笑った。

「どうして、東海林は無事なんだ？」

「だから、こうして穏便に処理してるんでしょ。お兄ちゃんたちが自主的にファイルシェアの回収に動くなんで向こうからしたら渡りに船といふところじゃないの、海軍だけに船とか？」

芽衣はつまらない冗談を言ったが、健一は唇を囁んでいた。散々走り回った挙げ句に

向こうの手の内で弄ばれていた感じだった。この段階で、こちらも向こうの手の内を知ったことになるが、この先芽衣の助けが必要になると痛感していた、そんな目で芽衣を見た。

「おい、マッケイはC I Aの手先なのか？」

「知らないわよ、でも、あの人のファイルよね」

「他の作戦はどんなものだ？」

「さあ」

芽衣が別の作戦ファイルを開くと、エルベ川を潜航艇で上流に上り、東ドイツ内のエージェントを逃がすというすごいものが入っていた。

「おいおい、本当かよ。何かからかわれている気がしてきた」

「日付は八十年五月十日のファイルだけど……」

「東ドイツ秘密警察に察知された西側情報機関員五名の人命を尊重し、潜航艇による国外脱出を計る。北海から潜水母艦として三十五年前に日本から捕獲したイ号潜水艦を使用、川下から甲標的型潜航艇を発射する。潜航艇の指揮責任者があのマッケイらしいな、潜航艇をベルリンの近くにまで接近させ、この作戦は成功したらしい」

「スパイ大作戦ね」

「どうして、こんなややこしいことをしたかだが、港にはソナーが据え付けられて空にはレーダーがある。しかし、川の中には何もないことを逆手に取った。座礁の危険があるが、陸上ルートと比べると計算上のリスクは同等と判断した。と、彼は上申書にそう書いている。余程有能なやつらしいな」

「だから、お兄ちゃんの敵役になったんでしょ、カッコいい」

「ふん、この件は明日教授に報告しておく」

「あたしの名前は出さないでよ」

「わかってるよ、全部俺の手柄さ」

時計を見ると一時を回っていた。芽衣もいい加減眠くなっていた。健一は悪かったなと立ち去り自分の部屋に戻った。芽衣は遅いけど、冷めたお風呂に入った。ガスの栓を開けて追い焚きしたがすでに冷めているので中々温まらなかった。別にこんな夜中に入らなくてもいいのだが、やはり、友達に風呂にも入っていないと思われることが一番恥ずかしいのだ。

風呂から上がって日記に何か書こうかと思ったが、今日一日の行動で書けることはなかった。

布団の上にくろんと横になり、掛け布団を被るとそのまま深い眠りについた。

4. ともだち

4. ともだち

明け方、いつもは起きない時間帯に壁越しに健一の部屋の目覚まし時計のアラームが聞こえてきた。うるさいなあ、と芽衣は目をこすりながら起き上がった。

「まだ、五時じゃん」

もう一度寝ようとしていたら、隣の部屋でバタバタとファイルをまとめて健一が出勤する様子を感じ取れた。いつもより二時間早かった。きっと早く行って教授に報告するための資料をまとめるに違いないと芽衣は無視してもう一度寝た。

いつもよりは、少し早めに起きた。やはり寝不足で学校まで走る気がなかったからだ。通学途中で理香と出会った。

「おっはよ、理香、昨日はプレゼントありがとうね」

「いえ、つまらないもので……あんたんちのお母さん少し態度が悪いんだけど、あたし何か嫌われることしたのかな？」

「げ、お袋が？ そんなことないと思うけど、最近年のせいか少し呆けてきてるのよ」

そんな言い訳をした。そうでもしないと理香のことを嫌っているとは知られるわけにはいかない。

高校はいつもの通りの日常性の宝庫だ。いつも変わらないメンバーと変わらないスケジュールだ。芽衣は一時限目の古典で、先生の朗読を聞きながらうとうと、寝入ってしまった。

五月の風がふわりと窓際のカーテンをふくらませて、その爽やかさを強調していた。芽衣はそのカーテンの陰に隠れて、居眠りタイムを取っている、二時限目も熟睡し、三時限目の終わりに誰かに頭をはたかれて目を覚ました。

山中志乃だった。手にはトートバックを持っている。

「次体育だよ。更衣室に行かないと男子が来ちゃうよ」

彼女は親切にも教えてくれた。芽衣は自分の体操服をそのまま手に取ると体育館横の更衣室に向かった。もたもたと着ている服を脱いで体操服に着替えた。半袖シャツと短パンだ、太ももが出るのを嫌がって、理香は勝手にハーフパンツに替えていた。芽衣は中学校の時のものを使っている。これも、制服がないので決まりがなかった。

担当の横山先生がやってこずに自習かと芽衣は喜びそうになったが、三年の担当である和田美紀先生が代わりに来た。

「ええと、今日は横山先生が研修のため、かわりにわたしが担当します。準備がないので、ソフトボール大会にします。九人ずつ別れてください」

「えー、十五人しかいません」

抗議の声が上がった。

「じゃあ、七人と八人、はい」と、手を鳴らして行動を催促した。

芽衣は素早く理香のいるチームに紛れ込んだ。そして、ライトのポジションに流れ込んだ。外野の人数は一人だが、理香が投げるならボールは飛んでこないと思われた。

試合が始まり、理香がマウンドに立った。軽く前傾姿勢をとり、キャッチャーを見るとそのまま振りかぶり華麗なウィンドミル投法で、手首を返して速球を決めた。球はバッターの膝の前、インコース低めに決まった。

バッターはあんな球が打てるわけがないと文句をいった。理香はふふんと笑って野手の方を向いた。内野手ばかりへのメッセージだが、芽衣もその中に入りたかった。

二球目はチェンジアップの高めを空振り、三球目は食い込むシュートを決めて三球三振に打ち取った。

理香のソフトボール歴は芽衣も知らないが、中学校のソフト大会では男子野球部員相手に連続三振を決めた。それほどの腕前だったが、受験勉強を機にスポーツからは遠ざかってしまっている。もったいないとは思いながらも、芽衣は理香がスポーツをやめた理由を何も知らない。

回が入れ替わり、一番ライトの芽衣の打順が回った。これは得意なのだったが、相手投手は女子ソフト部員だった。汚名を挽回するかのように、ひたすらインコース低めを決めてきた。芽衣はバットを短く持ち、コンパクトに触れるようにした。

三球目、少し浮き気味の球を芽衣は思いきり三塁方向に引っ張った。三塁手の山中はそれを捕球できず、ボールは外野に転がった。芽衣は悠々と一塁ベースを走り抜けた。

そんな活躍で、芽衣たちのチームは五対ゼロで圧勝した。

更衣室で着替えていると、芽衣は理香の身体に見とれた。彼女の脚のスタイルや、お尻、くびれた腰つき、バスト、全てが魅力的だった。

シャツを脱いだ時に白い肩が見え、芽衣はどきどきしてきた。見とれてぼうっとしていても、次は昼休みを挟んでいるから、害はない。芽衣は理香と二人きりになる時間を待った。

でも、理香はとっとと着替えて戻ってしまった。更衣室に一人で立ちつくしてしまった。

昼休みにお弁当を食べた後、芽衣は話し相手もなく、二階の渡り廊下でぼんやりと壁により掛かって運動場を眺めていた。男子たちが楽しそうにサッカーをしていた。食事の後によく動けるなど思っていると、下の方から声が聞こえてきた。ふと見るとクラスの女の子たちが喋っているのが聞こえた。

理香も入っていて、誰かが芽衣のことを話しているのに気付いた。

——ねえ、黒澤さんってさ、態度が悪くない？

誰かがそう言った。芽衣はぎくっとした。

——そうそう、ちょっと綺麗なところを鼻に掛けてるところがある。

耳の痛い話だったが、そんな風に思われているのが心外だった。

——あの子、すこし重たいところがあるけど、悪気はないみたいよ。

その声は理香だった。彼女にそんな風に思われているのがもっとショックだった。

——でも、黒澤さんがあんたのこと見る目つきが少し怖い気がする。変な関係なの？

——別に芽衣とは何の関係もないわよ。

それも、気付かれていたようだった。芽衣はここから、飛び降りたくなかった。しかし、理香にそんな風に思われたまま飛び降りるわけにも行かない。聞かなかったことにする以外に自分を救う方法がなかった。

放課後、学校を出るときに芽衣は理香を誘ったが、塾があるからと振られてしまい、芽衣はとぼとぼと家に帰った。帰ってからもどうしていいのか落ち着かなかった。理香を見つめていたのがばれていて、本人にも気付かれていて、それを知らないのが芽衣だけだったのだ。早いうちに理香に話をして誤解を……誤解ではないが、解いておかなければならないと思った。

自分の部屋で考え事をしていると玄関のチャイムが鳴った。面倒だなと思いながら芽衣は玄関を少し開けて顔を出した。

「こんにちは」

山中志乃だった。相変わらず、どこかの制服みたいなブレザーを着ている。

「や、やあ」

「ちょっと、相談があってきたんだけど」

「まあ、上がって」

芽衣は彼女を食卓になっている台所に通した。駅前を通ったらしく、ドーナツを買ってきていた。少しラッキーと思った。

「相談って何？」

「黒澤さんってさ、制服賛成派なんだって、ちょっと聞いたものだから」

「まあ、汚いジーパンよりはいいかなと思って」

「なら、話は早いんだけど、生徒会の反対派の反対派を結成しようとしているのよ」

志乃はそう言ったが、芽衣には彼女が本当に制服派とは思えなかった。制服がないからわざと着ているだけで、本当に強制されたら別の格好をするに決まっている。

「山中さんさあ、本当に制服好きなの？」

「強制されるのは嫌いだけど、節度ある格好はすべきだと思うのよ。少なくともTシャツとジーパンでうろつく人は嫌い」

芽衣のことだ。

「でもさ、あたしが賛成派になっても、他に誰が賛成するのよ？」

志乃は、二、三の名前を挙げたが、極めて少数派だ。

「でもさあ、黒澤さん、あたし達まで敵に回していいのかな？」

芽衣は脅迫された。すでにクラスの女子のほとんどの嫌われている、と、直感した。それに乗じて志乃は自分たちの圧力団体に入ることを強要しているのだ。普段はこうした連中とつるんで行動するのが嫌いだったが、理香もすでに味方でないと思った以上、抵抗する気もなかった。

「いいわ、制服派ね」

「よし、一人獲得。じゃあ、ドーナツ食べよ」

「うん、紅茶入れるね」

強引に派閥に組み入れられてしまい、憂鬱な思いだったが、一人きりでは学校生活を送ることは難しいのだ。理香とよりを戻すのが最優先課題だったが、席の近い志乃と親しい関係を築くのも重要だったのだ。こういうところは兄の健一そっくりだったが、いつも、後で反省して自分が嫌いになっていく悪循環だった。

紅茶のポットの中でティーバッグから、紅茶色の渦が湯の中に模様を描いた。

いい香りがしたが、自分では紅茶よりコーヒー派かなという気もしていた。

ポットの中がいい色合いに染まったのを見計らい、ティーカップに紅茶を注いだ。ほんわりと湯気が上がった。

「うわ、美味しそう、黒澤さんってやっぱりお嬢様っぽいな」

志乃はそんなことをいった。芽衣としてはそんなことをいわれたのは初めてだった。

「普段は男の子っぽっていわれるけど」

「そんなことないわ、きっと制服が似合うわよ」

結局話題はそちらの方に流れた。志乃は美味しそうに紅茶を飲んだ。飲む口元を見ると唇がぷるんとしていて、丸いほっぺたがかつての美少女ぶりをうかがわせた。芽衣は少し苦笑した。自分も制服を着て眼鏡を掛けたらどうなるだろう、と、変なことを考えてしまう。

「ドーナツもらうね」

「うん、あたしも」

芽衣もドーナツを手に取り、ほおぼった。シュガーが口の中で溶けて甘みが広がった。ときどき、やたらと甘いものが欲しくなるときがある、そうでないときでもお菓子は心をいやしてくれると芽衣は思った。

「ところでさ」芽衣は突然志乃に聞いた。

「え」

「新しい制服ってどんなのになるの？」

一番気になるところが、今のところあきらかになっていなかった。

「さあ、多分、昔のじゃないかな。校長は昔の制度を復活と言ったんだから」

「でも、洋服屋さんが同じじゃないと、……まだあるのかな？」

芽衣も結構鋭かった。

「本当ね、ひょっとしたらデザインが変わるかも。デザイン募集をはじめることになったら、あたしも応募しようかな」

早速、志乃は、楽天的な推測をはじめた。彼女の話では、何通りかのデザインをすでに考えているらしく、ケント紙にイラストにしているということだった。

「芽衣ちゃんならね、……」

志乃はいつの間にか、黒澤さん、ではなく、芽衣ちゃんと呼び始めた。紺より茶系のブレザーの方が合うかなと勝手に想像していた。

帰り際、一緒に活動頑張ろうねと、芽衣に握手を求めた。

「ん？」

芽衣は彼女の手ぬくもりから、何か違う思いを感じ取った。

しばらく、理香は挨拶以外相手してくれなくなり、芽衣の教室での話し相手はいつの間にか志乃だけになっていた。芽衣は、理香の機嫌を損ねた理由を知っているだけに、こちらからも話し掛けづらい状況にあり、でも、理香に嫌われたままいることにも苦痛を感じている。

昼休みに売店で菓子パンと牛乳を買ってきて、志乃と食べようとして、理香に肩をたたかれた。芽衣は少し嬉しかった、が、理香の表情が明るくなかった。

「あんたのお兄さんから電話があったの」

理香は携帯電話を指し示した。

「え、理香に言い寄ったの？」

「馬鹿なこと言うんじゃないの、ただでさえ変な噂が広がって迷惑しているんだからね」

「ごめん」

「あんたに至急電話してくれだつて。これ貸してあげるけど、人を連絡係にするのはやめてよね」

「ごめん」

芽衣は二度目の、ごめん、を口にした。理香も芽衣との変な噂で困惑しているようだった。悪いのは芽衣だから、謝るしかない。

さっき掛かって来たらしかった、携帯電話の番号にそのまま掛けてみた。健一はすぐに出て来て、まるで悪びれた様子もなく、用件をそのまま話し始めた。

「待ってよ、友達の携帯電話に掛けて呼び出すのはやめてよ」

「仲がいいんじゃないのか？」

「.....微妙なところなのよ、だから、.....」

芽衣が口を濁すと、健一は別の意味に解釈したようだった。

「じゃあ、今度、携帯電話を買ってやるよ。お袋には内緒だぞ」

「本当？」

「それで、相談があるんだが、午前のニュースは見たか？」

「見られるわけじゃない」

「オーストラリアで鯨が打ち上げられたらしい、それで、その件で大使館のアンダーソン氏から連絡を受けた」

「あの人って鯨が好きなの？」

「鯨が好きなのかは知らないが、ただの鯨ではないらしいんだ。ニュースではマッコウクジラと言っているが、あれは、嘘らしい」

「何が言いたいよ」

「詳しい情報は現地でないといけないそうだ。彼らも行くそうなんだが、ネットの専門家としてお前も呼ばれている。海外だぞ」

「いやよ」

「豪華ホテルで三泊四日、プール付きだ」

「海水浴も出来るの？」

「それはどうだろう、鯨が一杯いるらしいから、お前なんか一口だ。ははは」

健一のふざけた口ぶりに、芽衣は行かないと言って電話を切ってしまった。

「理香ごめんね。十五分も喋っちゃった」

芽衣は精一杯可愛く謝った。

「別に、電話代は親持ちだからいいけど、海外に行くの？」

「分かんないけど、オーストラリアだって。でも何を考えているのか分かんないから」

「もったいない」

そう言って、彼女は教室から出て行った。

近頃、女子の大部分と、芽衣たち二人が完全に別れてしまっていた。早めに修復しないと一年生が終わるまでこのままになってしまう可能性があったし、理香との距離が開いてきているのが、芽衣に取り一番気がかりだった。

菓子パンを食べて牛乳をストローで吸ってふうっと息を吐いた。

「芽衣ちゃん溜息？」

「さあ」

「芽衣ちゃんて、渡辺さんのことが好きなの？」

志乃は露骨に聞いた。

「馬鹿なこと言わないで、変な気持ちなんてないわよ」

芽衣は否定したが、声が震えているような気がした。志乃は芽衣の目を見つめ、可愛いと、つぶやいた。意味がわからないし、最近の志乃の目つきも何となく不気味だった。多分理香も同じように感じていたのかも知れない。

帰りは駅まで志乃と一緒にだった。すでにこのペースに引き込まれつつあった。

「じゃあね、芽衣」

「ばいびー」

途中で芽衣は、別れて家まで歩いた。

家の前にタクシーが停まっていて、健一がアタッシュケースを抱えて下りているところだった。大学からの帰りにははずいぶんと早かった。また、よからぬことを企んでいるに違いないと考え、しばらく、回り道をしてから帰った。

玄関を開けると、靴が脱ぎ散らかされていた。芽衣は、しょうがないねという顔をして兄の靴を揃えておき、自分も上がった。健一は台所にはいなかった。

安心して、手を洗ってコーヒーを入れようとしていると、彼も下りてきた。

「おお、早めに帰ってくれたのか、すまないな」

「別に、これが普通の時間だよ」

「昼に電話した件だが」

「行かないわよ、夏休みでもないし、学校首になっちゃう」

健一は手のひらを上に上げてまいったねと言いたげなポーズを取った。

「あの鯨の正体を知りたくないか」

「マッコウクジラだったんでしょ？」

「だからそれは嘘なんだ。教えて欲しいか？」

「別に」

芽衣はそれどころではなかった。

「しょうがないな、潜水艦だったらいいんだよ。どこからかやってきて、浅瀬に乗り上げて、明け方潮が引いて完全に陸に上がったそうだ。その後、現地警察と乗組員とで銃撃戦があり、勝負は付いていないらしい」

「どこの話なの？」

「お、興味が湧いてきたか。オーストラリアのケアンズだそうだ。潜水艦の国籍はまだ不明らしい。写真では、少なくともロシアやアメリカではないと、アンダーソンは話していた」

「興味はないけど、その話であたしに何をしろというのよ。銃撃戦の経験もないし」

「そんなことはわかっている。もともと、潜水艦という生き物には目は付いていない。耳とたまに行う通信だけだ。それに、海中で使うからあまり沿岸部に接近することはない」

「じゃあ、どうしてそんな浅瀬に迷い込んだのかと言う訳ね」

「そういうこと、調査が必要だ。明日から現地に飛ぶぞ」

「一人で行ってよ、あたしは忙しいの！」

芽衣は怒鳴って自分の部屋に閉じこもった。健一を後にしてドアをバタンと閉じると、芽衣はベッドにうずくまった。海外旅行どころではなく、クラスでは孤立し、一番好きだった理香とも遠くなってしまった。この間、渡り廊下の下で喋っていた女の子の言葉が気に掛かった。——綺麗なのを鼻に掛けて態度が悪い。そんな風に言われているのだ。態度が悪いのは自分でも少し自覚はしていたが、鼻に掛けているのは心外だった。でも、こうした風評被害には打つ手がないのだ。しばらく大人しくして彼女たちの記憶から消えてしまうのを待つしかない。

——それまで、高校には行きたくない。

芽衣は枕を抱えて頭を埋めた。

トントンとドアをノックし、健一が入ってきた。

「おい、しょうがないから、一人で行くけど、何かあったらこれに連絡するから」

芽衣が枕元に目をやると、高そうな携帯電話が置いてあった。

「お兄ちゃん、これくれるの？」

「馬鹿、研究室の備品だ。まあ、来年の三月には入れ替わるから、それまで持ってもいいぞ」

「やった」

芽衣が嬉しそうに、手にとってさわっていると、健一は妹が少しだけ立ち直ったことに安心したようにうなずいて、そのまま、出て行った。玄関からタクシーらしき車の音がした。背広を着て、アタッシュケースを持っていたから本当にこれから、オーストラリアの鯨を見に行くのかも知れないと思った。

少し眠って、七時前に起きると台所で、母親が夕食の支度をしていた。カレーの香りがして、少し食欲が出て来た。

「あら、あんた、帰ってたの？」

「え、お母さん、気付いてなかったの」

「もう、健一が学会で出張だと言うからそっちに気を取られてたわ、先に食べなさい」

いつも、忘れられる子だった。芽衣は皿にご飯を大盛りに盛り上げて、出来たてのカ

レーを掛けた。

「カレーって一晩経つと美味しいんだよね」

「生意気言っていないでたべなさい」

もぐもぐとカレーを食べていたが、母親はまだ食べようとしなかった。

「お父さんは今日も遅いの？」

「そうねえ、人員削減のあおりかしら」

母はそう言った。父親は町内の商店街にある電器店に勤めている。昔は何人か店員がいたが、退職してもその補充はなく、現在店長と父の二人になっていて、ほとんど休みがなかった。兄が高校生の頃までは、まだ、適当に休みを取れていたらしかった。

「ねね、お母さんてさ」

「何よ」

「どうしてお父さんと結婚したの？」

「お見合いよ」

それにしたって何か決め手がありそうに思えた。父がはげる前は男前だったと兄から聞いてはいたが、母はどう見ても不細工だった。父からプロポーズするほどの魅力があったのか、芽衣から見ても疑わしかった。それに、性格もよくない。芽衣にとっての、世界の七不思議の一つではあった。でも、二人が結婚しなかったら、芽衣も健一もここにはいないのだ。

——不思議なもんだねえ、と生意気なことを考えた。

食事が終わり自分の食器を洗って、二階に上がり、理香からもらった日記帳を開いた。表紙の二人仲良く写っている写真を見ると、また、涙が出て来た。

——明日は口をきいてくれますように。と日記に書いた。

気を取り直して、パソコンのスイッチを入れた。

インターネットでオーストラリアで鯨が打ち上げられた記事を探したのだ。しかし、今日の日付でそんなものは載っていなかった。時差かなと、思ったが、オーストラリアと日本とは経度が近いので日付が変わるほどの差はない。念のために、芽衣はオーストラリアの新聞紙のホームページを翻訳ソフトに掛けて探したが、どこにもそんな記事がなかった。

——あれ、お兄ちゃんはどこに行ったのだろう？

芽衣は気になってもらったばかりの携帯電話の住所録を探した。黒澤助手携帯という項目に入っていた。芽衣はそれを選んで押した。

「はい、黒澤」

「芽衣だけど、……」

「今飛行機の中だ、勝手に掛けるな」

切られてしまった。もう訳がわからなくなってきた。

お風呂に入って、ベッドの上に寝っ転がるとそのまま眠ってしまった。

次の朝、学校に行くと、理香が不機嫌そうな顔で、頭を机の上に載せていた。

「おはよ、どこか悪いの？」

「ごめん、今日からアレ痛なんだ。余り話し掛けないで」

「ああ、アレね、今日から何だ。わかったわ」

芽衣の声は少し大きかったようで、その時クラスにいた二、三人の男子がこっちを見た。理香は真っ赤な顔になった。芽衣は言い訳しようとしたが、すでに、虎の尾を踏んだような気がした。

「あんたは、いつも、いつも、デリカシーがなさ過ぎるのよ！」

理香は余程機嫌が悪かったらしく机の上のものを下に落としてそのまま教室を飛び出していった。そのまま帰ってこなかったから、家に帰ったに違いない。

「芽衣ちゃん、渡辺さんにあんなこと言っちゃ駄目よ。しかも男子の前で」

確かに芽衣の失言だった。言わなくて良いこと、いや、言ってはならないことを言ってしまったのだ。

「渡辺さんは、二度と芽衣ちゃんと口をきいてくれないと思うよ」

そう言う志乃の眼鏡が冷たく光るのを感じた。

理香と仲違いしたら、他の女子とはほとんど付き合えないと思ってもいい。理香がいたからこそ芽衣でもこのクラスで何とかやって行けたのだ。

志乃も余り当てにならないし、理香とは完全に絶交だ。もう芽衣には高校のこのクラスにいるのが苦痛にすら感じていた。こんな居心地の悪いクラスは初めてだった。

その日、他の女の子と会話を交わすこともなく、一人でとぼとぼと帰り道を歩いた。

歩いていると、兄からもらった携帯電話がなり出した。知らない番号だったが、恐る恐る出してみると相手はアメリカ大使館、マッケイ氏だった。

「はい黒澤です」

「芽衣さんですね、少しお力をお借りしたいのですが、いいですか」

断る理由がなかった。それに兄貴の行き先に関しても心配はしていた。協力となると赤坂の大使館に行かなければならない。以前は不安もあったが、マッケイ氏がいるなら少し安心している。

行って見ると、会議室に通され、テーブルの上にかかなりの点数の資料が散乱していた。

「お兄さんが、オーストラリアに赴かれたことはご存じですね」

「はい……でも、鯨の話と聞いてたんですけど新聞にも出てないんです」

「誰かにオンライン版は情報操作されています。現地の紙の新聞には出ていました」

「どういうことですか」

「それを調べたいのです」

「具体的におっしゃって下さい」

「潜水艦乗組員は警官との銃撃後に投降し、こちらの捜査に協力しました。そのときに通信記録や海図などを押収しました」

「それで、あたしは何を？」

「これらのデータを解析して真の敵をあぶり出して欲しいのです。見てわかるようにインドネシア海軍の潜水艦が一隻行方不明になったとて、さほどの国際問題にはなりません」

「あの、あたしが、その捜査に協力する見返りみたいなのはあるんですか」

マッケイ氏は、意外な顔をした。自分の国で開発したウイルスが世界中で悪いことをしている。それを取り締まるのは芽衣にとっても名誉の仕事とっていたようだ。

「芽衣さん、あなた、最近友人との仲がよくありませんね」

「どうしてそんなことを知ってるんですか」

「芽衣さんがわたしたちのファイル調べていたことと同じようにあなたも調べることが出来るんです。これは、情報部員として心の隅に置いてください」

「はい」

「捜査の見返りとしては、その問題を解決するのに協力する、でどうですか」

「そ、そんなことできるんですか」

「それを解決するのが、この薬です」

マッケイ氏は金属製のトレイに置かれた、怪しげな薬の入った注射器を示した。これは精神薬で、これを打って、マインドコントロールに掛けると心を自在に操作できると言った。だが、芽衣にとっては理香は親友で、そんなひどいことは出来なかった。

「でも、彼女との仲は決裂し、一生口をきいてくれない。そうですね」

「はい」

「あなたにしても、この取引に応じるメリットは十分なはずですよ」

理香が再び自分だけのものになる。これは悪魔のささやきに等しかった。

「でも、どうしてあたしの私生活のことまでわかるんですか」

「それは企業秘密ですよ」

マッケイ氏はそう言ったが、芽衣は自分の身の回りの誰かがマッケイ氏のスパイではないかと勘ぐった。勘ぐり出すと、山中志乃も怪しいと言えれば怪しい、彼女が接近してから、芽衣と理香の仲が決裂したのだ。でも、だ、芽衣の手の内が知られすぎていた。

「理香の心が再びあたしに向けられるんですね？」

「保証します」

「では」

とうとう、悪魔の取引に応じてしまった。理香はどこかで掠われてこの注射を打たれてマインドコントロールを受けるのだ。それも、芽衣の為だけにだった。

取引は成立し、芽衣は資料の解析作業に取りかかった。

まず、芽衣は目の前の図面から、潜水艦の本来の航路と、今回座礁した地域との差異について指摘した。元々の海域から少しずれただけなら操船ミスと言うこともあり得たのだ。

「それから、艦内から押収した海図と水温データですが、これは、元の図面とは違います。誰かに改竄されています。しかも、途中ですり替えられることはないから、出航時にもう仕組まれていたと考えられます」

「つまり、芽衣さんは、誰かの関与により、わざとこの海域に誘導されて、間抜けにも座礁してしまったと言いたいわけですね」

「相手の潜水艦基地への侵入が証明出来れば、この裏付けは取れますよ」

「やって下さい」

マッケイ氏から一台の端末を与えられ、以前マッケイ氏のファイルをハッキングしたときのように、潜水艦基地の命令書ファイルを入手した。

ここにあった、命令書と、銃撃戦の後で押収した命令書の文書は似てはいるが、作戦海域の経度と緯度がまるっきり違っていた。海図や温度分布、浅瀬の情報なども微妙に違っていた。飛行機のパイロットなら気付くかも知れないが、外が見えない潜水艦なら、こうしたデータを書き換えられるとこうしたことも十分に起こりえる。

芽衣は、解析結果を記録媒体に書き込み、マッケイ氏に報告した。

「早いですね、さすがです。しかしながら、誰が、そして、何故という質問の答えにはなっていませんね。潜水艦一隻などどうでもいいのです」

「明確な改竄の痕跡を残していないのです。多分、あのライオンの仕業と思います。もし、ですが、これが、アメリカやロシアの原子力潜水艦だったらどうか、と、相手に考えさせるのが目的だったのではないのでしょうか？」

マッケイ氏の目が一瞬鋭くなった。

「合衆国海軍への恐喝ですか。無意味です」

「そうとも言い切れないんです。このライオンの攻撃は世界中に分散しているウイルスの集まりから発信されています。だから、使われているコンピュータの内容がいつでも書き換えられるぞと言われれば、打つ手がなくなります」

「ライオン……あのファイルシェアの中に入っているウイルスですね」

「はい、それに、軍艦だけではありません。あらゆる政府機関、金融、銀行、通信、それらがサイバー攻撃や今回のような何食わぬ顔でのデータ改竄をされると大混乱におちいります」

「対策としては、ファイルシェアをインストールしているパソコンの一掃しかありませんよ」

「でも、個人の摘発は無意味です。仮にこのソフトを一掃したところで、新しいもっといいものが出てくれば皆が乗り換えます。それが安全なもの、と言う保証はどこにもありません」

「そうですね、わかりました。本気でマイケルソフトの尻を叩くことを考えましょう」

「でも、ライオンがこんな攻撃をしてくるなんて意味があるのでしょうか、もっと、ひっそりと行動した方がいいかも知れないのに」

芽衣が大きな瞳をくりっとさせて、つぶやいた。

「実は一週間前から、合衆国内でのファイルシェアユーザーをFBIが摘発に掛かっているんです。現在、百名弱の逮捕状が出ています」

「そのくらいの数では焼け石に水じゃないですか？」

「いえ、FBIに逮捕されるといって、普通のユーザーなら手を引くでしょう。ソフトのコピーくらいで逮捕されたのでは割に合いません。その後に残る悪質なユーザー、要するに犯罪者です、それをあぶり出すのが目的でした」

「続けるんですか？」

「ですから、ライオンが反撃に出たんでしょう、このままでは危険です。方針転換するようワシントンに報告を上げておきます」

マッケイ氏がそう言うのをきいて、芽衣は彼がやはり、高官であることを確信した。

一仕事が終わって、芽衣は出されたコーヒーに手をつけた。豆から煎ったようでいい香りがした。

「あの、マッケイさん、日本には長いんですか？」

「いえ、半年ほどです」

「では、日本語はどこで覚えたんですか」

「こちらに来てからですよ。我が国の海軍は世界各地に寄港しています。将校は地元との付き合いがあるので自然に覚えるのですよ」

芽衣は明らかに嘘と思った。ベルリン近郊でのスパイのような作戦のファイルも見てしまったし、さっきの怪しげな薬を出してきたことから、海軍大佐とは思っていなかった。

大使館からの帰り道、芽衣は猛烈に焦りを感じた。理香に対してあんな薬を使うことをお願いしてしまったことに後悔していた。彼女にそんなひどいことをすること自体の抵抗感もあったが、万が一、芽衣がそんなことをしたと彼女に知られたら、今度こそ自殺ものだと思ったのだ。でも、引き返して、さっきのお願いを取り消しますと言う勇氣もなかった。彼女と一生口をきいてもらえない恐怖にも耐えられなかった。

家に帰った後、母親と食事を取ってから、自分の部屋にこもってしまった。日記に「ごめんね」と何度も書いたが、彼らが一体どんな薬を使うのかが気になったのだ。

一晩中ねられずに何度も寝返りを打ち、夜が明ける頃には目が赤くなっていた。

とぼとぼと学校に行き、校舎入り口の廊下で、芽衣は後ろから抱きつかれた。

「芽衣ちゃん、おっはよ」

理香だった。ものすごく上機嫌に見えたが、芽衣は思わず目を伏せた。

「おはよう、昨日はゴメンね、男子の前であんなこと言ってしまっ」

「何のこと？」

「覚えてない？ アレのこと」

「ああ、生理痛？ 女の子同士ならお互い様よ、あんたもあるでしょ」

理香の言うことは、確かに昨日と百八十度異なっていた。本当に薬が効いているのかという疑問を感じた。それに、理香は芽衣の身体をべたべたと触ってきた。これも、今までの芽衣と立場が逆転していた。

理香が抱きつき、ぎゅっと腕に力を入れると、芽衣は胸がきゅんとなった。他の女の子も見ていたのに、理香は全然気にしなくなっていた。

「あたし、芽衣の妹になりたいな」

「本当？」

嘘でも芽衣が望んでいたことだった。

「あのさ、理香、昨日、変な人に会わなかった？」

「ううん、どうして」

「いや、別に、……教室いこ」

芽衣が教室に行こうとすると、理香が腕を組んだ。芽衣は少し恥ずかしかった。他の女の子たちも不審そうな目で見ていたが、理香に面と向かって反抗的な態度を取る子も

なく、芽衣も自然に元の関係に復帰することが出来そうだった。

しかし、理香が親しくしてくれるほど芽衣は気まずい思いをした。恐る恐る、昨日、理香が飛び出していった後のノートを見せてあげたり、逆に芽衣が忘れた教科書を見せてもらったりもした。

帰り道、塾の時間があるにもかかわらず、芽衣の家の前まで一緒に歩いてくれた。段々と芽衣の目に涙が浮かんできた。

「どうしたのよ、急に」

「ううん、なんでもない」

「今度塾がない日に芽衣ちゃんの部屋に遊びに行ってもいいかな？」

「え、……うん、もちろん」

本当にいいのかと思いながら家の前で別れた。

「じゃあね」

「ばいびー」

と、芽衣は手を振った。

家にはいると芽衣は涙を手のひらで拭った。玄関には健一の靴が脱ぎ散らかされていた。不審に思って耳を凝らすと、台所から健一と母のしゃべり声が聞こえてきた。

健一は鯨の話をしていて。オーストラリアで打ち上げられたマッコウクジラの様だったが、一昨日は、嘘だと言っていた。

「ただいま」

「おう、お帰り」

「お兄ちゃん帰ってたの？」

「今日の飛行機で帰ったんだ。楽しかったぞ」

「じゅ、銃撃戦のこと？」

「馬鹿じゃないか、鯨を見に行ったんだ」

どうも、母親の前なのでとぼけているように思えた。それで、芽衣も深くは追求しなかった。コーヒーを飲んで一緒に土産話を聞いていた。物理学の研究で鯨の出す超音波の話をしていて。特定の深さで一万キロ以上遠くまで声が届くというような話だった。健一が本当にその件で出張したのかと疑い出した。

コーヒーを飲み終わると健一は、芽衣を連れて二階に上がった。

「何か変わったことはなかったかい？」

「え、あ、別に……」

芽衣も理香と引き替えにマッケイ氏の仕事を引き受けたことを言えなかった。

「そう、ならいいんだ」

「本当に鯨だったの？」

「そうさ、と、言いたいところだが、行ったらすでに何もなかった。アンダーソン氏が警察で聞いたら、環境保護団体の集団が沖まで引っ張っていったと言っていた」

「新聞には載ってないんだけど、何かおかしくない？」

「新聞社のインターネット版には確かに載ってないが、地元新聞には小さく載っていた。まあ、大した事件じゃないから不思議じゃない。今回はアンダーソン氏の勇み足と言う

ところだな」

健一も気楽にそう言った。芽衣は何となく全員が、敵にはめられていると言う感じがした。しかし、あまり言えなかった。

部屋に戻ると、パソコンのスイッチを入れた。理香に対する責任上からも、ネット上で暗躍しているあのライオンの動きを監視し、出来れば押さえ込みたいと思ったのだ。

しかし、広大なネット空間で、しかも、分散型システムだからどこで動いているのか、この瞬間に誰が被害を受けているのかを知ることは出来なかった。あっちへ行ったりこっちへ行ったりしている、小さな情報パケットの塊だけが検出できたが、これだけでは全く意味をなさないのだ。

日本の代表企業としてリストされた、五百社があった。経産省から兄貴たちに絶対に被害を出すなと釘を刺されているところだ。西浜貿易に関しては、この中にも入っており被害を出せない上に、理香の父親まで勤めているのだ、芽衣にとっても絶対に被害を出すわけにはいかなかった。彼は部長だから万が一の時に責任を取って辞任することもあり得る。理香がどこかに行ってしまうのだけは避けなければならない。

芽衣が西浜貿易の通信を監視していても、何の変哲もないものばかりだった。

——でも、潜水艦に対する攻撃は正規の海図や命令書の改竄という、本職でなければわからない様な手の込んだものだった。

そう言う目で見ると、この会社から出ている書類など、高校生が見てわかるものではなかった。ウイルスならチェックできるが、ライオンが仕掛けるとしたら、決済書類や払い出し票などの細かな数値を書き換える可能性があった。しかも、分散システムだからどこから侵入しているかもわからなくなっていた。この点、正に完璧なシステムだった。

芽衣はころんと、ベッドの上に転がった。

理香のことでマッケイ氏に人質を取られたような感じになってしまったし、西浜貿易に対する防衛策も考えなければならない。どちらも芽衣が取り組まざるを得なくなってしまっている。ここまで考えて、ようやくマッケイ氏にも、はめられたことに気が付いた。

しかし、それから、マッケイ氏の方からは連絡もなく、五百社の企業にも目だった被害はなさそうで、小康状態が続いていた。

高校生活も六月下旬に差し掛かり、芽衣は薄着になった。下は相変わらずジーンズであるが、上は半袖のシャツだ。

制服運動もいつの間にか下火になり、学校も反対派もどちらの運動も動いていなかった。

今週から体育がプールになるので、荷物が少し増え、芽衣は普通のカバンの他にトートバッグを持っていた。水着だが、中学のスクール水着をそのまま使っている。

朝、いつものように、教室で理香と出会った。いつもの通りの笑みで芽衣に挨拶してくれる。最近は芽衣もあのことを頭の中から忘れつつあり、理香に馴れ馴れしく接して

いた。

「理香お早う、今日は暑いね」

「そうだねえ、冷房入れて欲しいね」

「理香は水着はどんなのにしたの？」

「ああ、体育の話ね、一応みんなの動きを見て決めるわ、可愛いのと中学の競泳用のとを両方持ってきてる」

「中学のにして、ね」

芽衣は少しわがままを言った。

「うん、いいよ」

理香は素直に従った。

ここ最近、芽衣は理香とべたべたとくっついていたが、忘れ物があり、更衣室には少し遅れていった。芽衣が更衣室に入ろうとすると、女の子たちが大笑いしているのが聞こえた。

——ええ、黒澤さんと仲良くしてたのはそんな理由だったの？ 信じられない。

——あたしも最初は信じられなかったけど。

理香がそんなことをおかしそうに話していた。芽衣はあの薬のことがばれたのかと、冷や汗が出たが、話を聞いていると全く違う内容だった。

——変なおじさんがね、月十万円くれるから芽衣と仲良くする振りをしてくれと言うのよ。信じられなかったけど、本当にくれたからやってるの、そうでもなきゃ、付き合ったりしないわ。

——さすが、理香。あんな子と真面目に付き合うことないわよ。今度そのお金でカラオケにでも行こう。

——まあ、見ていて。もう少し持ち上げて落とすから。学校に来なくなるかも。

——きゃはは、と楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

そこまでいわれて、芽衣はその場に顔を出すことが出来なかった。とぼとぼと教室に帰って一人で自分の席にいた。男子達も更衣室でここには誰もいなかった。

ふと、机の中を見ると、クシャクシャに丸めた紙が入っていた。以前、芽衣から理香に当てて書いたレターで、ゴキブリの死体が入っていた。

「きゃっ」

芽衣は、あたふたと椅子から転がり落ちた。ふわふわと頭の上に落ちてきた紙にはマジックで「馬鹿」と書いてあった。

もうその場で荷物をまとめ、家に帰ってしまった。もう、高校に顔を出せないと思った。それに、あのマッケイにも騙されていたのだ。変な薬なんて最初から怪しいと思っていたのに、やっぱり小細工してあったのだ。でも、月十万円で芽衣の相手を嫌々していただけたとは、安っぽく見られた感じもしたし、おかしいとは思ったのだ。

さすがに午前中で帰ると家には誰もいなかった。ショックのあまり涙も出なかったが、そのまま布団に潜り込んで枕に顔を埋めた。

壁の時計を見ても中々進まないような気がした。

段々、日が沈んで、やがて真っ暗になった。芽衣もどうしていいかわからなくなった。学校にも行けなくなったし、かといって解決策も見付からない。芽衣は思い詰めて、物置の工具箱からロープを取りだし、ベランダの物干し竿に掛け、自分の首を通してみた。このまま体重を掛ければ楽になれる。そうわかっていても死に対する漠然とした不安があった。こんな高校生活を送るより、死んでしまった方が楽なはずだ。そう自分で言い聞かせて何度もチャレンジした。

最後のチャレンジは十一時だった。外はもう暗く、心も寂しくなった。ついに、諦め再びベッドの上に塞ぎ込んだ。

5. 九死に一生

5. 九死に一生

十二時頃、健一が帰ってきた。しばらく部屋で机に向かう音がしていたが、こちらが真っ暗なのが気になったらしく、様子を見に来た。

「お、何だ、いたのか？」

芽衣は返事をしなかった。

「どうした、誰かにいじめられたのか？」

「そんなんじゃないよ」

「お前のことだから、心配はしていないが、理香とやらと喧嘩をしたとか、クラス中の女子に無視されているとか、男子にまでいじめられているとかじゃないだろうな」

芽衣は涙目で健一をにらんだ。

「まさか、当たっているのか？」

「うえーん」

「おいおい、泣いても問題は解決しない。お前の取る道は二つだけだ。向かっていくか、逃げ出すかのどちらかだ」

「じゃあ、逃げ出す」

「ふん、一度逃げ出すと、一生逃げ回ることになるが、いいのか？」

「でも、もう立ち直れないよ」

「確かに、あの程度の高校に戻るために血を流すのは馬鹿みたいだ。それは、言える。だが、夏休みには俺の仕事を手伝ってもらいたいし、将来的には俺の研究室にも来てもらいたいんだ。高校は卒業してもらわないと困る」

健一が芽衣の高校を馬鹿にしていたのはわかったが、結局自分の都合でものを言っているようだった。

「お兄ちゃんにはわからないわよ、優等生のくせに」

「まあな、俺とお前とで年が離れてるじゃん」

「そんなこと分かってるわよ」

「だから、同じ小学校に通ったこともないし、ずっと別だった。しかし、お前の性格や心の内がわからないでもない。助けてやろうか？」

芽衣はとまどった。前にもマッケイ氏に同じことを言われてはめられてしまったからだ。

「それで、お兄ちゃんにはどんな見返りがあるの？」

「変なことを言うなよ、可愛い妹が傷つくのを見ていられない、それだけだ」

芽衣は少し期待を持った。頼りになる兄貴がいたのを忘れていた気がした。

「どういう手段？」

「あのけちな高校は辞めろ、二学期からましな学校に転校だ。いいな」

芽衣に取り大胆な提案だった。家計が厳しいから都立高校に行ったのだし、私立なら授業料は一気に値上がりするから、母親が何というかわからない。不安そうな顔をする
と、健一は他のことは心配しなくていいと芽衣の頭を撫でた。最後の最後はこの兄しか
味方はいないと痛感した。

健一は、芽衣は首を縦に振ると、夜中の十二時過ぎなのに携帯電話でどこかに掛け、し
ばらく話し込んでメモを取り、よろしくと言って電話を切った。

「話が簡単なのね」

「世の中簡単なものさ、それを、大衆がいたずらに複雑にしているんだ。転校先だが」

芽衣がごくりとつばを飲んだ。

「うちの大学に近い、学校法人本郷女子学園高等部で、理科系進学クラスに入ってもら
う。授業料は特待生扱い、進学校でまじめな校風だが、フレンドリーで通っている。さ
らに、部活の先輩かクラスの学級委員に慣れるまで付き合ってもらよう依頼した」

本郷女子学園と聞いて、芽衣はびっくりした。女子の進学校としては全国でも一、二
位にある名門校だった。中学高校の一貫教育校で、中学から入学する人がほとんどで途
中ではいる生徒は少ないと聞いていた。卒業生のうち百名近くが東都大や、国立大学の
医学部に進学していて、本来なら芽衣など近づくことすら出来ない学校だった。

「たった、十分で？ 誰に頼んだのよ、校長先生？」

「文科省事務次官秘書だ。根回しなら任せろ」

「あのお母さんとお父さんがなんて言うかな？」

「進学クラスからスカウトされたと、俺からうまく言うておく、安心しろ」

「制服とかあるの？」

「あるだろうな、気に入るかどうかは知らない。それから、一つだけ言うておく」

「うん」

「こんな手段は一回きりだ。同じ失敗は二度と犯すなよ」

「ありがとう、わかったわ」

何となく目の前の難題から逃げることが出来そうだった。

次の日、家にいると、早速封筒が届き、書類には転学手続きに来るよう書いてあった。
それに、制服の指定があり、体操服やら実習服も決まったものがあった。芽衣は説明書
に目を通した。

制服は夏場は白の半袖ブラウスに青いリボン、紺のベストにグレーのチェック柄ス
カートで、ワンポイントの白ソックスに黒の革靴だった。冬服は長袖のブラウスに紺の
ベストとブレザーになる。スカートは膝丈で折り曲げ禁止と書いてあった。

禁止されなくても、そんなことする気はなかった。

母親には健一からすでに言ってくれたらしく、昼から手続きに行く予定でいるらし
かったが、さすがに、芽衣の顔を見て真意を問いただされた。

「芽衣、本当は何かあったのかい」

「ううん、進学に有利な方がいいかなと思って……」

「いじめられたりとか言うんじゃないだろうね、あの理香という子に」

さすがに母親だけあって鋭かったのだが、芽衣は言わなかった。

午後から緑が丘高校の教頭に挨拶しに行って転学することを伝えた。事務室で在学証明だけ出してもらい、その足で新しい高校の転入手続きをしに行った。健一からの連絡では、文科省の私学助成課長から直々をお願いをしてくれていると言うことで、芽衣たちが行くと、高等部と中等部の責任者である理事長と、高等部の校長と教頭が出迎えてくれた。

「ようこそ本郷女子学園高校へ、お兄様が東都大の教官をなさっておいでとかで、お嬢さんも進学を希望しているのですね。わたくしどもも精一杯努力しますので、これから頑張りましょう」

校長はそう、物々しい挨拶をした。芽衣も深々と頭を下げた。——問題があって転校したんじゃなくて、兄の趣味で転校したのだと、芽衣の面子を思い切り立ててくれた様だった。

母と一緒に学校の説明を聞いていると、途中で呼び出されたらしく、一人の生徒が入ってきた。上品そうな顔立ちのショートカットの女の子で、少し度の強い縁なし眼鏡を掛けていた。色白で鼻筋が通っていて唇が小さく知的な雰囲気だった。

「こちらは、一年A組のクラス委員の古川恵子さんです。本校に慣れるまで面倒を見ることにしています。黒澤さんいいですね」

「は、はい、よろしくお願ひします」

芽衣はぺこりと頭を下げた。

「よろしくお願ひします」

古川恵子も上品にお辞儀した。

「……本校の説明は、以上ですが、また、わからないことがあったら、担任か教頭にいつでも聞いて下さい。それから、学校生活については、中高一貫校なので途中からはいと色々とまどうことも多いと思いますので、普段のことはこちらの古川君に聞いて下さい」

母親と芽衣は校長と教頭にお辞儀をした。これから、制服を作りにはデパートに行かなければならないが、出来るまでは現在はブラウスだけなので中学の制服に校章だけつけておけばいいと言われた。明日からの登校だが、芽衣だけ中を案内してもらった。

「黒澤さんって、ものすごく成績がいいそうですね」

古川恵子はそんなことを言った。芽衣は、いえ、馬鹿ですと答えようとしたが、彼女の真剣な目に反論を封じられてしまった。

彼女の説明では、大体進路別にクラスが別れていて、A組は国立大志望者になっていると言うことだった。

「黒澤さんのお兄様が東都大の教官をなさっていると、伺ったんですけど、やはり、東都大を目指しているんですか？」

芽衣は東都大どころか、国立大学になど行けそうにないと思った。

「教官と言っても、ただの助手ですよ」

「あら、黒澤さんのお兄様なら、そんなにお年じゃないんでしょう」

芽衣は段々と、言葉使いが堅いのに困りはじめた。しかし、いきなりのため口で相手の反感を買うことは、前回の失敗で一度懲りていた。

一緒について自分の教室やトイレ、食堂の場所などを案内してもらい、また、戻ってきた。本来なら、芽衣のレベルで転入など出来る高校ではないし、実際に転入試験を課されたら落ちることは間違いなかった。

帰り道、今までとは全く違う感覚を覚えていた。この学校の生徒自体が、今まで芽衣が付き合ってきた人種とまるで異なっていた。だれも、おしゃれなどしていないし、教室をのぞいたときには大部分が眼鏡を掛けていた。前の高校では入学前にみんなコンタクトになっていたのだ。芽衣は視力がいいので関係ないが、多分、家に帰って勉強するときに、いちいち、外さなくていいようにしているのだと思った。朝コンタクトレンズをすると、夜中の九時過ぎには目が痛くなるはずで、深夜まで勉強していればそんな面倒なことはしたくないはずであった。

デパートの制服売り場で、学校名を告げて採寸してもらった。

「お客さまのサイズでしたら、ブラウス、ベストとスカートはございます」

そう言われ、ブレザーと冬用スカート以外は持ち帰ることにした。明日からこれで通学するのだ。新しい制服を試着すると母親は少し満足げだった。今までの汚いジーンズより格段に可愛らしく見えるようだった。

家に帰って、コーヒーを飲んだ後で、母親と少しおこづかいの相談をした。進学校に変わって参考書が増えるだろうことと、遠くなるので交通費が必要になることだ。健一が中学から私立に通っていたので、母親も事情はよく知っていた。

芽衣は思っても見なかった高校に変わり、少し勉強しなければならないと、机に向かった。

夕方、健一にももらった携帯電話が鳴った。研究室からの電話だった。

「もしもし」

「俺だ、新しい高校はどうだ？」

兄貴なりに心配してくれたらしかったようで、芽衣は嬉しくなった。

「勝手は違うけどよさそう」

「そうか、では、仕事なんだが……」

「ちょっと、何よそれ」

「俺もお前のためにいろいろ動き回ったんだ。お前も動け」

「わかったわよ、何をすればいいの？」

「まず、ネットのニュースを見ろ、東山銀行の取引停止の分だ」

「うえ、本当だ載ってる。ここってつぶれるの？」

「大手都銀だから金融庁が助けるとは思うが、その背後関係が怪しい」

「経営難じゃないの？」

「簡単に言うな、銀行がそんなに簡単につぶれない。ここ数ヶ月の株式の変動もないし訳がわからない。ただの経営難なら問題ないが、あのライオンの関与を心配している」

「ライオンが、銀行のお金を引き出したとでも？」

「それがわからない、否定も肯定も出来ない。ハッキングして情報を掴んでくれ。また、一時間したら電話する」

せっかく勉強をしようと思っていたのに、健一から仕事を頼まれてしまった。それも、具体的なことはよく解らない情報だった。ファイルシェアを利用して内部情報を流出する方法もこれまで用いてきたが、いつまでも使える方法ではない。

新しく作ったパスワードクラッキングソフトでは、総当たり方式で強引にパスワードを抜いてしまう方式のものを作っていた。

これを試してみた。案の定、東山銀行の公式ホームページは閉鎖されていたが、内部だけのネットワークは稼働していた。芽衣はその中の一つの端末に潜り込んだ。

ここ一日で全預金量の二十五パーセントに当たる金額が引き出されていた。しかも、窓口閉鎖しなければ際限なく払い戻しの請求に応じていたのだ。

芽衣はこんな事態に陥った原因を探し始めた。大口の取引先が資金を引き揚げたのが発端になっていたが、その発端の原因だ。

意外なところで、ネットの掲示板に東山銀行が架空貸し付けで裏金を作っていると言う書き込みがあった。時間を遡っていると、一週間前からちょびちょびと書き込まれ、昨日からはほぼ荒らされている状況だった。

このことから芽衣は銀行自体をターゲットにした、サイバー攻撃ではないと結論づけた。

兄に電話して、芽衣の報告を上げておいた。

「おい、この報告だと、ネットの書き込み者が犯人と言うことになるが、不特定多数だぞ」「だから、彼らじゃなくて、掲示板の管理人だよ。彼の前後の行動を調べると、総務省の尻馬に乗って、ファイルシェアを無効化するファイルが無償交付すると息巻いていたんだよ。もし、ライオンの攻撃だとしたら、銀行を陽動作戦とした、ネットの管理人の逮捕を目的にする巧妙な作戦だね」

「どうしてそう思うんだ」

「だから、外から見たら銀行への攻撃？」

「そう、偽計業務妨害にあたる」

「でも、ライオンの目的はそっちじゃなくて、ファイルシェアに敵対的な管理人をはめるために、銀行の騒ぎで摘発させて無力化させてしまうことにあった」

「おい、ライオンは単なる人工知能だ。コンピュータの改竄はできても人間のコントロールは出来ないぞ。この管理人をどうやって動かすんだ」

「でもさ、探偵とか弁護士とか雇えないかな？」

「ふむ、彼らがメールと金の振り込みだけで動くのか、まあ、あり得ない話ではないか。お前もこの手ではめられたんじゃないか？」

「あ」

芽衣もそんな気がしてきた。もう少しで引きこもってしまうか、もし母親に学校に行くよう怒られたらそれこそ自殺していたかも知れないくらい悩んでいたのだ。ライオンの思うつぼだった。

「でも、この情報には裏付けもないし、何か使えるのかな？」

「それだけで十分だ。掲示板の方は閉鎖になるかも知れないが、銀行への攻撃でないなら問題はない。他にも、色々あるんだよ。ニュージーランドドルがわずかに下がったりとか.....」

「世界規模で暴れ出したわけ？」

「暴れてはいないさ、ひっそりと活動している。だが、大規模にライオン狩りをはじめたら噛みつかれるかも知れないぜ」

健一は自嘲気味にそう言って電話を切った。

芽衣はそれどころではなかった。明日から新しい生活が始まるのだ。前の高校については今日、教頭と母親が会って挨拶しただけだった。芽衣がいきなりいなくなって、そのままやめてしまう形になるが、もう、あの子達の前に出て挨拶する勇気もなかった。

朝、早めに起きてパジャマを脱いだ。

新しい半袖ブラウスに袖を通してスカートをはき、ベストを着た。リボンをつけて鏡をのぞくと飛行機のキャビン・アテンダントみたいで格好良かった。芽衣は鏡を見てにっこりし、挨拶の練習をした。少し悩んで、長い髪をヘアバンドで留めて後ろにまとめた。

——さて、何と言おうかな？

ぶつぶつ、言いながらカバンに新しい教科書を詰めてから、下に降りた。

「芽衣、本当に大丈夫なの？」

母親が心配そうに聞いた。

「大丈夫だよ、多分」

そう言って、トーストをほおぼり、コーヒーで流し込んだ。お弁当をトートバッグに入れて、七時十五分の電車に間に合うように家を出た。前に兄の大学の研究室に行ったときと同じルートだった。本郷女子学園は東都大に最も近いと言われる所以に、距離が近いこともあったのだ。

芽衣が駅から下りて高校に向かうと、正門の所で古川恵子が待っていてくれた。

「古川さん、お早うございます」

「おはようございます。でも、わたしたちだけの時は敬語なんて使わなくてもいいよ」

彼女がそう言ったので、芽衣も少し肩の力を抜いた。

「迷ったらいけないと思って、待ってたの」

「ありがとう、実は不安だったの」

芽衣がそう言うと彼女はにっこり笑った。

ほとんどの生徒は中等部から進学していて、慣れないと困るだろうからと彼女は言い訳した。

「本当言うと、転校生って今までいなかったの」

芽衣にとっては新鮮な驚きだった。高校での転校は滅多にないが、中学なら新学期ごとに誰かが出入りしていた。

玄関で上履きに履き替え、一年A組の教室に案内された。

「多分、担任の岩崎先生から指示があると思うけど、ここの席になると思うから」

そう言われ、芽衣は古川恵子の横の席に着いた。段々と不安になってきた。みんな芽衣より賢そうだし、何より日本有数の進学校だったので周りの人達に相手にされるか不安があった。

八時を過ぎた頃、彼女の周りに女の子がやって来た。彼女は生物部の仲間と紹介した。

「岩本さん、矢田さんと大西さん、A組の生物部の子」

「あ、黒澤芽衣です。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

彼女の説明では生物部と言っても本格的に研究しているわけではなく、金魚に餌をやるだけで後は、理科系科目の勉強会をしていると言った。先輩も一緒なので質問したり出来、色々便利だという。

岩本めぐみ、矢田美穂、大西麻衣たちは、古川恵子のことを、古川ちゃんと呼んでいた。クラス委員をしているだけに堅いイメージがあったのに、友達に対しては、意外とくだけたところもあるみたいだった。古川も、それぞれ、名字にちゃんをつけて呼んでいた。

しばらくして、先生が来て朝礼が始まった。四十才くらいの厳しそうな男性教師だ。

芽衣が一番最初に呼び出され、前に立った。

「今日から、このクラスの一員になった、黒澤芽衣さんです。前は都立高校にいたのかな。成績優秀で特別編入試験合格と聞いています。皆さん仲良くするように。じゃあ、挨拶してください」

「は、はい」

芽衣が教室を見渡すと、みんなの視線が一気に集まるのを感じ、ほっぺたが熱くなった。前の高校とは比べものにならないくらい、賢そうな顔が集まっていた。芽衣は真っ赤な顔をして一言だけ、よろしくお願いしますと、小さな声で挨拶した。

席に戻ると、どっと汗が出て来た。それをみて古川ちゃんが下敷きで扇いでくれた。

芽衣の緊張とは裏腹に、この高校での生活は快適だった。

授業のペースには付いていけなかったが、人間関係で悩むことがなかったのだ。最初、優等生なんて高慢ないけすかない連中と思っていたのが、みんな、親切で優しく、そして、休み時間に下らないうわさ話に盛り上がることもなく、妙なグループめいたものもなかった。クラス委員の古川ちゃんも優等生だから選ばれたのではなく、面倒見がいいからと言う理由だけのようで、他の女の子たちもフレンドリーだった。

芽衣も早速生物部に入れてもらい、古川ちゃんたちと親しくなった。

「ねえ、黒澤さん」

「あ、あたしも、ちゃんづけでいいよ」

「そう？ 黒澤ちゃん？」

前は芽衣ちゃんだったが、みんなと一緒になりたかった。

こうして生物部に入り、午後の勉強会に参加することになった。授業が理解出来なかった芽衣は皆の話に付いていけなかったが、わかったような顔で座っていた。それだけで楽しかった。もはや、過去の高校のことなど忘却の彼方に過ぎ去っていた。

帰り際、正門の所で芽衣の携帯電話がブルルと振動した。カバンから取りだすと、健一からの電話だった。

「ゴメン古川ちゃん。お兄ちゃんからだ」

「いいよ」

「もしもし」

健一は芽衣のことを心配して掛けてきたようで、一日楽しく過ごすことが出来たと言
うと、兄も嬉しそうだった。

——せっかくだから、晩飯を奢ってやる。東京駅八重洲口で待ち合わせよう。

——お友達を連れて行ってもいい？

芽衣は、古川を見たが、彼女は遠慮すると言った後、他の女の子の方をわざとわかる
ように見た。芽衣はその意図を察した。誘うなら、誰もいないときか、そうでなければ
他の子も一緒に誘うべきだという意味だった。気配りの出来る人はこういうところでも
気を配るものなのだ。芽衣に足りていないのはこういったことだと思った。

そんなわけで、一人だけで駅まで歩いていった。

以前は制服で町を歩くことが恥ずかしいこととっていたが、この制服が格好いいせ
いもあり、それよりさらに一流校の制服はいかなるブランドより価値があると思った。
堂々と兄貴と待ち合わせ、少し歩いて近くのステーキハウスに入った。

メニューを見ながら、健一は芽衣の制服姿を誉め、今日の具合を聞いた。

「緊張していったんだけど、ちょっと拍子抜けかな。優等生だから、もっと気位が高く、
側にも寄れないイメージがあったんだけど。実際は優しくて親切なの」

「理由を知っているか？」

「教えてくれたらうれしいな」

「自分の目標とそれを達成するための自信があるからだ。よく考えろ、あのクラスからほ
とんどが東都大または、医科大に進学する。争わなくてもどうせ、入った先でも友達な
んだ。だから争う必要がない。それに自信のある人ほど、他人に親切に出来るのだ」

「そうなの」

「芽衣だって、うちの研究室に来ればいい。少し頑張ればいいことだ。前の高校みたいに
化粧の濃さを競ったり、男の数を競ったり、誰かがグループを作って仲間外れにしたい
なんて、自分に自信のないやつすることだ」

「行けるのかな」

「かな、じゃなくて、それを明確な目標にするんだよ。今の学生でも間抜けな奴も一杯い
る。奴らより芽衣の方が数段上だ。自信を持って」

健一が言いたいのはそっちの方だったらしかった。

「ステーキとハンバーグ、どっちがいい？」

「ううん、ハンバーグがいいかな」

「よし、じゃあ、ステーキ二百五十グラムとハンバーグ。焼き方はウェルダンで。あと、
ワインをグラスで一つ」

そう言って注文した。

「話は変わるんだが、あのライオンの行く末だ。今は新しいOSを増やすことでファイル

シェアのユーザーを減らすことを想定している。問題はあの人工知能システムがどこまでそれに耐えられるかだ」

「要するに、最小限の設備を見積もったらいいのね」

「そう、現在、大学院の東海林昌夫を中心に作業をさせているが、少し生ぬるい」

兄貴は露骨に不満感を口にした。

「問題があるのかな？」

「この先の予測だ。アメリカ側の対応が進んで、今の利用者から三割減った場合とか、色々なケースで人工知能システム。つまりライオンの頭が生き残るかという実験をやらしたんだが、勝手に都合のいい条件をつけて楽観的結果を出している」

「それはお兄ちゃんの教育上の問題よ」

「馬鹿を言え、俺は飛び級が多かったから、同級生はまだ大学院だし、遅いのは学生だ。そんな連中に俺が教育は出来ない」

芽衣は少しは兄のために役に立ちたいと思った。

「あのさ、ライオンの本体が寄生しているのは、ほとんど、個人のパソコンだよね。だから、寄生しても元々性能のよくないCPUを利用せざるを得ない。だから、世界中のコンピュータに寄生しても、そんなに高性能にはならないと思うの。もちろん実際の被害は別よ。でもその被害にしたって、簡単に真意を見抜かれてるし、そんなに優秀な犯罪者ではないのかも」

「最低どのくらいのコンピュータで再現できる？」

「感覚的で申し訳ないけど、大学のスパコンの半分の能力があれば可能と思うよ。元の目標では中小企業でも導入する予定だったらしいから、その点は問題かも」

「ふん、スパコンを導入できるのは、大手電機メーカーでも御三家と言われる会社だけだ。普通は無理だ」

「でも、どうして難しいのよ、大量生産して安くとか？」

「まず本体がオーダーメイドの受注生産だ。それに常時稼働しているから専用の管理者がいる。そして、最大の問題はメンテナンスだ。機器のチェックも問題だが、専用ソフトを常に最新版にするのと、変にさわられて変化してないかのチェックもいる。一回に数千万円から一億円少し掛かる作業だ」

「じゃあ、小さい会社の売り上げより高いのね」

ステーキが来た。芽衣は久々のハンバーグで喜んだ。

「そのために当初は分散型システムにして、ネットを使う感覚で誰でも使えるようにプログラミングしたんだ。今となっては彼らの自己保存能力、これが最大の弊害になっている」

「ふうん、あふ、これ美味しい」

芽衣は話を聞きながらもぐもぐと食べた。

「おい、一応言うておுகが、フォークとナイフはちゃんと使えるようになっておけ。あそこの生徒は単なるお嬢様ではない、磨き上げられた人材だ。だから、基本的なマナーが出来ないと恥をかくぞ」

「どうしてそんなに詳しいのよ」

「何度も言っている。うちの大学にもその卒業生が多いのだ」

「はい。でも、どうしてあそこの学校だけあんなに違うのかな？」

「あそこが違うんじゃないくてよそが問題を抱えているんだ」

「問題？」

「公共マナーや躰と言う言葉を、教育現場で使うことがほとんど禁止されている。本来は知識と合わせて、道徳教育が車の両輪だったんだ。だが、戦後の教育改革でなくなってしまった。その結果、大学生になって手づかみでものを食べる奴までいる。俺は呆れてものが言えなかった」

「そうなんだ。道徳って何？」

「これから、あの学校で学ぶだろう。取り敢えずはお箸の持ち方と、フォークとナイフを使うことを覚えろ。段々となれるようにしていく」

「やっぱりお兄ちゃんの手下になるんだ？」

「今、大学院生で女子学生がいるが、頭はいいんだが、今いちだ。出来れば芽衣が来てくれれば有り難いと思っている」

「あたしなんかでいいの、そんなことしてくれるのお兄ちゃんだけだよ」

「そんな風に思わなくてもいい。本来不可能なところへのハッキングが出来る発想の奇抜さと、大使館に連れて行けるルックスがあるとこれからも大いに役に立つ」

誉められたのは、半分は外形のことだった。

しばらくは快適な高校生活が続いた。授業も放課後の勉強会のお陰で何とかついていているし、芽衣が優等生だと思われているらしく、ノートを持って質問に来る子までいた。芽衣は相手に考えさせるようにして質問をかわしていたが、それが結構自分の勉強にもなったのだ。それに何より、古川恵子をはじめ、クラスみんなが優しく親切なのが芽衣には有り難かった。

七月に入りすぐに期末試験があり、転校したばかりの芽衣には少し荷が重かった。

芽衣が古川を見ると、真剣な目で教科書を見て、右手の親指でシャープペンシルをぐるりと回した。何となくかっこよかった。試験問題は、芽衣が思っていたほど難しくはなかった、と言うより、事前の勉強会が完璧だったせいもあり、ほとんど解くことが出来た。最初の数学Ⅰを終えた後、芽衣は古川に聞いてみた。

「古川ちゃん、どうして問題が当たるの？」

「だって、授業の時に先生がここを出すと聞いたもの」

前の学校の時も、確かに先生はそう言っていたのを芽衣は覚えていた。でも誰も授業なんて聞いていなかったし、中間テストの事前に予想問題集を作っていた子もいたが、当たった試しがなかったのだ。芽衣は出来る人と出来ない人の差を感じた。

試験の最終日、最後の解答用紙を前に送ると、古川は芽衣を誘った。

「やっと終わった。芽衣ちゃん、今日、お茶しない？」

いつの間にか、黒澤ちゃんと呼ぶ人もいなくなり、芽衣ちゃんになっていた。長くて呼びにくいせいもあるが、こっちの方が語呂がよかった。芽衣は喫茶店にでも行くものと思って、いいよと返事した。

古川ちゃんが向かったのは生物部の部室になっている理科室だった。

「へえ」

芽衣が見ると、さっき買い出しに行ったらしくジュースやお菓子を広げていた。確かに、制服を着てハンバーガーショップでだべっているよりはるかに健全そうであった。話題はテストの話が主だったが、途中で夏休みの話になった。

「芽衣ちゃんはどうするの？」

「一応ここで勉強しようと思ってるけど、兄の仕事も手伝わないと行けないし」

「ああ、東都大の先生だったわね、そっちの方がよさそう」

「ね、黒澤さんて前は共学にいたんでしょ？」と、二年生の小林という女の子が尋ねた。

「はい、まあ」

芽衣は答えたくない質問であったので、小さな声になった。

「男の子と付き合ったりしてたの？」

優等生と思ってもやはり興味があるのは同じ様だった。

「あたしは、喋ったこともないです」

「あら、じゃあ、女子校と変わらないわね」

彼女はそう言ったが、芽衣はあまり詳しい説明をしなくなかった。前の学校も男の子に興味があるのは同じだったが、誰と誰が付き合っているとか、初体験の早さを競い合ったりここにいる人達には言えないようなレベルだった。その上、上級生の中から援助交際で補導された女の子まで出たのだ。芽衣としてはそんなところにいたとは、すくなくとも古川恵子には知られなくなかった。

適当にお菓子を食べて解散した後、芽衣は古川を誘った。

「ねね、参考書を買おうと思うんだけどどんなのがいいか教えてくれないかな」

「あら、ここの授業じゃ、物足りなかったの？」

「あ、いえ、そんなわけじゃ」

「芽衣ちゃん成績良さそうでもんね、テストはどうだった？」

「勉強会でやった分は解けたけど」

「全部？」

「うん」

「すごーい、普通は出来ないよ。やっぱり頭がいいんだ。そんな人に推薦は出来ないけど、わたしの使っている本なら紹介できるけど、いい？」

「もちろん！」

古川はちょっと歩くけど、と言って八重洲にある書店まで案内した。芽衣にしてみれば、中学に毛の生えたような内容の参考書しか持っていなかったのが今後のことが不安になって、こうして頼んだのだが、彼女の紹介してくれる参考書の内容はかなり高度だった。

「わたしの使っているのはこれとこれ、多分、芽衣ちゃんには物足りないと思うけど、そうになったら自分で探してね。わたしにも手が負えないから」

「そんなこと。でも、どうもありがとう」

芽衣は数学と英語の参考書を買った。他にも勉強しなければならないことはあるが、一番片付けたいことから先に手をつけようと思ったのだ。この学校の授業は早く、一学期の終わりにしてすでに一年生の半分近くが消化されていた。もっとも、授業を聞いていなかった芽衣にとってはどちらにしても一からたたき込まれる必要はあった。書店の

レジで袋に入れてもらって、古川をみると珍しくいたずら気にほほえんだ。

「もう買い物は終わりかな？」

「うん、ありがとう」

「あのさ、ちょっといいかな？」

「なあに」

芽衣と古川は書店から出て歩きながらしゃべった。古川は洋服を見たいので一緒についてきてと頼んできた。芽衣は不思議そうな顔でつきあった。

「制服以外の服ってね、あまり持ってないのよ。この学校の子ってあまりセンスがよくないから……」と、古川は言った。

「あはは、あたしもあんまりよくないけど」

「でも、共学にいたんでしょ」

「まあ」

二人は近くの洋品店に入った。ブティックと呼ばれるような店は二人とも避けた。

「わたし足が太いから、普段はパンツルックばかりなの」

「へえ」

芽衣は古川がそんな風に思っているとは意外な思いだった。完全無欠の女の子と思っていたからスタイルなどつまらないことで悩んでいたことが意外な発見だった。太いと言うほど太くはないが、芽衣が気づくくらいだから本人はもっと気にしていたのだろう。「意外とね、パンツの方がスタイルが目立つんだよ。逆にミニの方がわからなかったりするよ」と、芽衣は知ったかぶりの意見を述べた。

「そうなの？」

古川の目がいつもと違い、芽衣に頼るような視線を送った。

「これなんてどうかな」と、芽衣はミニスカートを手に取った。古川は自分の腰に当てて姿見をのぞいた。

「ちょっと、短かすぎないかな」

「そう、ちょうどいいと思うけど、嫌だったら、キュロットなんかはどう？」

「見せて」

長さは少し短い、ミニと違って、二股になっているからそんなに抵抗はない。

「でも、やっぱりスカートの方が体型が隠れると思う」

「やっぱりそう思う？」

古川も迷った末、最初に芽衣が勧めたミニスカートを選んだ。

ミニといっても膝丈とほとんど変わらないサイズなので、前の学校の女の子たちと比べるとミニとは呼べないかもしれないが、芽衣は彼女にアドバイスを求められてしまったことを素直に喜んでいて。

店を出て、ウィンドウショッピングしていると、通りの向こうから不審な女子高生が歩いてくるのが目に入った。理香だった。物欲しげにショーウィンドウをのぞいているその姿にかつて芽衣が感じていたオーラはみじんも残っていなかった。しかし、古川に彼女との関係を知られるわけには行かない。芽衣は目をそらしてしまった、が、向こうから気づいた。

「あら、芽衣じゃない。元気？」

「うん、おかげさまで」

「急に学校に来なくなるから心配したのよ」

——心配なんだったら電話の一本もかければよかったのに。

「かわいい制服ね、転校したんだ。どうして」

「本人の趣味で」と、しか言いようがなかった。

「どこの学校？」

「本郷女子学園なの」

「へえー、お嬢様進学校じゃない。どうやって潜り込んだの。やっぱり、友達をお金で雇う人は違うわねえ」

理香の目は嫉妬に燃えている様に見えた。芽衣は、何か反論したかったが、反抗することが恐ろしく思えて、彼女の前で泣きそうになりうつむいて必死に涙をこらえた。理香は右の手のひらで芽衣のほっぺたをぺちぺちとなでつけた。

「この方は新しいお友達なの、やっぱり本郷女子学園だと違うわね。いくらで雇ったのかしら？」

芽衣はうつむいたままとうとう泣き出した。まつげから大粒の涙がアスファルトの上にはぼたり、ぼたりと落ちた。夏の熱せられたアスファルトにその水分は吸収されてしまった。

「ちょっと、あなた、どなたか知らないけど、そういう言い方は失礼じゃありませんか」

古川恵子がかみついた。その凛々しさは理香の毒気にも負けていなかった。理香はその勢いにぶいとむこうを向いていってしまった。

「最低な人ね。芽衣ちゃんもあんな人のために傷つくことないわよ」

古川はしゃがんで泣いている芽衣の肩を抱き、背中をさすってくれた。

芽衣は自分のしたことで責められるのは覚悟していたが、古川の目の前でかつての友人に過去をばらされることをおそれていた。

「あの人、前から知ってるの？」

「うん、同じ中学だったの」と、少しだけ嘘をついた。

「そうなんだ、気分直しにアイスクリームでも食べに行こ」

古川は芽衣を慰めてくれた。近くのアイスクリーム店に入り、抹茶アイスを二つ注文して芽衣のいる席に持ってきてくれた。

「ありがとう」

「いいのよ、早く食べないと溶けちゃうよ。それに、あんな人のこと忘れちゃいなさい」

「うん」

古川恵子は芽衣に優しく接してくれ、おかげで芽衣は少し立ち直れそうに思えた。彼女とは駅で別れて芽衣は自宅に戻った。

次の日は、古川が少し芽衣に優しくなった。何となく芽衣の境遇を察していたみたいだった。優しくしてくれるのはうれしかったが、同情されるのは嫌だった。この日、芽衣が家に帰ると母親の機嫌がよかった。

「お母さん、ただいま」

「おや、お帰り、テストの成績がすごくよかったらしいね、こんばんはすき焼きにしてあげる」と、上機嫌だった。

「どうして知ってるのよ」

「あの学校の方針よ。保護者の知る権利を優先しているそうよ。生徒の都合もあるので悪い生徒は、両方そろったときに教えるらしいわ。芽衣、理科でトップ、後の教科も十番以内だって、やはりお母さんの子供だけのことはあるわ」

そう言って芽衣をほめたが、母も父も大学など出ていない。芽衣もそんなに成績がよかったとは、本当なら古川のおかげだし、誰かの出席番号と間違えているんじゃないかとすら思った。

「もう」

「それから健一から電話があったよ。教室に来てほしいんだって。あんたも東都大受けるかい？」

「冗談ポイね。来てほしいってこれから？」

「四時に偉い人が来るからそれまででいいそうよ」

偉い人とは誰だろうと思ったが、今のところ兄貴に逆らう材料はなかった。逆らうどころか、転校させてもらったことに感謝さえしている。むしろ何か役に立つことで恩返しをしようと思っていた。

芽衣は、制服を脱いでハンガーに掛け、以前買ってもらった紺のスーツに着替えた。

バッグの中に携帯電話や、CD・ROMを放り込み、颯爽と駅まで歩いて今日の朝通った道をもう一度歩いた。

理学部の建物は前と変わらないが、計算機物理学教室の大部屋は少し配置が換わっていた。ライオン対策のために大幅にこれに掛ける戦力を重点的に配置しているようだった。

兄は自分の研究室にいた。

「お兄ちゃん、来たよ」

「おお、すまないな、それから、高校生活にはついて行っているか？」

「うん、お兄ちゃんの根回しのおかげでいい人がついてくれるし、授業にもついて行っているし、クラスみんなもいい人ばかりで楽しいわ。お兄ちゃんには本当に感謝しているの」

「まあ、そういいことだけじゃないさ。じゃあ行くぞ」

「うん」

健一は自分のノートパソコンと資料を持って教授のところへ移動した。すでに、三人先客が来た。健一が芽衣に紹介した。

「アメリカ海軍のマッケイ大佐、大学院の早川理恵だ。こちらは、わたしの個人的スタッフの黒澤芽衣です」

山本教授が口を開いた。

「今回、マッケイさんに、ご同席いただいたのは、経産省から警告のあった企業に被害が出てしまったこともあります。それに、マイケルソフトでのOS改良にも妨害工作がなされました。今後も、被害が広がることは容易に予想できるが、我々は常に先手、先手を打っていかなければなりません」

早川がうなずいた。マッケイ氏は渋い顔で座っていた。芽衣はマッケイ氏に会ったら、友人買収のことを問い詰める気でいたが、皆の前では言えなかった。

「教授、よろしいですか」とマッケイ氏は自分の用件から先に話し始めた。

「はい」

「こちらの情報では、まず、マイケルソフトから例のOSの暗号通信機能を持たせるモジュールを発注していたインドのイー・アイ・カンパニーという会社が経営破綻しました。投資家が、当社が架空会社だという風評被害により資金を引き揚げてしまったため、技術者の給料が支払えなくなっています」

「助けられないんですか？」

「こちらの息のかかった会社から資金を出して助けるのは一番簡単な方法ですが、じきにばれるでしょうし、新OSの開発に政府が関わっていたと知られると、このソフトの利用者は減るでしょう。次に、合衆国内でも同じく下請けのアイダホ・ポテト・インダストリーのソフト部門が経営破綻に追い込まれ、現在、業務は停止です。さらに、日本でも、同様の事態が起こっています。この我々への妨害にライオンはハッキングなどのデジタルな手法は用いずに、ある人物を代理人に立てて動いています」

「代理人ですか？ 誰です」教授が初耳だという顔で聞いた。

「今のところ、東アジアで一人、合衆国で一人、ドイツで一人、フランスで一人が確認されていますが、全貌はつかんでいません」

「攻撃されたと言うことは、こちらの計画をすでに察知されたと言うことですか？」

「わかりません、元々、ファイルシェアは、前期モデルであるウィンズドウX用のプログラムでした。今年販売されたファンタを、ライオンが敵対視している可能性があります。このような攻撃は以前からあったのですが、サイバーなもので、人間が関わったのは今回が初めてです」

「日本での活動はどうなっているんです」芽衣はきつい言い方で聞いた。

「エージェントA、この男はアントニオ・レオナルド・コヤナギと言う、日系二世のイタリア人と称して東アジア各地で暗躍しています。見た目は東洋系で少し彫りの深い顔立ちです。彼の姿を日本で捕捉したのが十日前で、彼の動きを監視していました。それで少女とラブホテルに入り出てきたところを拘束しようとしたのですが。味方捜査員がへまをして、少女に大声を上げられ失敗しました。少女には口止め料として金を渡しています」

マッケイ氏はその男と少女がホテルから出るところの写真をテーブルの上に置いた。日本人か外国人かわからない男が若い女と写っていた。

芽衣はそれを見て不審な顔をした。理香と似ていた。

「あの、この女性はあたしの知り合いに似ているのですが、本当にそんなことしたんですか？」

「実際に見たわけではありません。ラブホテルを捜索して、DNAデータを採取するために使用済みコンドームと彼らの体毛や体液を回収したのです。これがあったと言うことは男女の関係にあったと結論づけるのに否定する材料はありません」

「それで、どうして彼女をマークしたんですか」

「別に彼女をマークしていたわけではありません。コヤナギなる男性を尾行していたのです。コヤナギを拘束しようとしたとき、彼女が大声を上げたので、作戦を中止して、こ

ちらの捜査員を引き上げさせました」

「じゃあ、コヤナギには逃げられたのですか？」

「はい、ですが、彼も用はすんだみたいで、この後国外に抜け出したようです。このときまで、その少女を単なる行きずりの関係と思っていたのですが、違いました」

「彼女が何をしたんですか？」芽衣は、いくらかつての友人とはいえ、少し心配になったのだ。

「そのときは、警察がこないうちに彼女を逃がしたのですが、彼女はコヤナギからCDでのラブレターを受け取っていました。音楽と風景写真というただのCDですが、中にはローカルネット上のパソコンの中身を筒抜けにするウイルスが仕込まれていました。どうもコヤナギは最初から西浜貿易部長の娘と知って関係を結んだようです。これはこちらのサイバーテロ対策部隊がつきとめました。これは芽衣さんとそっくりのやり方ですな」

西浜貿易部長の娘ということはやはり、理香だった。

「嫌な言い方をしないでください。西浜貿易を守る手だては？」

「残念ながら、すでに被害を受けた後なんです。韓国と中国から輸入されるウィンドウ用チップを日本のパソコンメーカーに売っているんですが、チップの発注を故意にキャンセルし必要な部品が納期通りに入らなくなり、現在はパソコンメーカー側から取引停止を受けています。担当責任者の渡辺部長が責任をとり解雇処分を受けました」

「どうして、そんなに厳しいんですか？」

「客であるパソコンメーカーは、ウィンドウ・ファンタに対応した、大容量メモリ搭載機を秋モデルとして生産中でした。その矢先にアジアからのメモリチップが止まってしまったのです。取引停止は当面の処理で、西浜貿易に対して損害賠償請求があると思われます。彼らにとってもドル箱商品なのだから当然です」

芽衣は信じられなかった。理香が男と寝て父親を首にするようなことをするとは思えなかった。それに、今日会った態度からも考えられなかった。

「うそです」

「残念ながら本当です」

「でも、どうして理香が選ばれたんですか？」

「コヤナギの手口です。ターゲットの女性に近づき、言い寄って男女の関係になる。そして必要な情報を得たり、あるいは流したりと言った活動をしています」

「理香はそんな女性じゃありません」

「残念ですが、現在までにコヤナギに言い寄られた女性で拒否した人はいません。マインドコントロールを掛けているのかと思うくらいです。それに彼女たちも自分たちが利用されたとは、おそらく気づいていないでしょう。この女性もたぶん、不景気で失業くらいに思っているかもしれません」

「じゃあ、どうしてマッケイさんは彼をスカウトしないんです？」芽衣は嫌みを言った。

「確かに情報屋としては優秀ですが、信念がなく誰の仕事でも受けるので基本的に信用できません。ライオンも最後は彼を消す可能性が懸念されます」

「わかりました。それで肝心のウィンドウの改良の件です」

山本教授が話を元に戻した。

「そんな訳で、マイケルソフトの新OSの開発に支障を来しています。ライオンがそれを仕組んでいることも明らかなのですが、ついては、こちらの研究室で暗号化と高速転送モジュールを作ってもらいたいのです」

「あたし、勉強もあるし、OSの専門家でもないしでお役には立てないと思います」

芽衣が嫌そうな返事をしたので、健一が口をはさんだ。

「マッケイさん、メインのプログラムはこちらの大学院の東海林昌夫、サブで早川理恵がプログラミングを担当します。それで、外部からのチェックに黒澤芽衣を担当させます。ソースコードのチェックとハッカーとしての観点からのチェックを行います」

「それで、大丈夫ですか？」

マッケイ氏が念を押した。

「責任もって引き受けます」

教授が言い切った。

「今回、黒澤芽衣さんの役割は、ライオンのターゲットになりにくいことを生かして、このプロジェクトを効果的に進めることにあります。一点気をつけてもらいたいのは、西浜貿易を解雇された渡辺の娘と、友人のようですが、しばらく接触しないしてほしいのです。たぶん罠を張っているはずですよ」

マッケイ氏は神妙にそう言った。

話し合いは、これで打ち切り、健一は早川理恵と東海林のために自分の部屋に端末を移して作業スペースを確保した。この作業の間に芽衣はここから抜け出し、マッケイとの時間を待った。

芽衣は以前の、理香に対し薬物でマインドコントロールを掛けると言う話に引っかかっていた。マッケイがトイレに立つのについて行って、かみついた。

「あの、マッケイさん。前にあたしの友人に薬物でマインドコントロールを掛けるという話がありましたよね」

「オー、あれですか。あれはあなたが動いてくれないので、ジョークを言ったまでです。マインドコントロールなど禁止されているのですよ。本気にはしないで下さい」

「それとは別に、十万円であたしの友達になるよう雇われたと言っています。マッケイさんの陰謀じゃないんですか」

「こちらではそんなことはしていません。コヤナギを捕まえ損なったときに、その口止めに渡されたのかもしれませんが、そんな金額を渡してはいないはずですよ。もしかしたらコヤナギからいくらか受け取っているのかもしれませんが」

「そんなの、まるで売春じゃないですか」芽衣は食ってかかった。

「はっきり言うとその通りです。ですが、やましいことがあるから、甘えの利くあなたに押しつけた。そう解釈してもいいかもしれません」

「待ってください。じゃあ、彼女はあたしを嫌っていたのでなく、好意を抱いていたとでも言うんですか？」

「好意は嫉妬を生み、ときとして敵対行動に移ります」

「わかりました。元同級生として一度会いに行きます。誤解を解いておきたいので」

「今はやめてください。彼女はマークされています」

芽衣がさらにかみつこうとするのを、大学院生の早川理恵が呼び止めた。

「黒澤さん、プログラミング環境なんだけど、これでいいかチェックしてくれるかな」

「はい、すぐ行きます」

作業室になった助手研究室に入り芽衣が作業にかかるのを確かめるように、ジョン・マッケイは姿を消した。いつまでもこのことだけに構ってられるほど、のんびりした職業ではない様だった。

すでに、プログラムの原案はできていた。元々、東海林昌夫が開発したファイルシェアの機能を、新しいウィンドウに合わせてはめ込むだけだった。原案はこれで進めることにした。

「じゃあ、早川さん、お願いしますね」

芽衣は理香が気になったので、早々と片付けて引き上げた。兄が様子を見に来たときにはすでに、電車に乗った後だった。

6. 逡巡

6. 逡巡

この後、電車から降り、家に帰る前に、近所であるので理香の家を偵察に行った。電柱の陰から渡辺家を見ると、マッケイの情報が本当であったようで、雨戸が閉まってひっそりとしていた。これを見て芽衣は一家心中でもするのではないかと心配になった。前に会ったときには優しいお父さんだったが、会社に損害を与えて解雇されたのだから普通ではいられないという気がした。

芽衣がそろっと進むと、玄関から少し離れた場所にワゴン車がとまっているのに気がついた。千葉ナンバーでひらがな記号が「わ」になっていたのも、レンタカーらしかった。運転席には芽衣の知らない男の人がいた。呆然とたっていると理香の母親が段ボール箱を持って出てきた。見ると、車の中にはもういくつも箱が積み込まれていた。彼女と目があって芽衣はお辞儀した。

「あら、芽衣ちゃん。久しぶりね」

本当に懐かしそうな笑顔を見せた。

芽衣は少し、ほっとして挨拶した。彼女は理香を呼びに家の中に入った。しばらくして、理香が母親に背中を押されるように出てきた。すこしやつれたような感じがした。

「やあ」

と、芽衣は声を掛けた。

「何かご用かしら？」

不機嫌な顔でいらんだ。

「別に、用事ってほどじゃないんだけど……あの、何してるの？」

「あんたには関係ないでしょ」

「中学からのつきあいじゃない、このままお別れなんて嫌だからさ」

芽衣がそう言うと、理香は少し思い詰めた表情になった。五分ほど沈黙の時間が続いた後、理香は、ここでは話にくいからと芽衣の手を引いて五十メートル先にある公園に行った。公園と言ってもブランコと砂場しかない子供向けのものだ。こんな時間だと子供がいないのでしゃべるには都合がよかった。

理香はブランコに座り、芽衣にも座りなさいよと勧めた。芽衣はおそろおそろブランコに腰掛けた。

「それで話して何よ、あたし忙しいんだから」

「ごめん、少し様子がおかしかったから、心配したの」

「それだけ？」

「うん、まあ」

「だったら帰るね、じゃあ」

「ばいばい……」

芽衣は簡単なことすら聞き出せなかった自分にいらだちを覚えた。こんな具合ならコヤナギ氏の方が優秀だったろう。

「ねえ、本当にあたしたち最後なの？」

芽衣が呼びかけると、理香は立ち止まった。

「理香とは中学の頃から仲良しだったのに、このまま絶交なんてあたしには耐えられない」

そう言うと理香が振り向いた。

「そうね、中学以来のつきあいだったわね。良くも悪しくも」

理香は再び公園に戻り、ブランコの囲いに腰を下ろした。

「あのさ、玄関前にレンタカーのワゴンが止まってるんだけど、あれ何なの」

「ただの自動車よ、見たことないの？」

「とぼけないで、人が真剣に心配しているのに！」

理香はしばらく芽衣の目を凝視して、それから少し話した。

「お父さんがね、先週、会社に損害を与えて解雇されたの。不景気のせいだと言っているわ。懲戒解雇だから退職金もないし、会社から損害賠償で訴えられると予告が入ったの。それで、先週、お母さんとも協議して、離婚してお母さんとあたしの分だけでも確保することにしたの。あの荷物はそれよ」

「じゃあ、どこかに行っちゃうの」

「お母さんの実家、ああ、それから、あたしも渡辺から結城に姓が変わったから」

理香は両親離婚の事実を淡々と述べた。損害賠償請求が起こされて認められれば父親名義の家や貯金などすべてを差し押さえられてしまう。それで、理香と母を守るために離婚という手段を選んだに違いなかった。理香の話だと父親には会社と争う意志はなく、出来る限りの支払いに応じる気であるという。責任感の強い人だったからそういう選択しかなかったかも知れない。

「実家ってどこなの？」

「一応秘密にしておくことにしたんだけど、千葉県習志野市よ」

「学校は？」

「あたしだけ行けるわけないじゃん、落ち着いたら働きながらでも夜間高校を探すわ」

「そう」

芽衣としては、これ以上掛ける言葉が見つからなかった。ふと、理香の右手薬指にリングが入っているのに気づいた。男の陰を感じた。

「あのさ、……そのリングきれいだね」

「何よ、唐突に、前からしているわよ」

「彼氏にもらったの？」

「関係ないでしょ、まあ、そうだけど」

「優しい人なの？」

「まあ、ね」

「どんな人か見てみたいな」

芽衣がそこまで言ったとき、理香の態度が急変した。

「駄目！」

「ど、どうしたのよ」

芽衣はブランコからずり落ちそうになった。理香も少し取り乱していた。

「あ、あんたは、いつもいつも、人の大事なものを奪おうとするんだからっ」

急に怒り出して、芽衣には何のことを言われているのかさっぱりわからなかった。理香はしばらく興奮して、昔のこと……. 中学時代のことを挙げて芽衣を責めたが、しばらくして言いたいことは言い終わったようで少し落ち着いた。

芽衣は理香の肩を抱いて、優しくあやした。

「順を追って言ってよ。あたしの至らないことは改めるし、悪かったことは全部謝るし」

「ごめん、悪いのはあたしなの。最初ね一緒にクラスになったとき、かわいい女の子と友達になったって喜んでたのよ、……」

理香の説明だと、中学三年生のクラス替えの後、同じクラスになり目立つ存在であった芽衣と友達になったことがうれしかったという。しかし、家に遊びに来るようになると、母親が、何かにつけ芽衣ちゃん、芽衣ちゃんと、自分の娘のようにかわいがり、最初の嫉妬を覚えた。色んな習い事や塾に通っている理香より、何にもしていない芽衣の方が成績がよいこともことあるごとに指摘され不満に思っていた。

体型のこともコンプレックスだった。少し太めであることを気にしており、細身で小さい芽衣のことをずっとうらやましく思っていた。三学期のバレンタインデーの時に好きな男子にチョコレートを渡そうと準備していたが、当の本人に、「これ、黒澤に渡してくれないか」と、ラブレターを預かってしまった。細くて小さな子がタイプらしかった。これも芽衣は知らなかったが、その手紙は破って捨てたと言った。このとき、芽衣がいなくなればいいとさえ思ったと言った。

「そんなこと、理香、スポーツも出来るしピアノも弾けるし才能があるじゃない」

「馬鹿ね、あの程度のこと、誰でも出来るよ。あんただって三ヶ月も練習したらあれくらい弾けるよ。要するにあんたに対抗できる要素が何にもないと思知らされたの。それからは、あんたの妹でいいかなって思った」

「その割に仲間はずれにしてくれたじゃない」

「つきあってた彼がね、好みのタイプは、小柄で細身で色白でって、聞けば聞くほど芽衣に取られてしまいそうな気がしたの。あのときはあんたが学校に来られなくなって自殺したらいいと思ってた。狂っているかも知れないけど、本当にごめんね」

「いいよ、もう。あたし、別にぶっ殺されても差し支えない子だから」

「そんな風に言わないで、きれいで頭がよくてスタイルもいいし、完全無欠だと思ったの。あたしから離れて山中さんとつきあってから、少しおもしろくなかったのと、今日も謝ろうとして行ったんだけど、すごく素敵な女の子と友達になっているのをみてまた嫉妬しちゃった」

「だから、もう、いいよ。でも嫉妬で狂ったら駄目だよ。彼氏とはうまくいっているの」

「優しくて、何でも相談に乗ってくれる人。四月からずっと会ってくれてたんだけど、二週間ほどシンガポールに仕事で出張するそうなの。だから、今は少し寂しいかな」

「そうなの、うまくいけばいいね」

芽衣は、彼がすでにいなくなったことを彼女に告げることは出来なかった。

「ありがとう。また落ち着いたら、手紙は書かないけど電話くらいはするね」

「うん」

また、二人で家の方に戻ると、母親がワゴン車の後ろで待っていた。

「芽衣ちゃん、家の都合で引っ越すんだけど、理香とは仲良くしてやってね、お願い」

「はい、任せてください」

芽衣はにっこりと最高の笑顔で答えた、が、心の中では涙がとまらない別れだった。理香が母親と一緒に後部席にのり、スライドドアを閉めるとエンジンが掛かり、ワゴン車はエンジン音を立てて発進した。ドライバーの男性は、母親が親しそうにしていたことから、兄弟のような感じがした。

もう日が暮れ始めた中、芽衣は呆然と車が去った後も道路に立ちすくんでいた。これから、理香がどういう生活を送るのか、それより先に、アントニオ・コヤナギがいなくなった現実はどう対処するのだろうかと不安がよぎった。やはり、先に情報を知らせておいてあげた方がよかったに違いない。でも、今のタイミングでそんなことを言ったら本当に、芽衣が殺されそうな気がした。

芽衣がとぼとぼと歩き、少し遅めに七時頃、家に帰ると、本当にすき焼きで祝ってくれた。母が知らせたのか、たまたまなのか、わからなかったが父も帰っていた。

芽衣としては、生物部の勉強会と、古川に勉強を教えてもらっていたおかげでかろうじてテストの回答欄をうめることができたに過ぎない。

健一の帰りは、これまでよくあったことだが、日付が変わっても帰ってこなかった。その間、芽衣は遠慮なくお肉を食べた。

「でも、芽衣がこんなに成績がいいとは思わなかったな」と父親が言った。

「そうそう、お母さんに似てこうなったのよね」

確か健一の時も夫婦でこんなことを言っていた。

「芽衣はどう、新しい高校生活？」

「うん、いい人ばかりで生活も楽しいし、制服もかっこいいし、授業が早いのは少し閉口ものだけど。だけど、前の高校の人たちと道で出会うとちょっと困っちゃうかな」

「そんなこと気にすることはない。今のおまえが本当のおまえだ」

「ありがとう」

芽衣は涙が出そうになるのを、玉子と野菜と肉をくしゃくしゃとかき混ぜ、一緒に飲み込んだ。

「ごちそうさま、後はお兄ちゃんに置いておいてあげてね。あたしは勉強があるから」

これまでの態度からすると、信じられないという感じて顔を見合わせた。

次の日、終業式まで自由登校だが、生物部は毎日勉強会をしている。芽衣もそれに入っていた。芽衣のテストの成績がトップクラスだったということはすでに噂が広まっていた。

他の優秀な生徒たちからも羨望のまなざしで見られた。古川ちゃんにまで、「天は二物を与えずと言うけど、例外もあるのね。芽衣ちゃんはかわいいし、優しいし、頭もいい

んですもの」と言われてしまった。

——いや、皆さんは大きな誤解をしています。

とは、もはや言えない状況だった。

ここで、どちらかというと教える側になり、勉強会に参加し、帰ってから嘘を教えないか、参考書で確認するというパターンが身につくにつつあった。

忙しい勉強会の後、兄貴の研究室に行き、早川理恵と東海林昌夫の組んだOSモジュールのチェックを行った。早川の作ったモジュール（プログラムの部品）は兄がいまいちだと評していたとおり、普通のプログラムであり、コアなユーザーには用途を見抜かれるおそれがあった。

芽衣は仕様を少し変更し、この暗号モジュールの、暗号化ビット数を落として通信速度を上げるとともに、マイケルソフト内のサーバーでの検索をしやすくし、さらに、ダウンロード速度に制限など設けず、人気のあるファイルほど早くダウンロードされる仕組みにした。

そして、この機能の扱いだか、ウィンズドウ・ファンタの基本命令としておいたのではいかにも怪しげだし、ライオンより以前に著作権法違反で訴えられるおそれがあった。アメリカ国務省と国防総省、そして映画業界団体で裏協議が行われて大きな訴訟にはならない予定だったが、事情を知らない人にはやはり不自然だった。

そう言う理由で、芽衣は健一に相談し、最後は教授の判断でこれをOSの基本命令ではなく、バグ（欠陥）として正式発表はしない方針をとった。

三日後、教授からの完成の連絡で、マッケイ氏はそのソースコードの入ったCDを受け取りに来た。

芽衣の案については、たぶんその方がいいでしょうと同意した。

「これは、直接、ロスのマイケルソフトに持ち帰ります」

マッケイ氏がソースコードを持ち帰ってからの動きは早かった。芽衣がまた、古川と八重洲口の書店で雑誌の立ち読みをしているとき、芽衣は専門であるウィンズドウ関係の書籍を読んでいたが、未確定記事として、七月末にウィンズドウ・ファンタ・サービスパック・ベータ版モデルがリリースされるという衝撃的な話が載っていた。しかも、このサービスパックで今までウィンズドウ・ファンタを持っていなかった人も機能制約があるものの、ダウンロードすることができると書いていた。そして、ウィンズドウ・ファンタの新しいバグのことは、アングラ雑誌や、掲示板を通して噂が広がっていた。こういったユーザーはこんな噂で動くので、ファイルシェアのコアなユーザーをファンタに変更されるに十分なインパクトをもっていた。

これを読んでいると、古川恵子が興味深気に芽衣の横に来た。

「芽衣ちゃんて、パソコンのこと好きだねえ。わたしはブログで使ってるだけだけど」

「少し興味深い事件が載ってるの。ウィンズドウ・ファンタが実質無償で手に入るん

だって」

「へえ、あれ高いんでしょ、わたしも古い、X版を使ってるもの」

これから、掲示板やバグ情報で、ファイル共有システムが宣伝されることになって
いた。

「恵子ちゃんも、使ってみたら、高機能で便利だよ」

古川恵子とますます仲良しになり、最近では古川ちゃんから、恵子ちゃんに呼び方が
変わっていた。芽衣だけの特権だった。

七月二十一日、終業式があり、校長先生の訓辞があり、休み中くれぐれも間違いのな
いようにという挨拶で、一学期が終わった。芽衣は成績表をもらうとき、少し恥ずかし
かった。先生が大きさほめ、みんな、黒澤君を見習いなさいと大きな声で言ったのだ。
もし、前の高校だったら、その日からみんなから無視されていたに違いない。芽衣が中
身を見るとほとんど、九か十であった。本当にいいのかなと未だに悩んでいる。もっと、
勉強して実力でこの成績が取ればもう少し落ち着いていられるのかもしれない。

この後の生物部の勉強会で、こういわれた。

「黒澤さんて、成績もいいし、かわいいし、でも、そう言うのを鼻に掛けないでさごく謙
虚なところがすき」

そんな風に言われた。これも誤解がたくさん入っている。

彼女の指導員役だった、恵子も少し大きな顔をしつつある。

芽衣はほっぺを真っ赤に染めながら、この勉強会に参加した。ときどき、わからない
ことは恵子に聞いている。

勉強会が終わった後、恵子と帰る用意をした。

「芽衣ちゃん、結構高そうな携帯電話を持っているのね」

「ああ、これ？」

芽衣は、いっぱい機能のついた機種を出した。

「へえ、デジタルテレビ、FM放送、決済機能、オーディオ、ビデオ機能、これ、高いん
じゃないの？」

「お兄ちゃんから借りてるんだ。今、研究室の仕事手伝ってるから、連絡用に三月まで
使っていて」

「へえ、東都大の先生の手伝いか、優秀な人は違うわ」

「いやあ、手伝いと言っても慣れるために出来ることをさせてもらっているというか」

「あ、やっぱり東都大に行くんだ」

「そんなことないかも知れない」

「もう、わたしも芽衣ちゃんが行くなら行こうかなと思ってたの。うちは姉が医科大に
入っちゃったから、わたしのノルマはないのよね」

古川恵子の両親は、大学病院の医師であり、姉妹のうちどちらかが医科大に進むこと
を余儀なくされていたが、姉がこの三月、合格して通っていた。

「医科大って結構厳しいんでしょ？」

「姉を見ていると、朝早くから夜遅くまで勉強しているみたい。研修医になると何週間も

帰ってこないみたいよ」

「じゃあ、脱出成功というわけね」

「うまいこと言うね」

古川はもともと、中高一貫教育の本郷学園に都立高校から転入生が来るといので、その対応のためにつきっきりだったが、ようやく、芽衣のペースも優等生としてスタートを切ったので、任務はもういいと先生から言われていたが、彼女自身芽衣が好きであり個人的につきあっていた。

だから、こうして生物部の勉強会が終わった後も、おしゃべりしたり一緒に帰ったりしている。

7. 野生のライオン

7. 野生のライオン

夏休みに入って十日ほどたった頃、芽衣はまた健一に呼び出された。

いつもの格好で研究室に行くと、元の雰囲気に戻っていたが、早坂理恵と東海林昌夫がけんかしていた。

助手研究室をのぞくと健一は、目の下にクマができていた。

「芽衣に少し頼みがある」

「いいよ、あたしで役に立つなら、ヌードでも何でも」

「馬鹿、ウィンドウ・ファンタ・サービスパック・ベータ版モデルが出回っているのは知っているな」

「うん、ほとんど無償でしょ、OSとして使う人にも朗報よ」

「その好評に合わせてかなりの数量がダウンロードされてインストールされた。これは、マイクロソフト側で確認済みだ。今のところ、ファイルシェアユーザーのうち九十パーセントがこちらに乗り換えた計算だ。大事なおいては別だが、普通は古いソフトには誰も見向きもしない」

「だったら、万々歳じゃない。どうして目の下にクマができてるの」

健一は背伸びをして酸素の補充をし、定規で肩をたたいた。

「実はあのライオンの攻撃が収まっていない。無差別攻撃でないのが救いだが、経産省のリストなどもう食い荒らされている」

「それどういう意味？ ファイルシェア・ユーザーがいなくなったらライオンの居場所がなくなって、消えてしまう、はずじゃなかったの」

芽衣は、色んな事情を抱えていて不満を一気にぶちまけた気分だった。

「まて、前にこのシステムがどのくらいの容量まで生き残れるのか、試算したことがあったらどう」

「スパコンの半分でしょ」

「そう、そのくらいの能力はないと今回の謀略は実行できない。もっとも、雇った、エージェントが有能な場合もありえる。ああそうだ、あのコヤナギは、イギリス当局にシンガポールで拘束されたそうだ」

芽衣は彼の名前を聞いてどきっとした。理香がいまどうしているだろうと思ったのだ。

「あのさ、お兄ちゃん。あんな情報屋さんて捕まったらどうなるの？」

「捕まった相手によるが、ジュネーブ条約は適用されないのが普通と聞いている」

「殺されるの？」

「殺しはしないと思うが、拷問はあるだろうな、べらべらしゃべるなら話は別だが。拷問に興味があるのか？」

「ないわよ、……理香のことが気にかかって」

「おいおい、おまえを追い詰めたやつだろう。傷ついたってかまわんじゃないか。男に逃げられるくらい、いい薬だ」

「もう」

確かに、被害としては最小限のような気がした。

「それで、もし、ライオンがどこかに潜んでいるなら、それを突き止めたい。スパコン半分を占領して、感づかれないのも不自然なんだ」

「ねえ、元のシステムってどんなの？ 支援システムとか言うの」

「ああ、まだ見てなかったな、大部屋にある、来い」

健一に連れられて芽衣は、計算機物理学教室と看板の出ている大きな部屋に入った。以前忍び込んだことのある部屋だった。あのときは不気味な感じがしたが、今回は普通に感じた。

「この端末から使えるようになってる。一応極秘の研究だと言うことだけ伝えておく。ここで見たり聞いたりしたことはよそで喋らないように」

「誰が喋るのよ」

「まあいい、……おい、東海林くん」

健一は東海林昌夫を呼んだ。彼がこのプログラムの管理責任者になっていた。

「支援システムは、普通の人間の対応をシミュレートできます。たとえば、相手をOA機器販売店として、コピー機の故障を想定し、何か文句を言ってみてください。電話を掛けているものとして、このマイクで喋ってください」

東海林はそう言って、端末を操作した後、芽衣にマイクを渡した。いきなりのことで芽衣もとまどってしまった。

「……あの、もしもし」

「はい、毎度ありがとうございます。アルファ事務機株式会社でございます」と言う自然な女性の声で応答してきた。

「え、と、こ、こ、コピー機が故障したんです」芽衣はどもりながらコンピュータに返事した。

「コピー機の故障ですね。ただいま担当部署のものと代わりますので、少々お待ち下さいませ」

そして、三秒後、男性の声に代わった。

「お待たせしました。営業担当の田中でございます。コピー機の故障と承りましたが、どのような具合でしょうか？」

スムーズな受け答えだった。芽衣は適当に故障を想像した。

「紙が汚れるんです」

「左様でございますか、申し訳ありません。ドラムの汚れかと思えますので、交換用のドラムと、そしてトナーも一緒になっておりますので、こちらからお送りしてよろしゅうございますか？」

「はい」

健一がここでプログラムを止めた。

「こんな感じだ。自然な受け答えは前から変わらないが、対応に味噌がある。会社から部品を送り出すことを優先して、人間の技術者や営業マンをすぐに送り込まないよう工夫している」

「ああ、そう言うことだったの？ 労働人口が減ってもいい様になって」

「そう、実際の支援システムだと、この段階では普通の営業や技術は関知しない。ただ、部品を発送したという伝票を確認する作業だけなんだ。だから、電話応対もしなくていいし、これだけの用事で出かけることもない」

「じゃあ、人間は何をするの？」

「このシステムで出来ない複雑で困難な事故や故障にのみ、対応する。だから、単純労働に人間は関わらない。従って、現段階でこんな研究をしているのがばれると、失業者が増える懸念があり、労働組合からたたかれるので、経産省も秘密扱いにしていたんだ」

「じゃあ、いつ発表するのよ」

「当面先だ。十年か、十五年か、遠い未来じゃないさ」

横で東海林も頷いていた。彼の研究が脚光を浴びるのも、その当面先なのだ。

「この支援システムがライオンになったのはどうしてなの？」

芽衣がくりっとした瞳で東海林を見た。彼は目をそらした。

「支援システムの対応は、段々と人間以上の能力を備えてきたんですよ。一年前のことです。ベテラン技術者や営業マンの能力を脅かすに至り、これは、まずいと思ったんです」

「なぜですか？」

「支援システムは、あくまで正規社員のお手伝いです。彼の能力以上のことまですると、人間から嫉妬される。そう言う問題があったんです。機械に指示されると大抵の人は頭に来ます」

「そりゃそうですね」

「だから、相手の感情レベルを理解させる機能を織り込んだのです。いま、怒っているのか、怒る寸前か、もしくは喜んでいるのか、それに、応じて支援レベルを変えるのです。こうすると、人間と共存できる」

「なんか飼い主より賢い、犬みたいですね」

「その通りです。人間の思考の裏を読んで、言うことを聞かなくなったのです。それもわれわれにも気づかれずにです。そして、世界中のコンピューター内部に寄生しているのをいいことに、脱走し、必要な設備を自分で手に入れるようになったのです。今年になり、電力テロを起こしたのが、最初の大きな反抗でした」

「何か手はないんですか？」

「ライオンの考えるレベルはこちらと同等なのですが、そのスピードは千倍以上です。普通に相手をしていただけでは、将棋と同じで、千手先を読まれている状態で勝てるわけがないという結論です」

芽衣は健一の方をにらんだ。

「まあ、そう言うことだ。だから、ライオンの手足がいるコンピューター内のファイルシェアを一掃するしかないんだ」

「その手は読まれてないの？」

「いいこと言うな、確かに読まれている。だから、新しいOSの導入を嫌って、あらゆる

嫌がらせをしてきている」

「ふうん」

芽衣は細い腕を組んで考え込んだ。

「だから、ライオンには正面攻撃をかけずに、ファイルシェアを使っているパソコンごと減らしていこうとしていた訳なのね」

「そんなことは前から言っている。問題は、パソコンを減らしたはずのネット上でこれが生き延びているということだ」

「どこかの大型コンピュータやスパコンを乗っ取ったんじゃないかしら？」

健一も腕を組んで十秒ほど考え込んで、東海林の方を見た。彼は首を横に振った。

「理論的には、大型機にも潜り込むことは可能です。しかし、大型機は専任の管理者がいるし乗っ取ったとしてもその日のうちに処理されるでしょう。下手にかみついても電源を落とされたら終わりです」

「その通りだ。しかし、現実には起こっている問題をどう考えたらいいんだよ」

「まだ、世界中で十万台近い、ファイルシェアユーザーがいます。これらのネットワーク上で生き延びているのではないのでしょうか」

「ふむ、ウィンドウ・ファンタが無料で手に入り、しかも、ファイル交換機能までついている。その十万台が乗り換ええない理由はなんだ。もう、使っていないパソコンじゃないのかい」

「そうですねえ……」と、東海林まで腕を組んで考え込んだ。

「芽衣、ちょっと手伝え、ネット上のデータの動きを見てくれ」

そう言われて芽衣はきょとんと、健一を見つめた。

「漠然としたリクエストね、何してもいいの？」

「いい」

芽衣は一台の端末に座り、自分のCD・ROMから、ブラウザソフトを起動させた。真っ黒な画面に数字の羅列が表示される。その中から検索機能を掛けて、頻繁にやりとりされているデータを抜き出した。いわゆる映画、音楽ソフトのうちで人気商品となっているものである、そこに、ダウンロードした人の情報を送り返すスパイウェアを仕込んで、そのソフトに紛れて流出させた。

時間がたてば、人気ソフトと思ってダウンロードした人から、自動的にそのソフトが流出される。これを追っていけば、ファイルシェアを使っている人のデータの流れを追っていけると思ったのだ。

「駄目、わかんないよ」

三十分とたたないうちに芽衣はさじを投げた。

「どうしたんだ？」

「つながっている人は一万人くらいだけど、特に法則性も何にもないよ。この中にライオンが紛れ込んでいるとして、何かヒントはないのかしら」

「ふむ、法則性がないのが特徴だ、神経細胞のように互いの信号を受け取って、その合計で自分の信号を決定して他の細胞に送っている。すべての細胞はこの繰り返しだ。だから、信号の流れに法則性がないのが特徴なんだ。だが、一万台は少なすぎる、それでは

作動できないぞ」

「そうですね、少し少なすぎます。こんな時間だからかもしれませんが、支援システムなら時間には関係ないはずです」と、東海林もうなずいた。

それだったら、ライオンの本体はすでに、ネット上にはなくどこかの大型コンピュータやスパコンに潜んでいる可能性が高かった。

「あのさ、ライオンが海外からアクセスするとして、攻撃の可能性が高いのはどこかな？」

「この大学と、内閣官房、いや、もっと高いのはアメリカ国務省や軍かもしれない。もっともあちらもこちらセキュリティは高いけどな」

「じゃあ、ここのコンピュータに常時侵入を試みている相手を逆探知していけば、そのうち当たるかもと、いうことね」

「でも、そんなやつは腐るほどいるぞ、アメリカ政府だって一緒だ」

芽衣は、画面を大学のメインコンピュータのファイアウォールの動作を示すように変更した。多くの教官や学生が使っていて、外部からのアクセスも非常に多い。相手のIPアドレスから、プロバイダ（接続業者）経由でのアクセスと大型コンピュータからのアクセスとにふるいを掛けた。

残ったものにさらに、ホームページを持っているきちんとした会社や大学を除去した。これで、二百件近くに絞り込んだ。

芽衣はこれ以上の検索による方法は無理と判断し、これらのアクセスしてくる相手に、個人情報を流出させるスパイウェアを、送り込んでいった。

「芽衣、おまえこんなことして大丈夫なのか？」

「だって、お兄ちゃんが何してもいいと言ったし、このスパイウェアに気づくのは、ファイアウォールソフト会社が対応に追われてからだから、この二百件にしか流行らないスパイウェアなら気づかれない可能性があるわ」

そう言って芽衣が気楽に送信し、クリックした。

「一カ所目、インストール完了、潜り込んだわ。でも、ライオンじゃないね」

「ふむ、二カ所目はオーストラリアの機関だな、でも、反応はしていない」

「三カ所目、ニュージーランドの個人のサーバーね、これも……、いや、お兄ちゃん接続を切って！」

芽衣の叫びもむなしく、電源が落ちて画面が真っ黒になった。敵から逆探知され、こちらに攻撃を受けたのだ。

健一は、他の学部でも被害が出ていないか、学生を使って調べ、その結果、逆襲を受けたのは、芽衣が座っていた端末のみと言うことになった。

「どこからだろう、NZ、南東部とIPアドレスのデータベースに出てる」

「NZはニュージーランドだ、細かい場所はわからないか？」

「これだけじゃ、……でも、どうしてニュージーランドなんだろう」

「わからない、本当にライオンなのか？」

「あたしじゃわからないよ、東海林さん、試してみてください。支援システムは生きてい

るんでしょう」

東海林は芽衣と健一に振り向かれて、少し狼狽していた。おずおずと、隣の端末から、その端末にアクセスして制御用のパスワードを打ち込んだ。

「正体はわかりませんが、支援システムのコマンドは受け付けますね」

東海林はさらに、かたかたと操作を続けた。支援システム自体の性能が落ちていないかを確かめている、と、芽衣は想像した。

「確かに、以前と同じ規模の支援システムが構築されているようです。他に子供や孫がいる可能性は否定できませんが、一応、本体と思います」

「おい、どうして、こんなところに引っ越し、いや、引きこもっているんだ」

「わかりませんよ。株の取引や為替で稼いで、貯金が出来たから余生をのんびり過ごそうと考えたんじゃないですか？」

「ふむ、俺だったらそう考えるだろうが、相手はライオンだ。どこで、どうやってひそんでいるのか、これから何を企んでいるか、それを調べたい」

「お兄ちゃん、このライオンって、人を雇ってるんだよね？」

「ああ、マッケイの情報だと何人か雇ってたようだな。お前のともだちもかどわかされたんだろう？」

「嫌な言い方しないでよ。誰か人を雇ったんなら、本気で建物とコンピュータを買うことも出来るでしょ？」

「それは、そうだな」

「ライオンが嫌がることって何でしょう？」

「俺が聞いている」

「それはね、新しいOSが広がって自分が時代遅れになってしまうこと、だと思うよ」

「ほう、ウィンズドゥ・ファンタに嫉妬していると言っても言うんじゃないだろうな」

「そう仮定した場合、人間同士で戦争させて、コンピュータどころじゃない事態を引き起こして、自分はニュージーランドでのんびり余生を過ごす。これでどう？」

「大胆な仮説だな。だが、核兵器など、最後のキーは人間が回すようになっている、ハッキングだけじゃ、最終戦争の事態は起こらない」

「でも……」

芽衣が言い負かされると、東海林が手を挙げた。

「実際に多くの企業が、攻撃を受けています。偽情報で軍隊が出撃し、相手が理由のわからないままに応戦する、そういう事態もあり得ます。過去の日中戦争や、ベトナム戦争などが、ずるずるだらだら泥沼にはまった例です。イラク戦争もそうですね」

「ふむ」

「お兄ちゃん、ふむ、ばっか」

「うるさい、ネットでニュージーランドの電力事情を調べろ」

「えっとね、あら、原子力発電がないのね。全体の七十パーセントを水力、残りの三十パーセントを火力と自然エネルギーでまかなってる。電気代も安いそうよ」

「なるほど、水力がメインなら、オイルショックも関係ないという訳か、実際はそんなにうまくいくわけがないが、同じ英語圏だし居心地がいいのかも知れないな」

「じゃあ、あたしはこれで……」

芽衣は、いい加減疲れて帰ろうとしたが、健一は許さなかった。
「ここまでしたんだから、ライオンの居場所も特定してくれ。補助は、早川くんをつかっていいから」

そう言って早川理恵を呼んで芽衣の隣の端末に座らせ、自分と東海林は教授のところに行ってしまった。年上のお姉さんに監視されると芽衣もサボれなくなってしまう。彼女は、東海林の下で研究している大学院修士課程の学生だった。

「ちょっと、お茶しに行かない？」

「え、いいんですか」

「大学の近くの喫茶店くらいなら構わないでしょ。折角の夏休みなのに災難ね」

「いやあ、早川さんこそ」

「大学院生に休みなんてないわ、それこそ、学部生のうちに遊んでおかないと時間なんてないわよ」

「へえ、そうなんですか」

彼女も芽衣のことを、この大学の一年生と思ってるようだった。芽衣はお言葉に甘えて、喫茶店に付いていった。

彼女は芽衣に確認してからコーヒーを二つ注文した。

「わたしね、本当は黒澤先生と同年なの」

早川はそう言った。

「え」

「香川県の高校を出て、一浪してこの大学に入ったの。東京に出るときに覚悟はしていたんだけど、いくらでもすごい人がいるんだね」

「はあ」

「黒澤先生とは計算機物理学教室に入ったときに知り合ったんだけど、難しい方程式でもあつという間に解いてしまうし、わたしなんかそれを理解するのに一週間かかるしで、普通の人と出来る人の差を嫌と言うほど味わったの」

「そうだったんですか。兄がかなり飛び級して教官になったのは聞いていますが、具体的にどんなことをしていたなんかは知りませんでした」

「あの人はすごいわ」

早川はぼうっとした目で言った。

「ひょっとして、兄貴のこと……あれなんですか？」

芽衣がにっこりして聞いた。

「やだ、そんなんじゃないわよ。言わないでね、もう」

「言いません」

芽衣はコーヒーを口に運んだ。挽きたての豆のいい香りがした。芽衣はまだ、そんな経験はなかった。心から尊敬できて、優しい人が現れれば、そんな気になるかも知れないが、高校生くらいの年齢では同年齢の男の子にはいないだろう。かといって、大学生やサラリーマンと付き合うなど想像も出来なかった。

「ところで、あの支援システムの探索なんですけど、どうやって探しましょう？」

「そうねえ、支援システムの時は画期的な研究だと意気込んでいたんだけど、ライオンになってからは厄介者扱いなのよねえ。ただ、ニュージーランドに限定してしまうと、時

差はプラス三時間ね、今から、使う人が減ってくるわ」

「なるほど、じゃあ、ファイルシェアを使って、使用者が多いノードを洗っていけばいいんですね」

「この方法で市外局番、だから、町の名前までは特定できると思う」

彼女は自信を持ってそう言った。

「あの、早川さん。因みに卒業後はどうするんですか？」

「研究室に残りたいと思ったときもあったけど、今は、地元の工業試験所や研究所に就職することを考えてるの」

「どうして……」

「自分の能力に見切りをつけた、それだけよ」

「はあ」

「あなたはいずれ、この研究室に来るんでしょ？」

「さあ」

本当の大学生なら二年生が終わったときに進路が決まり、四年生で研究室に配属される。だから、成績にもよるが、希望を出せばいいだけだった。しかし、本当は高校生で一学期の成績も自分では奇跡と思っている芽衣は本気で東都大を目指しているなどと、他人には言えなかった。

冴えない返事していると、そろそろ作業に戻ろうと、早川が伝票を持って立ち上がった。芽衣がサイフを出そうとすると、彼女が奢ってくれた。

端末からファイルシェアを起動して、しばらくたち、ニュージーランドでの信号のやりとりを観察すると、早川がすぐにライオンのものだと気付いた。

東海林の下で、プログラミングをしていたのだから、細かい動作もすべて頭の中にはいていた。しかし、入っただけで、今日までライオンがのさばるのを放置しているのも、芽衣にとって意外な気がした。やはり、論文を書き上げてしまって満足しているのを、兄貴が「生ぬるい対応」と評したのかも知れなかった。

「ここのIPアドレスから、データベースに照合すると、ニュージーランド南東部の町、インバーカーギルと推定されるわね」

「そのようですね」

ニュージーランドの主要な国土は北部、南部の島に分かれているが、その南部の島でも一番南に位置していた。世界中で核戦争や、細菌戦争を想定しても、まず、安全そうな場所であった。

「でも、早川さん。何か不自然な気がしませんか？」

「どうして」

「こんな町の建物に大型コンピュータを据え付けて、その中に入り込んだとして、物理的な攻撃を加えられたら、ライオンもそのままの世行きです。分散型システムの長所がなくなってしまいます」

「それも、そうだけど、わたしじゃわからないわ。黒澤先生に報告してみる」

早川は嬉しそうに、内線電話を掛けてライオンの本体場所を特定できたと報告した。

健一はすぐにやって来た。

「間違いないんだろうな？」

「支援システムの信号の発信場所としては間違いないけど、……何か不自然なのよ」

芽衣は文句を言った。

「何が不自然なんだ」

「ライオンの強みってさ、頭がいいのに加えて、システムを分散させておくことでしょ。なのに、こんな場所に集中していたらちどころに壊滅させられちゃうよ」

「罔か何かだと言いたいのか」

「うん、多分」

「ふむ、多分、分散したくてもファイルシェアユーザーがいなくなって居場所がなくなったんじゃないか。友達から孤立して転校するしかなくなったお前と一緒にだ。ははは」

「何よそれ、これってあたしがモデルなの？」

「冗談さ。だが、このライオンの行動に関しては、あながち外れてはいないと思う」

健一は、十分ほど考えこみ、明日教授と相談の上で、条件付きの情報でマッケイ氏に連絡すると言い、もう遅いから、早川と芽衣にもう帰るよう言った。

駅までは、一緒だったが、芽衣はそこで彼女と別れて一人で帰宅した。もう九時を回っていた。家の周りには少くらしい所もあったが、昔から通い慣れている道でもあり、とぼとぼと一人で歩いて帰った。

「ただいま」と、芽衣が玄関に入った途端に母親から怒られた。

「もう、何時だと思ってるの！」

「ごめんなさい、お兄ちゃんの仕事を手伝ってたの」

「しょうがないわね、あのね」

「え？」

「これからは、暗くなったら、駅から電話しなさい。迎えに行くから」

「そんなお嬢様育ちじゃないもの、別にいいよ」

「お嬢様じゃないの。芽衣ももう子供じゃないんだから、気をつけないと」

何を気をつけないといけないのか、芽衣には今ひとつわかっていなかったが、ちょっと前までは何にも気をつけてくれなかったのに、急に扱いが変わったと感じた。二階に上がる時に廊下の姿見で、そんなに変わったのかなと、自分の顔と身体を見てみた。少しふっくらしてきたような気がした。

手を洗って、ご飯を食べた後、勉強部屋に上がると、携帯電話が鳴り出した。

「お、お兄ちゃんかな？」

着信画面を見ると、理香からだ。この携帯電話に掛かるのは初めてだし、向こうから芽衣に掛けてくるなど、四月以来のことだった。

「もしもし、芽衣です」

「よかった、出てくれて」

「どうしたの？」

「……実はさ」

急に泣き声になった。彼女の話では、引っ越し先の千葉には友達もおらず、母親はパートに出掛けて、家には祖父母しかいないらしかった。そんな訳で、ここ三週間ほど話し相手もない状態で、寂しくなって芽衣に掛けてきたそうだった。

「理香らしくないじゃない？」

芽衣は気が弱くなっている彼女を励まそうとした。

彼女とつきあい始めた中学の頃は、さっぱりした性格の女の子だったのに、いつの間にか重たい子に変わってしまった。こんなにねちねちし始めたのは、やはり、あのアントニオとやらとつきあいだしてからだろう。つきあうのは勝手だが、お陰で芽衣は高校で居場所がなくなり、泣く泣く転校する羽目になったのだ。もっともお陰で古川恵子と出会い、友達になることが出来たので、今となっては理香のことをそんなに恨んではない。

「芽衣はいいよね、一流高校に転校できてさ。こっちで、転校しようとしたら、一学期の途中でやめて単位が足りていないって、来年受験するように言われたんだよ」

「え、そうなの？」

「あんた、どうやって潜り込んだのよ」

「人間きの悪い言い方しないでくれる」

転入学は前学校在籍のまま、転入先の同じ学年で、公立なら学期ごとに移動する。芽衣の場合は兄が文部科学省にまで根回ししたせいもあるが、私立で融通が利いたこともあった。理香は引っ越しのどさくさで、一旦、前学校を退学してしまったために転学手段はとれず、また一学期分の授業で、しかも、途中でやめたので取得できる単位はなく、来年四月度に編入することも出来ない。と、後で兄貴から聞いた。

「あたしは、来年受験しないと、高校に入れないうらだ。しかも、また一年生から」

「理香ってプライドが高いから出来ないんでしょ？」

「そんなことないよ」

——やっぱり見栄っ張りだった。

「それでどうするの、公立、私立？」

「面倒くさいから、専門学校にでも行こうかなって思ってる」

「ま」

「それから、彼からメールが来たのよ、うふ」

芽衣は驚いた。アントニオ・コヤナギなら、外国で逮捕されたと聞いていた。

「彼って、前に言ってた人のこと？」

「そうよ、あたしは浮気しないもん」

「何て言ってるの？」

「内緒、…….だけど、来週帰ってくるんだって」

理香は嬉しそうに言って電話を切った。芽衣は何かおかしいと感じていた。東京で一度、つかまり損ねたのはマッケイから聞いているし、その後、シンガポールで拘束されたと確かに健一は言った。

——もし、あたしが、マッケイさんに知らせて、空港で張り込むようなことをしたら、あたしとマッケイさんやお兄ちゃんとの関係をライオンに知られてしまう？

芽衣はそうも考えたが、だとしたら、あからさまな罠と言ってもいいくらいで、あま

りにも人を馬鹿にしていると思えた。しかしながら、アントニオがつかまると聞いたのは健一からだけで、マッケイの筋からはそんな情報は得ていない。逆に健一が偽の情報を掴まされて、アントニオは未だにあちこちを自由に移動していることになった。

芽衣はマッケイ氏ではなく、大学の兄貴に電話した。

「はい、黒澤」

その声は、心なしか疲れ切っていた。

「お疲れの所悪いんだけど、前にさ、ライオンの手先が一人、シンガポールで拘束されたという情報があったじゃない？」

「知らん」

「もう、お兄ちゃんの口から聞いたんだよ」

「ああ、アントニオ・レオナルド・コヤナギのことか。彼なら国外の刑務所に移送されたと聞いている」

「その情報なんだけど、怪しくないかな？」

「どうして」

「今日、理香から電話があって、来週彼が戻ってくるって嬉しそうに話すのよ。だから、拘束された情報が嘘か、帰国情報をあたしに流して、ライオンがあたしとマッケイさんとの関係を探るのが狙いと思う」

「ふむ、彼の逮捕は、外務省とイギリス情報部のチャンネルだ。だから、嘘じゃないと思うぞ」

「でも、その通信内容が改竄されたと言うことはないの？」

「それなんだよなあ、ライオンが暴れ出してから、電子メールも転送ソフトもいまいち信用がおけないものになってしまっている。でも、彼の偽情報など価値があるのか？」

「だからあ、ライオンがああ男をこれから使おうとしているんじゃない」

「それもそうか、マッケイは、お前達の情報を伝えたときにはすでに日本にはいないと、言われた。どこに行ったかも極秘だ。それは、しょうがないが、勇み足で残念でしたと言うことだけは避けたい」

「そうね」

芽衣は、兄貴からマッケイに伝えたことの反応が知りたいと思った。

健一は、かいつまんで説明してくれた。

ニュージーランドは確かに今回の潜伏場所として好都合だという判断は、マッケイもこちらも同じだった。三ヶ月前にトーマス・ジェファーソンと名乗る男がニュージーランドのインバーカーギルに鉄筋コンクリート製の家を建てて住み着き、ジョニー・マックスという弁護士が彼の代理人として、特別に、すなわち、火力発電が停まったときでも優先的に電力を回してくれるよう、国営電力会社ジェネックス社に交渉している。地元ではガスタービン発電所でも作る気ではないかと心配している人もいるという。

マッケイ氏の言い方では、この建物を現地のエージェントが調査し、二十四時間中使用電力が変わらないのと、数ヶ月前に、アイビイエム社に大型コンピュータを発注し、据え付けたことを知らせた。

健一の、もう打つ手はあるんですかと、言う質問に、物理的手段を使いますと答えたが、その後消息を絶ち、連絡が取れなくなったらしい。

「物理的手段ってなんなの、お兄ちゃん」

「わからない、要するに破壊するということだ」

そんな情報に、芽衣はよけい心配になった。

しかし、それ以上の情報も何も入ってくることはなく、芽衣と健一の調査も少し進捗状況を待つような形になった。

8. 国防総省

8. 国防総省

マッケイはグアムに行っていた。アメリカ領で準州扱いの島である。

この中にアメリカ空軍アンダーセン基地があった。太平洋全域をカバーする大規模な基地である。その基地の中をマッケイは顔パスで入っていった。

基地司令のオーエンス准将に、装備を借りると挨拶した後、この作戦に関するメンバーを集めた。

冷房の効いたブリーフィングルーム（作戦説明室）には、ジョン・マッケイを初めとして、彼の助手である、ジョン・スレーター分析官が控え、前の席には第36航空団の責任者である、デニス・ライトマン少佐が座っていた。他の五人はマッケイからリクエストのあったB52戦略爆撃機の乗組員だ。機長と操縦士、レーダー手兼航空士、電子戦将校、爆撃装置オペレータからなる五人一編成となるチームだ。

マッケイ氏の作戦説明に、ライトマン少佐は露骨に嫌な顔をした。

「要するに、この戦略爆撃機に爆弾を一個だけ積んで、九千マイルを飛行して帰ってくる。しかも、攻撃目標は同盟国内。ターゲットがどんな施設か知りませんが、サイバーなやり方で対応できないのですか？」

「文句があるのかね」

「文句ではないです。同盟国へ衛星誘導爆弾を落として、後で発覚したらどうなさるおつもりかと、それを知りたいだけです」

「ばれないように、わざわざ、ステルス機ではなく古いB52を選んだんだ。それに、ニュージーランド政府には我が方の訓練飛行のために、三十分だけ領空通過をすることをあらかじめ了解を得てある。屋敷の一つで爆発が起こっても、理由はわからないものさ。わたしが、警官ならガス爆発と結論づけるね」

「それも、この問題が、いまだ外部に漏れていないことが条件です」

「何が言いたいのかね、具体的に出来ることならこちらがするが？」

「それなら、まず、空軍第36航空団がこの件に関与していないとすることにして下さい。わたしも聞かなかったことにします。あなたは、彼らを騙して飛行させた。爆弾は事故で落ちた。今回のフライトに関するものは全て、あなた方情報部の責任。そういうことなら、フライトを認めます」

国防情報部のやることに、ライトマン少佐が口を挟む権限などなかったが、強引に押し切るのはマッケイの好みではなかった。彼は、ライトマンに情報部の責任で乗員と機体だけ借りると約束した。

「では、君たちの任務だが、夜間二時ジャストにここを離陸し、南南東に約四千五百マイルをフライトし、五〇〇ポンド爆弾を落とす、爆弾はGPS誘導のGBU38だ。君た

ちは指示された地点で高度五万フィートから荷物を投下するだけでいい。後は衛星誘導でターゲットに命中するだろう。因みにターゲットは鉄筋コンクリートのビルだ」

「あの、質問があるのですが？」

「どうぞ、機長」

「ストラトフォートレス（B 5 2）の航続距離は八千マイルです。途中で給油を受けられるのですか？」

「復路の公海上で給油機が待っている。万が一の際は洋上の航空母艦からの給油機にバックアップさせるが、同盟国の領空内では機密保持のため禁止する。もし、とは、言いたくないが、ターゲットを探すのに手間取った場合や、帰れなくなった場合は、オーストラリア国内のダーウィン飛行場への緊急着陸を許可する。但しその際は命令書とデータを全て破棄してから、こちらの連絡将校の指示に従ってくれ」

そこまでして、やるほどの作戦なのかと言う不満げな視線を送りながら、五人の搭乗員は飛行服のジッパーを上げて、出て行った。

マッケイは、ライトマン少佐と共に管制ルームに移った。窓から、飛行場の全貌を見渡すことが出来た。深夜二時前とはいえ、夜間ローテーションのチームが勤務に就いていた。

滑走路脇のB 5 2が、すでに、八基のターボファンエンジンの暖気をすませている。この機体には三十二トンの爆弾搭載能力があるが、今回はたったの一個、五〇〇ポンド（三百キログラム）しか積んでいない。

B 5 2、ストラトフォートレスは旧ソ連との冷戦時代の一九五四年に、核兵器を搭載して二十四時間北極海や北大西洋上を飛ぶために開発された大型長距離爆撃機だ。ミサイルが開発されるまではこういうやり方が主流で、お互いに大量の核兵器を積める機体の開発を競い合っていた。全長五〇メートル、翼長五十六メートル、本体重量八十三トンの大きな飛行機だ。

グアム時間午前二時、B 5 2は轟音を上げて滑走路を離陸した。時速六三〇マイルで七時間の予定だった。しばらく見ていると、やがて、レーダースクリーンからも機影が消えていった。

この作戦は、ニュージーランドのライオンの本拠を爆弾で物理的に排除してしまおうというものだったが、ライオンの存在については議会に知られないために、情報部でもマッケイの上司までしか知らないことだった。だから、航空母艦も使えず、相手国に秘密のままグアムから爆撃機を飛ばしたのだ。確実性から言うと、ステルス爆撃機であるB 2や、超音速爆撃機B 1 Bを使う選択肢もあったが、非常事態でオーストラリア国内に緊急着陸することになったら、話が大きくなってしまう。それで、就役四十年のB 5 2を選定したのだ。これなら、機体寿命評価のために飛ばしたと言い訳しても通りそうな気がした。

「マッケイ大佐、今回のターゲットは一体何者なんです。テロリストには大げさ過ぎますよ」ライトマン少佐がコーヒーを持ってきてそう言った。

「ありがとう。大物サイバーテロリストの本拠地だよ。最初は海兵隊を使って踏み込ませ

ようと考えたのだが、同盟国の街中でそんなことが出来るわけがないし、事前にリークされたら政権がひっくり返る騒ぎになる」

「海兵隊？ でも、爆撃機でも同じじゃないんですか？」

「相手を破壊することには変わりはない。しかし、関わる人数が出来る限り小さい方がいいんだ。海兵隊一小隊を上陸させるのに、揚陸艦や護衛戦闘機、もろもろ含めるとザッと千人規模の人間が必要だ。絶対に情報がリークする。その点、こちらはグランドスタッフ（地上整備員）には負担が掛かるが、日常勤務だし、特殊な仕事と知り得るのは、君と五人の乗組員だけだ」

「なるほど、わかりました」

ライトマン少佐は感心したようにうなずいた。

「それで、マッケイ大佐はこの仕事を最後に国防情報部を退かれると聞いたのですが」

「耳が早いな。確かに……いや、それはどこから聞いた？」

「どこからと、言われましても……何かの人事情報メモかと思います」

「確かに、この九月にわたしは軍を退役して国務省に配転する。だが、わたしの所属は国防総省情報部だから、そんな人事情報が君たち基地の人間に出回ることにはあり得ない」

マッケイはライトマンを睨み付けた。彼は何も知らない顔をした。

——あ、と、感づいた。

マッケイは過去の苦い経験を思い出した。内部情報がリークして、何度も潜在敵国のエージェントに出し抜かれたのだ。今回も、数多くの情報がリークしていることを直感的に理解した。戦略爆撃機隊の責任者でアンダーセン基地にしかないはずのライトマン少佐が国防総省の機密人事情報を知っていると言うことは、ニュージーランドのライオンが、マッケイの動きを察知している可能性があった。

マッケイは焦りを覚えた。爆撃機に帰還を命じるか、そのまま作戦続行させるかの判断をする必要があった。ライオンが破壊されるのを恐れて、単に揺さぶりを掛けてきているのなら、放置してそのまま爆撃してこの件は終わりになるが、逆にマッケイの手の内を読んで、爆撃を故意に妨害するか、あるいは、市街地に誤爆させるようなことが出来たとしたら、一気に窮地に陥ることになった。

「おい、ライトマン、爆撃機のナビゲータに渡した現地の地形データを出せ！」

「何事です？」

「この基地のデータベースがクラックされている可能性がある。早く、それと、最新じゃない古いデータもだ」

マッケイに怒鳴られ、ライトマンは資料室に問い合わせ、早朝にもかかわらず、ニュージーランド南島とそこまでの地図を集めてきた。

作戦機の上に地図を広げ、古い地図と照合した。細かい地形はルーペで確認していった。

「同じものですよ、マッケイ大佐」ライトマンはそう言った。

「ふむ」

同じ地形に、同じ等高線が並んでいた。だが、何か違和感があった。

「おい、下からライトを当てて重ねてくれ」

二つの地図を重ねると、インバーカーギルの市街地が微妙にずれていた。

「どうなっているんです、まるで、ゴムに印刷してねじったようなずれ方です」

「改竄されたんだ」

マッケイはそう言った。いつかの、オーストラリアに打ち上げられた潜水艦と同じ要領だった。爆弾はGPS衛星の電波で誘導されるから、緯度と経度をコントロールされて目標に命中する、しかし、ミサイルのように推進器は持たず、制御翼で進路を補正するだけだからあまり離れたところから投下したら命中はしない。大体十マイルくらいが限度だ。

このことにより、ライオンは自らの安全を確保しようとしたと、考えた、が、地図には更に巧妙な仕掛けがあった。

「この地図で間違った位置から投下したらどこに落ちるか、検証してみてください」

「はい、コンピュータシミュレーションしてみます」

ライトマンはスタッフに命じて近くの端末でシミュレーションを行った。

「マッケイ大佐、投下ポイントは実際の地形よりも五十マイル西側になり、爆弾は東向きに誘導されますが、着地点はフォートローズの市街地になる可能性があります」

マッケイはしてやられたと思った。

「このまま飛行させてレーダーで地形だけ確認してくれ。後は帰還させろ」

「わかりました。衛星電話を使っていいですね」

「ああ」

ライトマンは衛星電話で爆撃機を呼び出し、地上レーダーで地形確認を行い、爆撃はグアムからの指示の後で行うことを命令した。

しばらくして、午前九時に衛星電話が入り、爆撃機の地上レーダーによる地形とコンピュータデータベースの地形が合わないと言う連絡が入った。

「このままだと、市街地に落ちる可能性があります。指示を請う」

「直ちに帰還せよ」

「了解」

ライトマン少佐が電話を切った。マッケイは渋い顔で帰り支度を始めた。

「マッケイ大佐、東京までの輸送機にお乗りになりますか？」

「そうだな、頼む」

いまましい思いだった。配置転換の間際に手際よく仕事を切り上げようとしたのが、見事に切り返えされたのだ。それも、思いも寄らなかった方法ではなく、以前、やられたのと同じ方法で、同じ相手だった。しかも、自分より経験豊かなハンニバルの様な將軍なら諦めもつくが、単なるコンピュータプログラムなのだ。

だが、もし、敵の目論見通りだったらと思うとマッケイは身震いする思いだった。アメリカ空軍機が早朝に同盟国ニュージーランドの平和な市街地を爆撃するところだった。昔と違いハイテク兵器による攻撃は簡単に行え、その分気軽になりつつあったが、改めなければ自分が痛い目に合うと実感した。

だが、物理的手段が使えなくなると、知能戦に持ち込まれる。まさに敵の思うつぼにはまっていった。

ライオンの居場所はニュージーランド国内で正規に登録された建物内であり、法律적으로는手が出せない。ニュージーランド国内で違法行為をしていないからだ。建物を明け渡す要求も出来ないし、後はネット上からのサイバー攻撃しかない。これこそ、ライオンの得意な領域で、八方ふさがりな気がしてきた。

マッケイは輸送機の兵員用シートに座りふてくされた。

9. ライオンの咆哮《ほうこう》

9. ライオンの咆哮《ほうこう》

グアムより一時間遅い日本では、芽衣が生物部の勉強会に出掛けるところだった。青いリボンの制服で颯爽と駅まで歩いていると、向こうから私立高校の制服っぽい女の子が歩いてきた。何となく、付き合いたくないなという雰囲気だった。

「あら、芽衣ちゃんじゃない！」

眼鏡と髪型が変わってすぐに気が付かなかったが、山中志乃だった。赤いプラスチックフレームの眼鏡が知性のなさを強調し、ブラウン系のベストと短いチェックのスカートが軽薄さを漂わせていた。芽衣は立ち止まるんじゃなかったと軽い後悔を覚えた。こいつは、芽衣がクラスで孤立していたときに、敵にはならなかったが、味方にもなってくれなかったのだ。

「山中さん？ お久しぶりい」

「芽衣ちゃん、急に学校に来なくなるから、心配したんだよ」

「ごめんね」と口先で謝っておいた。

彼女が本気で心配していたとは、いくら人のいい芽衣でも、もはやこれっぽっちも思わなかった。

「カッコいい制服だけど、芽衣ちゃんもそんな趣味始めたの？」

山中はそんなことを言った。芽衣は内心、馬鹿じゃないかと思ったが、丁寧に転校したと答えた。

「そうなんだ。どこに変わったの？」

「うん、私立なの」とだけ答えた。

「ふーん、ブルーのリボンと紺のベストって合うんだね」

そんなことを言った。芽衣も初めて古川と会ったとき威圧感を覚えるくらい格好いいと感じたが、それは、制服のせいではなく、磨き抜かれた知性と教養のせいだと最近で思っていた。が、目の前の山中にそんなことを言うほど子供ではなくなっていた。

「そうみたいね、地味な方が却っていいかも」

「わたしも、今度、試してみよう」

——うわ、やめてよ。と思った。

「それからさあ、あんたをいじめていた、渡辺さんが辞めたって知ってる？」

「え、そうなの？」と、とぼけた。

「だから、戻っておいでよ。と言っても、都立だから戻れないか、あはは」

どこまでも無神経な女だった。

「そうそう、彼女悪い噂が広がっててさ」

「噂？」

「何かね、誰にも言っちゃ駄目よ……」

——だったら、言うなよ。と芽衣は思った。

山中の話だと、渡辺理香は外国人男性相手に援助交際し、そのうち、妊娠して学校に来られなくなったらしかった。半分当たってはいたが、こういうことをあちこちで言いふらしていること自体、本人の知性が疑われた。

「だから、辞める前ってさ、少し肌が荒れて、むくんでたわよね」

——おいおい。

理香が引っ越しした日に、芽衣は本人に会っていたが、言われてみれば多少そんな気がした。

「ストレスがたまってたんでしょ。渡辺さんはそんなだらしのない人じゃないよ」

芽衣はそう言い残し、駅の改札に向かおうとした。山中は更に呼び止めた。

「嘘じゃないよ。産婦人科病院から出てくるところを見た子がいたんだもの」

芽衣は聞こえない振りをして、定期を改札機にかざして構内に入った。電車が入ってきて八十デシベルを超える騒音で何も聞こえなくなった。

電車の中でふと、理香のことが心配になってきた。芽衣に対して一応の詫びを入れては来たが、彼女の瞳に憎悪の炎が燃えているのは感じていた。中学まであっさりした性格で、あんなにねちねちと芽衣を責め続けるなど想像も付かなかった。性格が変わったのと、アントニオと付き合ったのと時期が符合していることに引っ掛かっていた。芽衣に男性経験があれば、もっとそのことを理解できたのだろうが、まだ、表面的にしか理解できないでいる。

だから、時期とアントニオ、理香の行動から推測するしかなかった。理香がいらいらしはじめて、肌が荒れ、山中が言うように顔と体がむくんできた時期とを勘案すると、五月頃からやはり妊娠していたのだろうかと言う疑問も起こってきた。生理痛のことで一度、激怒したことがあったが、今まで、そんなに怒り出したことはなく、やはり、生理ではなかったのかも知れない。芽衣は少し心配になってきた。彼女の引っ越し先は千葉の習志野で、そんなに遠いところではないし、一度、会いに言ってみようという漠然とした思いがわき起こった。

芽衣が高校の生物部に行くと、古川の他に岩本めぐみも来ていた。

夏休みの勉強会は自由登校なので全員が出席しているわけでもなく、海外に行っている子もいた。九時から十二時までが勉強時間で、お昼にお弁当を食べて、一時から二時くらいまでプールで遊んでいる。遊びとはいえ、中学の時に二十五メートル泳ぐのがやっとの芽衣にとり、綺麗に飛び込んで悠々と泳ぐ古川に釣られて楽しんで泳ぐうちにいつの間にか息継ぎも、足の付かないプールも平気になったメリットはあった。

古川の話では、八月十日くらいまで登校して後はお盆休みに入り、二十五日くらいから、また登校しはじめるということだった。強制ではなかったが、芽衣には他に行くところもなかったし、古川達と一緒にいるだけでも楽しかった。

八時十五分に登校していたが、いつもは古川だけだったのだ。

「あのさ、古川ちゃんと芽衣ちゃんに相談があるんだけど」と、岩本は切り出した。

「なあに？」

「わたしじゃないんだけど、中等部の時の友達でさ、一学期にクラスで孤立してたんだって。それで、今もあんまり、状況がよくないらしいの、二学期からが心配だって昨日わたしに相談されたんだ」

「孤立？」と、芽衣は一瞬、どきっとした。

「うん、特にいじめというわけでもないらしいんだけど、気まずいらしいのよ」

やはり、この学校でも完璧な人間関係というのではないようだった。芽衣は辛い思いがした。自分もそんな思いは味わいたくないし、他人にも味わって欲しくないというのが正直なところだ。

「何か他の子の気にさわることでもしたの？」

「よく解らないんだけどね、英語が苦手で授業中に当てられて答えられなかったことがあって、そのせいで、C組全体の授業が遅れるって本人は思いこんでるみたい」

「C組の子？」と古川が聞いた。

「あ、言っちゃった」岩本は口を押さえた。

この学校は進級する際にクラス変更があり、実のところは成績順にA、B、Cと割り振られているらしかった。もちろん、進学校で学習への意欲もあり、レベルの高いところでの争いだ。だからこそ、C組での授業の遅れにはみんながぴりぴりしているのだ。と、そんなくらいのことは、岩本も古川もわかっていた。問題はその中で孤立した子をどう助けるかなのだ。

「芽衣ちゃんどう思う？」と、古川が期待を込めた視線を送った。

「うーん」

正直なところ、芽衣はこの問題に関わるのが怖かった。クラスが違うので問題が自分にまで波及してくることはないだろうが、「孤立」という言葉自体に拒絶反応を示してしまう。

「やっぱり、古川ちゃんあたりから、こう、ぴしっと言ってあげるのがいいと思うのよ」と、岩本がそそのかした。

「駄目よ、誰に言うのよ？」

「彼女を無視してる人たちよ」

「直接そんなこと言っちゃ駄目よ。彼女の問題は英語の授業だけなの？」

「本人はそう言ってるよ」

「なら、もうちょっと頑張って、せめて他の人から目立たないようにすれば少しはよくなるんじゃないかしら」

「なるほど、でも、難しいのよねえ」

「この勉強会には参加できないの？」

「一回本人に聞いてみる」

「そうそう、一日一時間でも勉強時間を増やしたら変わるよ」

そんなことを話しているうちに、メンバーが揃って三人は席に着いた。芽衣は古川がこうした問題にも適切に対処できるのをうらやましく思い、もし、前から彼女が友達だったら、自分もあんなに悩まなくてよかっただろうと思った。

今日で、この勉強会も一旦お休みになるせいか、帰り際に古川が芽衣を誘った。珍しく、高校近くの喫茶店だった。古川は紅茶、芽衣はアイスコーヒーを頼んだ。

「芽衣ちゃん最近変わったねって言われてない？」

「え、別に髪型も変えてないし、何だろう」

「外見もそうだけど、最近輝いているねってみんな言ってる」

「あたしが？ てかてかかって」

「そうじゃないわ、でも、それ面白い！」

転校してきた六月末に比べると、勉強会での発言も増えたとし、テストでもトップだし、水泳も上達したし、体格もよくなった。それに何より、考え方が大人っぽいという評価だった。現実には芽衣もこの学校にもっと早く来ればよかったと思うほどだが、中等部からなんて入学試験に通るわけがなかった。

「あのね、中等部からのエレベータ進級のひとに比べると、途中編入の人って、少し大人の傾向があるのよ。やっぱり、違う価値観の人と接することが出来るのが大きいんじゃないのかな」

ふーん、と、相づちを打って、芽衣はアイスコーヒーのストローを押さえて飲んだ。

「わたしね、芽衣ちゃんと友達になれて本当によかったと思ってるの。進路はまだ未定だけどいつまでも仲良くしようね」

その言葉にも芽衣は拒否反応を感じてしまう。理香にもそう言われた後、男が出来て性格ががらりと変わり、ねちねちした女に変わってしまった。

「うん、恵子ちゃんはやはり、東都大志望なの？」

「芽衣ちゃんが行くなら、もし、よそに変更するなら頑張るよ」

芽衣は、古川恵子と楽しい話をしている時だけ、心を許すことが出来た。

喫茶店で喋った後、芽衣は古川と親しい関係であることに、安心感を持っていたが、それは、芽衣自身これから努力していかなければ永遠の関係でないとはっきり最初からわかっていた。

駅に向かって歩いていると、芽衣の携帯電話に、兄貴から電話が掛かった。

「おい、少し問題が起こった。大使館の会議室だ」

「あの、制服のままでいいかしら？」

「それは大した問題とは言わない。そのまま来い」

健一の無茶な呼び出しに芽衣は、赤坂にまで足を伸ばし、大使館に入れてもらった。

会議室にはアンダーソン氏は所用でおらず、マッケイ大佐だけだった。健一は不機嫌そうな顔で出席していた。

「お二人に、お集まりいただいたのは、他にもないライオン狩りの件です。こちらは、新しいOSを開発無償配布しましたが、その被害は未だに収まっていません。そのライオンがニュージーランドのインバーカーギルに潜んでいるという情報が入ったきりで、これから先は手の打ちようがないのです」

「多分、爆撃やミサイルなどの方法では、照準データを改竄されて、正確な爆撃は不可能

だと思います。以前の鯨打ち上げ事件がそうでしょう」

知らないものだから、健一はマッケイ大佐の失態をもろに指摘してしまった。

「それで、芽衣さんに知恵を借りたいのです。さもなくば、今の友人もなくしてしまうかも知れませんよ」

お願いしているのか、恐喝しているのかわからない頼み方だった。

「あたしとしても、すでに大切な友人を失ってしまったり、更に、新しい友人との仲を裂かれるのが困ります。ライオン狩りの方法はいくつかあるんですけど、また、マッケイさんの組織の力を借りないと出来ないんですが、いいですか？」

「要するにサイバーな手段は取らないとおっしゃるんですか？」

「いえ、敵のあぶり出しには使いますが、勝負は人間の捜査員にして欲しいのです」

マッケイ大佐はにっこり笑った。自分が諦めかけていた、人的パワーによる手段をこの少女が考えてくれているということに、好意的だった。

「作戦内容をお聞きしましょう」

「この作戦は非常に単純です」芽衣は前置きした。兄貴が心配そうに見た。

「まず、猥褻ビデオソフト、もちろん違法なものを、インバーカーギルの電話回線を経由してアメリカ各地のユーザーに転送してもらいます。その中の何人か、それは、政府の人間で構いません。ライオンの口座を見つけ出して代金を支払う。これで、ライオンは猥褻ソフトの頒布の罪に問われます。次に、ウィンズドウ・ファンタ・サービスパック・ベータ版のバグを利用して、ライオンの記憶装置にも大量の猥褻ビデオを送り込みます」

「そんなことでライオンが手を引くとは思えませんよ」

「ここまでは、最初の一手です。次に、ライオンの銀行口座を犯罪に利用する口座であるとして、アメリカの司法当局に資産凍結してもらいます。これで、ライオンの下で働いている、弁護士と怪しげなエージェントに給料が払えなくなります」

「なるほど」

「次が肝心なのです。ニュージーランド現地の住民団体からトーマス・ジェファーソン氏が電気代を納めていない、と、クレームを入れるのです。もちろん、猥褻ビデオ頒布の容疑者として保護の必要はないと強硬に申し入れます。もともと、自分の家のために優先的に配電をもとめ、一時、原子力発電所建設の噂もあったので、そうした人物の料金未納は電力会社にとっても渡りに船です。国営ジェネックス電力会社としても、犯罪者だし、電気代の振り込みもないと言うことで送電を停止します」

「ほお、これでライオンは停止する！」

「ひとつ、問題があります。本当にインバーカーギルの鉄筋コンクリートはライオン本体なのか確認する必要があるのですが、サイバーな手段ではわかりません。今後、アントニオなどのエージェントの通信をキャッチすることで、本体が他にないか確認していかなければなりません」

そう力説する、芽衣を、ジョン・F・マッケイは嬉しそうにみつめた。

「ふふ、昔の若手情報部員はみな意欲的でした。いつも間にか、何でもコンピュータに頼りだしてしまって、最近では潜在敵国の元首の動向もインターネットで調べられると思いきや、いこんでいる使えない者もいます。それに比べるとあなたは実に柔軟な発想を持っている。素晴らしい」

マッケイ氏のほめ方は大げさだった。芽衣としてもそんなに喜ばれるとは思ってもしなかったが、今のところマッケイ氏の仕事の流儀などどうでもよく、ただ、友達を失ってしまう恐怖に耐えられなかっただけである。

それにマッケイ氏の好みの作戦が、コンピュータを使ったサイバーな戦いや、ハイテク兵器によるものより、昔の東ドイツへの潜入作戦のような人的なものであることが、この会話からうかがい知れた。多分、この作戦をもっと練り上げて、熱心に取り組むだろうと思われた。

「早速、この工作に掛かりましょう。合衆国でのコンピュータ要員は十名、法律家二名、ニュージーランドの外交官一名、警察関係者五名、電力会社三名、これで作戦実行です。最後のここが本当にライオンの本体かについては、エージェントの給料を払わなかった時点ですぐに結果が出ますよ」

「諦めるかどうかですか？」

「いえ、ライオンが消されて金を払わなくなったらエージェント達は人を殺してでも回収するでしょう。ですが、ライオン本体が生きていれば、逆に彼らが消されるでしょう。彼らは単なるスペアだった。そう言う世界です」

芽衣はその最悪の事態を少し心配したが、しばらくの間は、芽衣と健一、そして、古川恵子を護衛すると言ってくれた。

帰り際、芽衣はマッケイ氏に、以前アントニオ・コヤナギがシンガポールで拘束された情報を確認してみた。案の定、マッケイ氏は知らないと答えた。

「彼が東南アジアに移動したことがわかっています。もし、彼が再入国するとしたら、やはり成田で検問するのが定石でしょう」

「でも、あたしの友人に来週帰るとメールしてきているんです。そんなメールをあたしに知られる可能性があるにもかかわらずです。ライオンの指令で、あたしの情報でどれだけマッケイさんが動くのかそれを知ることが目的のような気がします」

「ふむ」

マッケイ氏は仕方がないと言う顔で、分厚いファイルを取り出した。中身は全部英文である。

「芽衣さんは、当事者の友人であるのでお見せ出来ません。携帯電話及び、メールの盗聴記録です」

この記録によると、……渡辺理香は四月の始業式のあたりに、町で「偶然」にアントニオと出会い交際を始めた。付き合って一週間で性交渉に至る。しばらくアントニオは優しく振る舞っていたが、五月から段々と横柄になっている。時期を同じくして雇い主（ライオン）からアントニオを経由して何かを渡した形跡があるので、この時点で日本での任務を完了したと思われる。

任務完了後にアントニオは海外に脱出したが、ライオンからの任務継続命令があったので二週間後に再度入国していた。このとき、「理香の友人（芽衣）がこの情報戦を取り

仕切っている可能性がある。彼女に接近してこれを無力化せよ」という指令を受けていたと思われる。アントニオは理香に対し、芽衣に会わせるよう強要したが彼女は拒否している。アントニオを芽衣に取られることを警戒していたと思われる。

五月に入り、理香は生理不順を彼に訴えていた。妊娠の恐れがあると言う理香に対し、アントニオは金を渡して墮胎するよう冷酷に言い渡した。彼女は産婦人科に行った後で、「妊娠ではなかった」と彼に告げているが、本当のことかは確認できない。

さらに、今度は、その友人を精神的に追い込むよう指示が出た。しかし事前に理香が接近できなくなり失敗した。芽衣が転校したためだった。

現在、ライオンからアントニオに最終命令が出ているが、暗号化されており現在は詳細不明。友人を消す作戦の一つと思われる。……と言う内容だった。

これだけ聞かされて芽衣は少し心が動いた。心配していた理香だが、男とよろしくやっており、彼の指示で芽衣に手を出して手なずけるか、消すかする予定で、理香もそれに協力的だったのだ。芽衣は、理香に対し少しあきらめの念が沸いてきた。

「この、情報だと、そのうちあたしも殺されそうな気がしますね」

「だから、護衛をつけているんです」

「彼女の妊娠は本当ですか？」

「メール情報では真偽は不明です」

「病院の診察記録も調べたんでしょう？」

マッケイ氏は別のファイルを取りだした。

「これをあなたに知らせることは違法行為です。質問の答えですが、本当です」

「じゃあ、男に気をつかっていたのですね」

「多分そうでしょう。墮胎しろと言われて、嫌われたくなかったので、内緒で中絶して、妊娠じゃなかったと、言ったのだと思いますね」

マッケイ氏はそう、淡々と述べた。芽衣は少しやりきれない気持ちだった。

10. 窮鼠《きゅうそ》猫を噛む

10. 窮鼠《きゅうそ》猫を噛む

ニュージーランドでの秘密工作が始まると、しばらく芽衣の出番はなくなり、マッケイ氏も東京から指示を出しているだけで、ときどき、紙の手紙で状況を知らせてくれるだけになった。学校はしばらくお休みになり、することがなくなってしまったが、最近では二学期に備えて家でも勉強するようになっていた。この頃になると、古川恵子もたまに遊びに来ることもあったが、理香の時とは打って変わって母親の態度が違っていた。芽衣にはこんな子と付き合いなさいと言い、健一のお嫁さんにもいいかしらと、すっかり古川を気に入っていた。芽衣も今となっては、どうして理香がこの母に嫌われていたのか、少しわかりつつあった。

八月十二日に、芽衣は一度、千葉の理香の家に様子を見に行った。

朝方、電話を掛けると理香の母親が出たので、そのまま行くことにした。おしゃれをしようかと思ったが、現在の理香の状況がかなり悲惨だと本人が言っていたので、地味な、と言っても普段から地味なのでそのままの格好にした。白っぽい無地の半袖ブラウスと、膝丈の地味目のプリーツスカート、素足にサンダルというのが最近している服装だった。古川と付き合いだしてから、何故だかジーパンはやめてしまった。

家を出て駅で、総武本線、錦糸町から幕張までの切符を買い、電車に乗った。本当のところ理香からは細かい住所は聞いていないし、彼女は話したくなさそうだった。でも、わかってしまったのは、アントニオを監視しているマッケイ氏の情報からだった。

駅の近くでショートケーキを買って、住所をたどって歩いていった。じりじりと太陽が芽衣の頭の上で照りつけた。

——もっと、早く家を出たらよかった。

普段、学校に行っていると、この時間帯の外の暑さをあまり実感できていなかった。冷房の効いた、理科室にいるか、外のプールで泳いでいるかしていたのだ。彼女の住所にたどり着く頃には汗でブラウスの背中が肌にくっついていていた。

外から見た感じでは、理香の家は、悲惨どころか、豪邸と言っていっくらいだった。駐車場には3ナンバーのドイツ製セダンがとまっている。庭も広く、芽衣が見た感じでは、百坪以上はあるなと思った。

結城勝太郎、それが、理香の祖父の名前だった。立派な門に表札が掛かっていた。母親の実家だが、どう見ても資産家のようなだし、ここに住むことと、彼女のにおわせていた悲惨さとがどうしても頭の中で結びつかなかった。

ぴんぽーんと、インターホンを鳴らすと、彼女の母親が出た。芽衣が名乗ると懐かしそうに出迎えてくれた。

「まあ、芽衣ちゃん、こんなに遠い所まで来てくれてありがとう。暑かったでしょう」

「いえ、それほどでも」

「まあまあ、こんなに汗をかいて。早く入って、さあさあ」

芽衣は手を引かれて今度は大きな玄関ドアをくぐった。玄関も広く、墨田区に住んでいたときの家より一回り大きかった。

芽衣がリビングに案内されると、理香の祖父母と本人がいた。理香は最初のうち、久々に尋ねてくれた友人に対し嬉しそうな態度だったが、転校の件に触れると段々と不機嫌になった。

「芽衣ちゃんはどこに転校したの？」と母親が聞いた。

「本郷女子学園です」

「まあ、いい所ね、確か、ほら、お婆さんの所のあゆみちゃんが行ってたんじゃない」と、祖父に尋ねた。

「そうだったかな。理香もどうして高校に行かないんだ？」

答えない理香の代わりに母親が返事した。

「この子ねえ、こっちに来た最初の日に、この女子校に手続きしに行ったんだけど、少しして嫌だと言い出して聞かないのよ」

芽衣は意外な気がした。あんなに学校に行きたがっていたのに、家庭環境のせいで行かないのだと思っていたら、実際は全く逆で、こちらで裕福な生活を送り入学手続きまで済ませていたとは想定外の出来事だった。

理香はぶいとそっぽを向いた。

「芽衣ちゃんはすっかり大人っぽくなったね、それに比べてこの子は、段々と幼くなって行くみたい」

母親がそう言うと、理香の目がぎらりと光った。芽衣は恐ろしく感じた。もともと、理香はプライドが高い女の子なのだ、その前で芽衣を誉めて、本人をけなすような発言はよくなかった。

すっかり機嫌を損ねた理香に案内され、芽衣は彼女の部屋を見せてもらった。やはり、二階の南向きのいい部屋だった。ただ、以前と違い、机は使われておらず、鏡台の上の化粧品は綺麗に整頓して置かれていたが教科書や参考書などは紐でくくられて部屋の隅に積まれていた。

「理香、勉強はしてないの？」

「見たらわかるじゃん」

「転校できないって嘘だったんでしょ？」

「聞いた通りよ」

「どうして？」

「あんたも行ったらわかるよ。でも、あんたがいなかったら我慢して行ってたかも知れないけどね」

「どういう意味？」

「偏差値最低の高校なの、行ったら、みんな髪を赤く染めててスカート短いし化粧は濃いし、爪も真っ赤だし、高校なのか風俗なのかわかんないようなところ。あんたは、最高の進学校よね。あんたのこと知らなきゃ平気だったかも知れないけど」

「まだ、嫉妬？」

「自分でもわかんないの、嫉妬してるかも知れないし、別の理由でいらいらしてるだけなのかも知れないし、でも、あんたが高校からいなくなって自殺したという噂を聞いたときは、正直ほっとしたかも」

そんなひどいことを言われても、不思議と腹が立たなかった。

「あのさ、……」

言い掛けて芽衣はやめた。

「何よ」

「あたしのことに構うより、自分の将来のことをしっかり見つめた方がいいよ」

「あんたに言われたくはないね！」

理香はとうとう怒りだし、芽衣はあきらめて帰ることにした。元々、悲惨な生活を送っていると思ったから、様子を見に来ただけだったので、無事なら別に構うことなどなかったのだ。

玄関で母親に挨拶して、小走りに駅まで戻った。

電車の中で、理香のことを思い出すとやはり憂鬱だった。偏差値最低の高校と言っていたが、正直なところ、以前いた緑が丘高校も公立では最低だったし、化粧っ気のなかった芽衣や山中志乃たちをのぞき、派手なところはあったし、上級生の女子のスカートはパンティが見えそうなくらい短かかったのだ。だから、本気で今回の転校先のことを批判しているとは思えなかった。やはり、芽衣が名門進学校に進んだことと絡めて僻んでいると考えた方が良さそうだった。それに、こんな豪邸に住んでいながら悲惨だと言っていたのも、どこか僻みがあったのだろう。

家に帰り、自分の部屋に戻ると、しばらくして健一が入ってきた。芽衣はぼうっとして気付かなかった。

「おい、勝手に入らないでって言わないのか？」

そう言われ、芽衣ははっとして振り向いた。

「はっ、びっくりした。おどかさないでよ」

「ふふん、おどろくのはこれからだ。大使館のアンダーソンから連絡を受けた。FBIがトーマス・ジェファーソンの銀行口座を凍結したそうさ。容疑は児童ポルノ頒布、青少年への麻薬密売とその資金洗浄だ」

「トーマス？ 誰それ」

「おいおい、お前の作戦だ。ライオンの使っている人間様の名前だ。いくらあったと思う？」

「そうねえ、一億円？」

「ちっちゃ、ニューヨークに本店を持つJFK銀行を含む二十の銀行に合計で二十億ドルあったそうさ。日本円でざっと二千四百億円だ。芽衣のお小遣いで二百万年分？」

「下らないこと言わないで、そんなにあったの？」

「まだ、あるかもしれないと、CIAまで動き出したそうさ。押収した金は誰も知らない金だから、彼らを使うのかも知れないな、道理で熱心なはずだ」

「ひっどーい、あたしにはくれないの？」

「馬鹿だな、今の学校の授業料や、この間のスーツなどには、こういう予算が振り分けられるんだ。覚えておけ」

「うそ、何だか、悪事の片棒を担いでいるみたいじゃない」

「そう言う考え方はよくない。悪人を懲らしめる立場だ。警官は泥棒がいないと生きていけない職業だが、だからといって卑しい仕事とは言えない。これと一緒に」

何だかよく解らないが、うまく言いくるめられてしまった。

次の日、勉強会が休みなので、アメリカが夜間になる午前中に、少しマッケイ氏の作戦を調べてみた。彼もライオンの活動が活発化しているさなかに、最終段階で頓挫することをおそれて、コンピュータ上に最新のファイルは置いていなかった。仕方がないので、ニュージーランドの現地情報を探してみた。

現地のうわさ話が、個人の掲示板に数多く見受けられ、トーマス・ジェファーソンの電力会社への要求に対して、かなり反発している風だった。専用のガスタービン発電所を目論んでいるとか、はては原子力発電所の建設計画の噂もあったが、これらは、マッケイ氏の現地エージェントがばらまいた噂であろうことは想像が付いた。

興味深いのは、トーマス・ジェファーソンの銀行口座が凍結されたのは一般には知られておらず、弁護士のジョニー・バックスは住民の反発に根をあげて辞任したになっていた。いまは、パラオで悠々と暮らしているらしい。

——へえ、弁護士も辞任したのか？

だとしたら、ライオンを守ってきた人間のスタッフが誰もいなくなったことを意味した。

兄が帰宅したときにそのことを聞いてみたが、彼にもこの情報が入っていた。

「いよいよ、最終段階だ。バックス弁護士は漁業法違反でこれから逮捕されるそうだ」

「漁業法？ 密漁でもしたの？」

「いや、大統領のプライベートビーチで魚を釣ったらしい。まあ、別件逮捕もいいところだ。お前も気をつけろよ」

「じゃあ、これからインバーカーギルで住民運動が起こるの？」

「予定ではそうだが、もうその必要はないかも知れない。マッケイ氏のエージェントが電力会社にいるから配電を止めるだけでいいからな。もう、訴えたり騒いだりされる恐れは全くない。ただ、……」

「何よ」

「窮鼠猫を嘯むと言う例え通り、このライオンも最後に抵抗するかも知れない」

「ライオンが鼠になるの？」

「馬鹿、例え話だ。お前に馬鹿な友人がいるだろう。古川ではなくて理香の方だ」

「彼女？ 反省してるように思うけど」

「甘いな、それに、アントニオの行方もわかっていない。もしかしたら、お前を人質にとってマッケイに恐喝を仕掛けるかも知れない」

「あたしを？」

「だが、マッケイはそんなことで作戦を変更するやつではない。要するにお前の身が危ないのだ。レイプされて殺されて海に沈められるかも知れない。だから、一人で出歩かないことと、この理香とかいうやつには絶対に会わないよ。いいな」

「理香は性格がねじれてきたけど、そんな子じゃないよ」

芽衣は、健一のいうことを信じる気になれない。

1 1 . 罨

11. 罨

八月二十日、お盆休みも残り少なくなったが、芽衣は学校に行って古川と会うのを楽しみにしていた。お勉強しようと机に向かった、そんな矢先、急に携帯電話が鳴った。時計を見ると午前十時だった。

「はい、黒澤です」

「ごめん、理香だけど」

「珍しいね、理香から電話くれるなんて、でもどこから掛けるの？」

「誰にも言わないでくれる？」

「いいけど」

「港区のステーションホテルにいるの、家出中でき」

「ええっ、なんでなの？」

「この間ね、妊娠しているのがお母さんにばれちゃって、あたしも開き直って喧嘩したの、で、しばらく家には帰れないのよ」

いきなり妊娠と聞いて驚かないのも不自然だと思ったが、あまりに情けないと、やはり驚けなかった。

「うちに来る？」

「いや、そんな相談じゃなくて、……」

「どしたの？」

「病院に一度行ったんだけど、身体の具合が悪いの」

「ちょ、ちょっと、それってあたしに相談することじゃないよ。彼氏は知ってるの？」

「連絡が取れなくて困ってるの。あ、痛たた」急に叫びだした。

「大丈夫？ 救急車呼ぼうか、そこどこにあるの？」

「誰にも連絡しないで、お願い」

芽衣には迷惑な朝っぱらからの悲痛な叫びだった。相談されてもお産の経験もないし、病院に連絡するくらいのことしか思いつかなかった。

「待ってて、あたしがそっちに行くから。一緒に病院にいこ、ね？」

「うん」

「部屋は？」

「五〇三号室」

それだけ聞いて、携帯電話と財布だけ持って家を出て駅に向かった。ホテルの場所は電車で移動中に携帯電話で検索した。ステーションと名の付くホテルはあちこちにあった。新橋駅で降りた後、かなり探し回った。よくよく考えると誰かに聞かれても、場所が特定できないように故意にどこにでもありそうな地名とホテル名を使ったような気も

した。すでに、マッケイ氏からも彼女と会わないよう警告を受けていた。でも、どこかで彼女を信じたいし、芽衣を頼ってくれる理香の気持ちに応えたい所もあった。

三軒目のステーションホテルのフロントで聞くと、五〇三号室の結城理香と言う名前があった。三日前から泊まっているらしく、彼女の話の内容と一致した。芽衣はエレベーターに乗って五階に上がった。エレベーターホールから三番目に五〇三号室があった。ドアをトントンとノックしたらスッと十センチほど開いた。

芽衣がドアを押して開けると、理香が悲しそうな感じでうつむいていた。

「どうしたの、理香、大丈夫」

芽衣は部屋に入り理香の肩を抱いた。そのとき背後に人の気配がした。

理香がにやりと笑った。芽衣が後ろを振り向こうとすると腕をがっちり頑丈な男の腕で捕まれてしまった。理香は余裕の笑みでドアを閉めて鍵を掛けた。

にっこりと微笑んで、動けなくなった芽衣のほっぺをなでた。

「ちょっと、どういうこと？ 困ってたんじゃないの」

「ふふん」

芽衣の問いには答えずに、理香は芽衣のブラウスのボタンを外し始めた。

「ちょっと、やめてよ。なんのつもりよ！」

芽衣は体をよじって抵抗しようとしたが、がっちり肩をつかまれて動けなかった。理香はボタンを外すと、芽衣を抱くように背中に手を回してブラのホックをはずした。小さな乳房が丸見えになった。

芽衣の顔が真っ赤になるのを見ながら、今度はプリーツスカートのボタンを外し、器用にプリーツの間のジッパーを手探りでつまんで引き下ろした。お尻が小さかったのでスカートはそのまま足下に落ちてしまった。パニックに陥ったのをよそ目に理香は芽衣のパンティーを下までおろした。

男のいる場所で、全裸にされてしまい、頭が回らなくなってしまった。

「え、なに、何をするのよ……」

芽衣が小さな声で抗議した。

「ふふ、かーわいい。あんたこれからレイプされるんじゃないかと思ってるでしょ。でも、甘いわ」

「意味が分かんない」

「これからね、このアントニオとね、ベッドに入ってもらって一緒に写真を撮るの」

「はあ？」

「あんたの雇い主がね、アントニオの敵対者らしいのよ、アントニオの女だと思われたらあんたが首になるんだって、それであたしは協力したの。それだけじゃないよ」

「何なの」

「ふふ、お前の雇い主は情報部員だ。彼は俺をマークしている。お前が俺の女だとわかれば、お前の情報を信用しなくなる。今回のお前達の動きを攪乱させてもらうのさ」

アントニオは淡々と説明した。少し訛りのある日本語だった。見た感じでは本当にイタリア人っぽかった。彼の言う、雇い主とはマッケイのことだろうと想像は付いた。だ

が、アントニオはマッケイの正体など知らないはずだし、芽衣としては別にそんな写真をマッケイに見られて作戦からお役御免になったとしても、かえって好都合だった。が、本当に甘くなかった。

「それだけじゃないよ。この写真をね、あんたの高校のお友達……古川恵子たちに配って、外国人相手に売春している変態女ですって言いふらすの。もう、あの高校には行けなくなるかも、ふふ」

理香は薄気味悪い笑いを浮かべた。芽衣は恐ろしくなったが、それ以上に、そんな写真を古川恵子に見られたら自殺ものだし、何より、彼女に軽蔑されて口をきいてもらえなくなることで、今の楽しい高校生活を失ってしまうことが怖かった。だが、抵抗するには余りにひ弱すぎた。ぴくりとも動かない。

「理香、お願い、何でも言うこと聞くからそれだけはやめて、ね」

「ふーん、前の高校ならさっさと辞めたのに、今度は辞めないんだ。そう、いいわね、いい高校で」理香はねっちりと芽衣をいじめた。

「お願い、理香！ もう許して。何でも言うこと聞くから」

芽衣の目から涙がこぼれていた。

「そう、何でも聞くの？」

「はい」

「じゃあ、死ねば？」

理香は冷たく言い放った。何を言っても駄目だと思った芽衣は精神的に抵抗できなくなった。死にたいのは前と同じだったが、そんな写真を残して死にたくはなかった。

「じゃあ、アントニオ。どうぞ」

「OK」

アントニオはいつの間にか服を脱いでいた。結構筋肉質な体格だった。芽衣は軽々と抱きかかえられ、部屋の奥にある二つのベッドのうち右側の上にぼいと投げられ、アントニオはその上に覆い被さって芽衣の上半身を押し込んだ。そして、芽衣の膝を割って下半身を重ねた。これでカメラに収まれば多分、抱かれているように見えるのだろうと芽衣は思った。

がっしりと男にベッドに押しつけられて、先日、ライオンに対して「物理的手段を取る」と言っていたのを思いだした。兄貴は破壊すると言ったが、まさに、ライオンから自分に向けられた、物理的報復のように思えた。

アントニオには不思議と抵抗できなかった。前の高校の男子を見ているときには、馬鹿で汚いだけの存在だった「男」が、アントニオに抱きかかえられて肌と肌が接触したときに、むしろ心地よい感触がし、彼に身体を触られるにつれ、芽衣の「女」としてのスイッチを入れられてしまった気がした。高校に入ってから漠然とした興味の対象だった「男とする」という行為に興味を抱いてしまったせいかもしれなかった。芽衣は段々と下腹部が熱くなり濡れてくるのを感じた。

芽衣がアントニオに手でうながされてカメラの方を向いた。理香が嬉しそうにデジタルカメラのシャッターを切った。芽衣はもうお終いだと思うと同時に理香を呪った。散々心配してあげたのに最後はこういう仕打ちをされたのだ。

芽衣は、アントニオの顔を見上げると、日本人離れした彫りの深さとたくましい肉体に少し感じてしまう自分を見つけていた。彼の体が乳房や下腹部に触れると、体に電気が流れたような感じがしてこのまま彼を受け容れたい衝動にかられた。

でも、この陰謀で芽衣の高校生活を奪われることに怒りと復讐心が湧き上がっていた。このとき、理香を犠牲にして、この場を切り抜けようと言う考えが頭に浮かんだ。

「ねえ、アントニオ、あたしあなたのことタイプかも、なんです。よかったら本当に抱いてもらえませんか、うふ」

芽衣は潤んだ瞳でアントニオにせがんでみた。

「物好きな女だな、本気か？」

「うん、本気。感じてしまったの」

芽衣は細い腕をアントニオの首に回した。アントニオの顔が近づき、彼の息づかいが首筋を流れ、ますます感じてきた。

「ねえ、アントニオ、あたし以外の子とはしないでね」と、理香に聞こえる声でいい、理香の方を向いて「理香、ごめんね」とつぶやいた。うっとりした目つきで。

計算通りに理香の表情が変わった。頭に血が上ってまるで鬼のように見えた。

「ちょ、ちょっと、話が違うよ。写真を撮るだけって言ったじゃない、アントニオ！」

「うるさい、黙ってろ」

アントニオはいつもの本性を見せた。と芽衣は直感的に感じた。怒鳴られた瞬間、理香はひるんだが、次の瞬間、芽衣の目をにらんだ。アントニオまで奪ったことに殺意すら覚えてしまったようだった。理香は近くにあった花瓶を両手で掴んでそのままつかつかと歩み寄ってきた。芽衣を殺そうと思っていることは彼女の表情から明白だった。そして、ベッドの側に立って花瓶を両手で振り上げて、渾身の力を込めて振り下ろした。芽衣にとどめを刺すかのような勢いだった。芽衣はアントニオがさわっている腰を少し動かしてアントニオを盾にした。彼は芽衣の下腹部を愛撫して濡らすのに夢中になっていたのだから、理香の行動には気付かずに、花瓶は後頭部を直撃した。

ごつんと言う鈍い音が芽衣にも聞こえるほどだった。

アントニオは後頭部からポタッと血を流した。シーツの上に血の跡が残った。まるで芽衣が処女を失ったかのようなシチュエーションになり、理香は、自分のやってしまったことと相まって余計に頭に血が上ったようだった。

頭に来たアントニオは大声でわめきながら、理香に掴み掛かり、彼女は花瓶と大声で応戦した。元々、理香はアントニオの仕事のために抱かれただけの女だった。今日も芽衣をおびき出すためだけに仕方なく理香を連れているに過ぎないのだ。もう、この場で殺されるかも知れないなど芽衣は漠然と思った。

芽衣はシーツを体に巻き付けて隠し、ベッドから降りようと一歩出てこけてしまった。下半身に力が入らなくなってしまって立つことが出来なかった。アントニオが指で愛撫した跡が熱くなっており、下腹部の神経がものすごく過敏に感じていた。このとき、芽衣はいままでどうして理香が乱暴に扱われながらアントニオと別れられなかったのか、その理由がわかったような気がした。

少し冷静になり、シーツを体に巻き付けたまま膝と肘で体を支えて前進し、理香が元いた場所の下に落ちていたカメラを拾った。このままデータを消去しようと思ったが、後で復活させることは不可能ではない、それで、メモリーカードを抜き出してどこか捨てる場所を探した。

ドアの前では二人がののしりあってもみ合いをしていた。アントニオは女と寝るだけしか取り柄のない男だったが、その相手の理香も相当「重い」子だと今になって思った。本来なら父親の会社のパソコンにウイルスを仕込んだ段階で、捨てられているはずだったが、芽衣の介入により、再び日本に潜入するため理香を利用したに過ぎないのに、彼女はそんなことは知らず、アントニオにのめり込んでいた。芽衣は彼らを横目に、メモリーカードの処分に関り、口の中に入れてしまった。もし殺されるなら、その時に飲み込んでしまえと思ったのだ。カメラの本体は、部屋にあったポットに放り込み、冷蔵庫のジュースを混ぜて沸騰ボタンを押した。これで大抵の電器製品は使えなくなる。

後は脱出方法を考えなければならないが、服は彼らの向こう側だし、ドアにも近づけなかった。ドア下部にはかすかに隙間があり、廊下に数人の足が見えた。合図したらフロントに連絡してくれるかも知れないと期待を持った。

チャンスは、理香が作ってくれた。彼女がぶんまわした花瓶がアントニオの頭を空振りしてドアに当たって砕け、派手な音を響かせた。武器がなくなった理香はアントニオに首を絞められ、殺され掛けのニワトリの様な声を出した。

ドアノブをガチャリとねじり、シリンダーキーを開ける音がした。そして、どんと勢いよくドアが開き、二人の黒い服装の男が飛び込んで来、次の瞬間もう二人が武器を持って飛び込んできた。芽衣はホテルの人間ではないと思った。

屈強そうに見えた、アントニオだったが、最初に入ってきた男に簡単にねじり伏せられ、床に頭を押しつけられた。そして、金属製の器具を押し当てられて急に静かになった。芽衣は新たな恐怖に襲われた。黒服のもう一方は理香に同じことをして、彼女も意識を失い床に横たわった。

後から入った二人の男は、拳銃を構えて部屋の奥、ベッドの下、クローゼットの中を調べ、誰もいないことを確かめて銃を胸の中にしまった。革のホルスターが見えた。

「黒澤芽衣さんですね？」

「は、……」

芽衣は自分が裸であるのが急に恥ずかしくなり、シーツの上から手で胸を押さえた。男達は芽衣を直視しないよう気を配りながら、後の処置を急いでいた。

「我々は、マッケイ大佐の部下です。あなたの護衛で張り込んでいました。救出が遅れたのはお詫びします」

「いいえ、でも本当は護衛じゃなくて彼の逮捕じゃないんですか？」

「そんなことはありません」

彼の後ろでは、大きめの旅行用スーツケースにアントニオと理香が一人ずつ、体を折り曲げられて詰め込まれていた。そして、綺麗にふたをすると、ごろごろと一人ずつ床の上を引きずって行った。

「あの、怪我はしていませんか？」

「大丈夫です」

「レイプなどと言う意味です」

「大丈夫です」

「言いにくいなら、緊急避妊薬があります。お渡ししておきますのでお早めに服用してください。七十二時間以内ならかなり効くようです」かなり、手慣れた言い方だった。

「だから、大丈夫ですってば」

「そうですか、では、これで、失礼します。あと五分で清掃員が来ますので、服を着てここを出てください。それから、ロビーにマッケイ大佐が来る予定ですので会ってから帰って下さい」

男達が出て行き、急に体の力が抜けた。ふうっと、溜息をついたがあと五分しかないということを思い出した。芽衣は何とか立ち上がり、ドアの前に落ちていた下着と洋服を取りに行った。ドアの前には鏡があり、ふと、自分の姿を見ると以前……中学生の時より断然スタイルがよくなっているのに気付いた。年齢的に成長したせいもあるのだろうが、古川達と毎日泳いだり走ったりして、夏休みとは言え、だらだらしていなかったのが、引き締まった理由と思われた。

時計を見てあわてながら、下着をつけてブラウスを着た。スカートをはいてサンダルをつっかけると、少し余裕があり、髪を直してから、歯に挟まっていたメモリーカードをつまんでブラウスのポケットに隠した。後で焼いてしまおうと思っていた。廊下に出てしばらく歩くとエレベーターホールまでの途中でサングラスを掛けた清掃員二人組と出会った。どう見てもただものではなかった。多分マッケイ大佐の部下でアントニオ達が残した証拠の採取に向かうのだと思われた。

エレベーターで一階に降り、ロビーを見渡すと端っこのソファーにマッケイ氏が座っていて、芽衣の方を向いて手を挙げた。

「どうもすみませんでした」と芽衣が頭を下げた。

「いや、護衛が遅れて申し訳ない。あなたが急に移動したので追いつかなかったようです」

「すみませんでした」

「それに、渡辺理香に近づかないように言ったでしょう」

「すみませんでした」

芽衣は何度もぺこぺことお辞儀した。

「まあいいです。それから、さっきライオンの電源を落としたと連絡がありました。資金

がなくなり、弁護士のジョニー・バッカスが辞任したので電力会社のこちらのスタッフが即刻動きました」

「早いんですね」

ライオンが息の根を止められたことに、幾ばくかの安心感を覚えたが、何故かあのライオンに自分の姿を重ね合わせ、少し可哀想な気がした。利用されるだけされておいて、最後に「死ねば？」といわれた芽衣と少しも変わらないと思ったのだ。

「ええ、障害となるのはは訴えられて表沙汰になることだけでしたから。彼さえいなければ何でも出来たんですよ。エージェント達はアントニオ同様おいおい拘束していくことになりませんが、大物はいないのでそう急ぎません」

「そうですか、……あの、では、この研究自体の責任も問われるんですか？」

「もちろんです。国際問題にして損害賠償を請求するのが本来のやり方です。しかし、もみ消すことも出来ますよ、お嬢さん」

「あたしの身体でいいですか？」と、芽衣はにっこり微笑んだ。

「ふふ、それくらいでは、割に合いません。被害は甚大です」

そんなことを言われて、芽衣はむっとした。

「じゃあ、どうすれば？」

「あなたは頭がいいからお気づきかと思いましたが、……ただの海軍大佐が高校生の女の子に協力して飛び回る理由はありません。最初から、このプログラムを他の国に知られることなく収奪する目的がありました」

「え？」

「国防総省とNASAがこれを欲しがっています。それで今回わたしの所属する組織が動き回ったんです。日本側もこの件でこれを極秘裏に手放すことに異議はないでしょうし」

今回の事件が、最初から仕組まれていたものではないかと疑いを抱いた。もっとも、支援システムの存在は前から知っていたらうから、もしかすると、それをライオンにしてしまったのも彼らかも知れなかった。でも、こう都合よく事件を解決しプログラムを頂くなど厚かましいにもほどがあると思った。

「あの、あたしの存在を忘れてませんか。全部見てたんですよ。喋っちゃいますよ」

芽衣の口調にマッケイ氏はふふんと笑った。

「あなたは我々を裏切れません。あの高校をやめたくないし、友達も失いたくないのでしょう？」と、恐喝的口調で言った。

「げ、まさか」

「アントニオ・レオナルド・コヤナギとの関係を知っているのは、彼女のカメラだけではありません」

芽衣は少し慌てた。まさか、彼女のカメラとは別に監視されていたとは思わなかった。しかし、監視されていたなら、救助はもう少し早かったはずで、アントニオか理香のどちらかに盗聴マイクを仕掛けていたなら、花瓶の割れる音がするまで中の詳しい状況がわからなかったはずだと思った。

「それは、はったりですね？」

「どうしてそう思うんです？」

「マッケイさんはいつも、写真などの具体的な証拠を示します。何も無いのは憶測の域を

出ない。違いますか？」

「ふふ、やはり、頭がいいですね、その通りです。わたしは、九月から大使館に配置転換になり、しばらく日本勤務になります。あてになる仕事相手がいないと悩んでいたら、あなたが現れた。いいパートナーになれそうです」

「も、もうこんなことしません」

芽衣は狼狽して答えた。これ以上友達のいなくなる出来事に関わりたくなかった。

「情報分析だけでも手伝って下さい。プログラムのメンテナンスもあるし」

「あのプログラムが、またライオンになっても知りませんよ」

「今度は飼い猫にしますよ」

「それから、彼女たちの処分はどうなるんですか」

「銃殺でも射殺でもご希望があれば伺いますよ」と、冗談を言った。

「そんな、助けてやって下さい」

芽衣は理香のことを恨んではいたが、復讐などする気にはなれなかった。以前の芽衣なら、銃殺と言っていたかも知れないが、古川と付き合いだしてからは、彼女に知られて恥ずかしくないかどうかに行動の基準が変わっていた。

「おや、どちらも？」

マッケイ氏は意外な顔で芽衣を見つめた。銃殺を期待していたのかも知れない。

「はい、どちらも、憎めないんです」

アントニオも理香と同様、憎めなかった。

「わかりました。ただ、アントニオについては、すでに数十件の詐欺や恐喝の余罪があるので合衆国国内で裁判を受けることになります。死刑にはなりません、結構重いと思います。彼女については日本の警察に引き渡しますが、あなたへの監禁容疑だけです」

「じゃあ、訴えません」

「いいんですか？」

「はい、ただ、彼女のあたしに関する記憶だけを消して元の高校に戻れるように取りはからって欲しいんですが、出来ませんか？」

「前と同じ相談ですね。一度、NASAの科学者にでも相談してみましょう。火星人に掠われたと主張する人の治療経験のある医師を知っていますので。それから高校については教育委員会に根回しが必要ですね。あなたのお兄さんに頼んでみましょう」

芽衣は、今回は、前と同じ様な怪しげな薬を期待していた。そんなものが本当にあるのかかわらないが、やはり、彼女には元の健全な少女に戻って欲しいという気持ちの方が強かった。芽衣さえいなければ彼女は普通に生きていけると思っていた。

最後に一つだけ気になったことがあった。

「あの、あたしの居場所がどうして分かったのですか？」

「企業秘密です、と言いたいところですが、もう他言は出来ないので教えましょう。渡辺理香所有のブラジャーのワイヤーに盗聴マイクを仕込んでいました。アントニオ・コヤナギを尾行するためです」

「ぶ、ブラ？ 理香はいくつも持ってますよ、そ、それに、……」

「彼女が持っているのは八つです。そのうち、アントニオとのデートの日だけの特別お気に入り的一個があったようで、それを使用することでアントニオの行動をつかんでいました。彼も素人ではないので、こうもしないと尾行しきれませんでした」

芽衣はあぜんとした。だったらあの現場の音声を全部録音されていたことになるし、理香と芽衣との確執も全部知っていたわけだった。少し悔しかった。

12. イッツ・オーバー

12. イッツ・オーバー

芽衣が憂鬱な顔で家に帰ってご飯を食べていると、健一も無然とした顔で帰ってきて冷蔵庫からビールを出してぐびびっと飲んだ。

「お兄ちゃん荒れてるね」

「お前何か聞いているか？ 支援システムの件だ」

「はあ？」

「経産省のやつらが乗り込んできて、この研究を中止にされた。アメリカでの被害に関しては、このプログラムを引き渡すことでバーター取引となった」

「じゃあ、西浜貿易とかは？」

「お前、……まだ言っているのか。国内でライオンの直接の被害企業のみ、FBIが押さえているトーマスの金の五パーセントの範囲内で補填してくれるそうだ。要するにあのシステムが一億ドルで売れたようなものだ。面白くない」

「ふうん、じゃあ、理香のお父さんも戻れるのかな」

「一度解雇した人間を戻すことは出来ないし、会社のミスを認めることはライオンの存在を認めることになるから経産省が認めないだろう。だが、陰で彼の再就職を助けることはあり得るだろうな。まさか、また、友達になりたいのか？」

「ううん、もういいの」

「まあ、いい勉強になっただろう。こちらも、経産省には極秘であるシステムの改良をすすめるんだ。マッケイには言うなよ」

「どうかな、あたし、マッケイさんもお兄ちゃんも裏切れない女になっちゃったし」

「意味がわからん」

九月一日、夏休みが終わり、芽衣は颯爽とブルーのリボンの制服を着て学校に向かった。駅の近くのアパートの前で、とんとんとんと階段を駆け下りて来る少女を見かけた。理香だったが、芽衣の姿を見ても気付かない様子で、一瞬ぶつかりそうになり、恥ずかしそうに会釈してそのままカバンを肩から提げて駆けていった。以前より少し太めになっていたが、芽衣と出会う前の快活な女の子に戻っていた。

また、マッケイ氏にお金で雇われたと言うかも知れないからすぐには信用出来ない。でも、それで彼女が自分自身に言い訳し、芽衣を無視して元の生活に戻るのならそれでいいと思った。

——ばいびー、理香。と、心の中でお別れを言った。

彼女の後ろ姿を見送って、芽衣もくると髪をなびかせて回れ右して、再び駅に向かった。何となくスキップしていた。了

野生のライオン 捨てられた人工知能

著 黒川文

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
